増補
改正

俳諧歳時記栞草

一

増補改正
俳諧
歳時記
栞草

全五冊

伝記考証
三書堂梓

俳諧歳時記栞草序

俳諧の作るよりも志て活法の妙もまことに風の寺巷の年ふる曲亭主人が編る歳時記は神祭佛事等のものを用ひるやうに注したれそうひ学の階梯とかりて出るとたとへあるに社くこの記を序むとす毋

左りふそれとそ木鳥
歟まこと其餘の註釋全
うらはるその多くして
時ふ怡みなら〳〵るるもあ
ひとぬへしとおの社いとるたのる
打〳〵其見らぬを補い
志者きをはふき誤ひ
をこ山し　先て生詞の頭字
をとりて彩を物ち歳

時記栞草と名付たか
せて坐右最愛の物
とし〳〵て老むなる志
等筆墨の物るしいつ志の
見せ書ていく此書ハ
をいとめをを社会ふし
野のよりも博識ぶて
志ひををハ礦をとこも樓
木ふちりも絶形むす

むつ田川の浪乃音このく
ふの色もとかるるよ乃も
古らもき良琳やいと志
豊かにこひしくや百株も
深いれ母の縁ぞまあへ
末つひふこそ阿きへしの
やくふ山乃井乃心るま
る、娯なら候へし

嘉永三年
戌葉月

藍亭
青藍

凡例

○世ふ俳諧詞寄の書あまたありといへども、註釈全からざる故ふ初学の人時ふ臨んで惑ふ事あり。故ふ曲亭馬琴翁先にあらはせる俳諧歳時記ふあるひ増補をなしてそれ見安からん為ふ四季の詞の頭字といろは四十七字ふ部をわかち、註釈となして席上の便りとせり、

○さう かう らう さう せう しやう へう
ちやう てう てふ あう とう の類の仮字つかひを正しく悉く部をさだむる時ハ、却て初学の惑ひとなるべければ、つづく其声の索めやすからん部に併せ出しおくそ(?)。さう かうの類ハ[こ]の部へ、あはせ、せうハ[志]の部、てう てふハ[ち]の部、へうハ[ひ]の部、らうハ[と]の部、又ぢハ[じ]の部、ずハ[づ]の部に併せ出しおき余ハ准じてしるべし

○漢文と倭語に書あらはせるハ専ら初学の人のさとりやすからんが為なれバ、まづなぐさしく本文の詰

路ふいさゝうそひきてゝうゆるもけるべし、
○引書ハ時代の新古よりからぞ只初学の解一安き
と抄出せ、
○近世の俳書ふ出せる、正しからぬ詞ハ悉く省きつ、
○淡雪と春くゝ翡翠、冷麦と夏とし、枯尾花水鬼
鶏、星越の鴨、冬瓜斤鶏の類と冬くと定めるる、
べく蕉門の式ふふくいて、部をこゝろちさるべ増山
の井ホの古式ふ因て編る詞寄とハ大ふうゝ
多くいされハ春の部ふ索てもれとうと思ふ詞ハ
夏秋冬の部ふ索てもれとうと思ふ詞ハ
○近世の詞寄ふ新ふ載せる詞まくあらぞ、さる
と思ひ足らぬくてかくくるとゝ又過ちてもらし
る詞あり、ゝ追加の部ふくへるべきべ
らるぐし、

俳諧の字義

史記滑稽傳 注ニ姚察云滑稽猶俳諧也、詼諧滑利其知計疾出故云滑稽也、○青藍云古今集ハ俳諧とあるより、誹と俳ハ議論諸抄ふそえて一決ぞくしたもあ古今集打聞ふ今の本ふ誹諧とあるハ写し誤まるあり、草の手ふく俳と俳のまぎらはるるとゆゑそで、後ふさるくふいくづく事ふうと、真洲翁の考へのくの如し

通 誹 敷尾切 音斐 説文ニ謗也云云 俳 鋪埋切 音牌 俳優雑戯也云云 同義ふからぞるをるべしさるを隋書侯白字ハ君素、有捷才為儒林郎、通俗不待威儀好為誹諧雑説、また世説新語補の注ふと誹諧とあるとバいくくくへい俳と誹と通ぜくものるるべくくしくる、馬琴翁の説をと

正字

ろし、世説の本文に侯白好二俳諧一とかき、開巻一笑七之巻に引かるゝも、俳諧とあれども、誹を俳の誤りとなること徴し、支考が十論に芭蕉家の書法なりと、人偏の俳諧と用ゆべしといへるも據わり

俳諧之連歌權輿

詩家に俳諧体あるに傚ひて、和哥に俳諧体をまうけ、これに倣ひて連哥に俳諧体あつめて俳諧連哥のはじめとゆふべきは「菟玖波集」雑体連哥之部 俳諧といへる条 奥山に船こぐ音やきこゆらん とのぶるに貫之とあるに續て、あまたる木の実やうみぬらん、又 あやしくも膝より上のさむるかな とのぶるに實方朝臣とあるに、越のわたりに雪やふるらんと附られしなど當時多かりけり、俳諧発句のはじめといふは「同上」斤句連哥とある条 黒男黒

戸の口に五月をあり、堀川院御製云「俳諧十論」文明の頃なりし、山崎宗鑑法師は、其世に俳諧の名あるより、守武望一とともに学びて、百韻をつらね千句をつらね、貞徳貞室は宗匠の名ありしも、唯俳諧の言語をつくらへ批しが、貞室は世に芳野山の花を詠じ、（これはこれはとばかり花のよしの山　貞室）隅田川の鳥に吟じて、（いざのわれ城の點くいふ 都鳥　貞室）其句は和歌の姿情によりべぞ今の俳諧の根さしもやいかん、其のち難波の宗因は武城に檀林の額をかゝげ、俳諧の涅槃は破つゝありしと、耳ならず言諧のをかしきを得て、眼に姿情のさびしさをしらざる云

青藍接ぎるに貞風の涅槃といはれを「五識内にふるさと雪や川のさ飯」五器といふより雪と飯とよそへてなる文檀林風の眼が姿のさびしきをあらはせしは「摺子木も紅葉しけり唐がらし」といへる

例の輕口をさしてかゝるゝに、

葛の松原 元禄五年申 本支考撰

芭蕉庵の叟、一日嗒焉としてかれにいふ、風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし、一回は皂狗となり、一回は白衣となりて、こゝにふたゝび化する處をしらず、かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉られて、雨静にして鳩の声ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし、弥生も名残をしき比にやありけん、蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、蛙飛こむ水の音といへる七五を得給へりけり、晋子が傍に侍りて山吹といふ五文字をかうむらしめんかとおよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ、云云 此句は自己の眼をひらき玉ひて、正風の一派ひろまりけるとぞ、

俳諧の大意

俳諧の名は史記の滑稽傳より古今集にのり、はじまり、連哥にうつりてより、宗鑑をはじめ、守武と学び、俳諧の詞はひろまりたれど、一座の興のいひ捨にして、今の俳諧の姿情にあらねば、且俳諧の心を傳へたる人なかりき、故に芭蕉の翁俳諧に古人なしといひたまひて、そこの門人におしへおきて、家訓の秘文とはなせりたるとぞ、其の俳諧の心とは、虚実の自在より、世間の理窟をはなれて、風雅に遊べるをいふなりとて、さて俳諧は三条あり、世情の人和は、五倫の常法にして、むつましきは俳諧の名とはなる、つくねんとわびしきは風雅の体なるべし、人よく卅三ッをしるときは、身に千重の羅綾をかざるとも、薦一枚のさびをまされ

もロふ八珍の菓肴とつらぬらを、一瓢の飲の楽をおもひ、心う世上の變をわすれて、笑言ふ耳と遊ぎ、むる、俳諧自在のくこのゆべし、こゝろのこゝろをこゝろとこゝろ、ふ遊ふ時ハ、産を破つて業を怠るこいつる、逸のうき名をあくゝ世法の一切もるべし、

増補 俳諧歳時記栞草

春之部 曲亭主人纂輔 藍亭青藍増補

春

漢書律暦志 少陽者東方、東動也、陽氣動物於時為春、春蠢也、物蠢生迺動運、日行東、陸謂之春、

太皞 帝禮月令註 太皞、伏羲木德之君、勾芒心皞氏子曰重、木官之聖神、継天立極生有功德於民、故後王於春祀之、四時之帝與神皆此、義下效之、

勾芒 神月令 其帝太皞、其神勾芒、古文

蒼天 春の天を云、釈名 氣始発色蒼也、

東君 郊祀

記 晋巫祠東君

青陽 爾雅 春為青陽

韶光 漢律暦志 景曰媚景、韶景、韶美也

春の景色のうるはしきを云

正月

夏八寅を以正月とす、こゝを人正と云、商八丑を以正月とす、こゝを地正と云、周八子を以正

月ごとに天正と云 字彙 正字本音去声音政云至秦始皇諱政改為平声音征後生至今濫之

睦月 世諺問答 正月とも睦月とも人々いひならはしたるものなり

むつまじくなるべきとの心なるべしとて心月とむつびごとと名づけたるなるべし

王春月 左傳 春王正月周正月也

太簇 律 月令正月律中太簇高誘曰簇簇也言陰衰陽発萬物簇地而生

立春 月令廣義 周天玉衡六問云太寒後十五日斗柄建艮為立春正月節立始建也春无始至故為之立也

雨水 同上 立春後十五日斗指寅為雨水正月中雨水中気雪散為水也

孟春 元帝纂要 正月為孟春

陬月 潛確類書 正月為陬寅位之月故曰孟陬

夏正 月令廣義 太禹以金德王都安邑國号夏仍有虞以建寅之月為歳首故謂夏正

上春 元帝纂要明詩 初春ハ同シ

太郎月 雪水曰人の子のなぶるがごとくなるを太郎とよび次ぎ次ぎとなるを次郎と云ふなり

初空月 蔵玉 雪ハ降ラズ

霞初月 同上 けうとくもやうやくかすむ

初春月 同上 春ニ初ル月の名なり

早緑月 躬恒秘蔵抄 おそくぬるばかりさくら小枝にこの貫之家隆

暮春 莫傳抄 桃李花開

年端月 莫傳抄 年月名

新月 同上 春ニ月ハ世ニ新しくなるの

二月 潛確類書 仲春者日月會於降婁而斗建卯之辰也

衣更 興儀抄 正月ハのどかなりしと此月ハ衣を更まるなり

着 夾鍾

律 [月令] 律中夾鐘 高誘註 萬物去陰夾陽聚地而生 動啓戶始出 註謂始穿其穴而出也

驚蟄 節 [月令] 蟄虫咸後十五日 斗建 [月令廣義] 驚蟄

春分 中 [月令廣義] 卯為春分二月中 分半也當九十日半也故為之分 夏冬不言分

仲春 元帝 [月令廣義] 香志云春 [纂要] 二月曰仲春

陽中 月令廣義 為陽中萬物以生

如月 令月 [纂要] 二月為仲春 又曰如月又曰令月 日在營室

梅月 [蔵玉] 梅の花の月 風の情と秋のしるべの有家

小草生月 [同上] 草生月まちそるけしのうわさしるべ

花月 未考

中和の節 朝日○唐の德宗の時 上巳九日と加へて三節とす

初三月 [潛確類書] 季春者 日月會于大梁而斗建辰之辰也

弥生 [奥儀抄] 此月とやよひとは草木の弥生るの

この月いよ〳〵生ればやまひ月とも、やよひとは

姑洗 律 [月令] 三月 律中姑洗 高誘註曰姑故洗新也 是月陽氣發生去故就

清明 節 [月令廣義] 孝經緯云春分後十五日 斗建乙為清明 三月策方物

至此潔齊而清明矣

穀雨 中 [同上] 三月中 清明後十五日 斗建辰為穀雨 言雨生百穀清淨明潔也

季春 [孝景] 凡末月曰季月

竹秋 廣韻 竹秋三月 蘭秋七月也

病月 [玉燭宝典] 三月為病月 病音丙 亦曰嘉月

嘉月 同上

禊月 [張衡南都賦] 暮春之禊 元巳之辰 方軌齊軫 殺於陽瀆

櫻月 [蔵玉] 櫻 うすべにの花 四方の山のさくら 家花

見月 [同上] 櫻をまくらにひくつゆ花見月 後鳥羽院

春

惜月 同上 数あるゝ月とともおもゞりとなる絵
うれゆくころの玉とゝみ月 家隆

正月

院拝禮

元日 大府記 延久五年正月一日辛巳、院拝礼、午刻諸卿以下参集、次無畫御座、鹿御簾、次御出、直衣束次関白前太政大臣、右大臣、并大納言中納言、参議以上一列庭中、次殿上四位以下、別當判官代等一列、拝舞了之後、従上薦次第退

嚴島祭

下旬 地の御前八藝州安藝郡にあり記略

嚴島と同体にして毎年正月下の亥日ハ神祭あり、近国より乗船して恭諸すこの祭正月下の亥日より二月初の申日迄十日の間、祝師嚴島の上郷齋所に入て潔斎す、国府の奉幣使社家ハ、未日嚴島へ渡海す、夜半に至て七度半の使あり 道芝記

居籠

九日

実祭

十日 摂州西の宮太神宮の祭し、村民九日の朝より夜ハ戸を閉て出ずして居籠と云、一説に太神前ハ男ハ家ハ居るとゝ、 摂州府志 居籠祭ハ正月初の申日より四日の間に柞の森に申日より亥日に

至りて神事畢る、傳云、此間悪鬼遊行すこれを忌ハるゝこの崇りあり故ハ児女及六畜を他村ハ遣ハ、男子家にあるて門戸閉閾の音を禁じ声を揚ず、民間居籠と云、亥日旅所ハ神事あり、社司左帛を以て口鼻を覆ハ人氣を神輿ハ触ず、榊を持て徒行す、又五穀の雑種を各一器に盛り又農具を村民ハ携て供奉す、神輿旅所ハ迄りて後諸民大ハいとゝよ〳〵と呼ぶ是居籠の義歟 ○ 摂陽群談 云云毎年旧月九日蛭兒尊廣田の社ハ臨幸あり、神の容相美なると以人倫の見んとて耻なるハの謗とありて、村民戸を閉て外へ出ず門松を逆ハさして居籠と云、明且諸家各戸を開て恭詣す、世俗十日夷と云 ○ 謗云云十日ハ恭諸すると十日夷と云、坎神ハ龍耳ハく土にして、恭諸の人社の後の羽目板に敲くに、街にて米花代表蜈蚣ハ判おどもぞ〳〵めぐるに物と賣る下向の人ども笠のうゝ結つけ、又賣る処の烏帽子を買て頭ハ戴き往来の人と笑ハせ奥すると云 ○ 商家ハ坎日太ハ宴と設け客をむかゝ饗應す、江戸にハこの月廿日夷祭を行ハ

寝積 寝舉

寝と稲と和訓同じき故ハ祝詞とする、積も舉も又稲の縁語なり

雑談抄云寝臥と常のごとく唱ふる八病床などにまどろ
みしおりおもひがけぬ涙と成ずと来てむすとと云に同じ
る

葦索

くの部画鶏戸ニ帖すとと云る条ヲ揮

芋頭

芋がしらを頭と唱ふる八例の祝語と云番頭本ハ頭などのかしらとかけてかしらびとなるを用る八多子の義を取る

磯菜摘

八 重

垣 磯辺の若菜ちり

凝かへる

字彙云凝氷堅也○とけし氷の再び結びこりつる意にて洒ぐる

くりつぼ同ドしころも

飯鮹

和漢三才図会云状九五六寸ばかり、其頭鳥の卵のごとし頭中に白肉ごろつ、煮て食へバ其肉粒むしとる飯のおもし故に飯鮹と名く、正二月さかりのころに出て播州高砂の産飯多し

兼三春物

遊糸

荘子逍遥篇云野馬塵埃也生物以息吹者也、希逸註云野馬、遊糸也水気也○杜詩、落花遊糸白日静
○かげろふ糸遊一物なく糸遊ハ異名也 契沖雑記

紙鳶

紙老鴟 風巾とともに同じ、漢高祖陳豨と征する時、未央宮の遠近と量る為に韓信造るといふ

続博物志云今紙鳶ニ糸と引て上るハ小児ぶらしてひとと張てもなど仰ぎ視せしめて小児の内熱をもらさせんが為也、本邦においても小児さらんに弄ぶ小児において益なることあるべし 俳諧歳時記云鳥賊幟と名づけしてもそくしけるふ後のことや、甚形の鳥賊に似たるより名あるべし、江戸の俗章魚といふハ鳥賊に対しての名也、伊豆よりハ三河迄の間ハ五月上る、其製三河尤巧也

二月

虎杖

蘇頌図経 虎杖三月生苗茎如竹筍状上有赤斑点、初生分枝子葉似小杏葉七月開花九月結実○時珍曰杖言其茎虎ハ言其斑 和名抄 虎杖 伊太止里 枕草子 いたどりハと[illegible]○又これを[illegible]其を[illegible]あらず 年浪草 に挙たる説どもおぼつかなし 後拾遺集 に三月ばかりこの花の草とよく侍る

藤原義孝 [illegible]

童蒙抄 八雲御抄 等に[illegible]春の若草と[illegible]の部[illegible]の葉にて云

糸櫻

大和本草 樹彼岸櫻と同じ枝長く糸

の如くみ〳〵下る。盤る花ハ銀杏の花　歐陽修詩二月

彼岸ざくらは花稍おそし

開花成簇青白色、二十更開花隨即落人罕見之　日暑

三月

石山祭　三日

江州石山山石山寺八真言宗うて御室ふ屬す、本尊如意輪觀音聖武帝の勅願長年の開基し、今日の祭ハ石山寺の鎮守三十八所明神境内新宮大明神寺辺村ふ近津尾八幡宮村ふの祭ゆ〳〵古式八朔日三日ゆ至るゆ朔日三十八所明神の拜殿ふおゆて神祭ゆ〳〵神輿東寺崎渡御一山の衆徒出仕三日新宮ふおゆて仁王八講と修す三十八所ふおゆて神輿ふ饌と供す晩景ふ及て能藝あゆて長命太夫ふとつとむ獅子舞胥無社言ふて衆徒各公文所ふ出仕す三日神輿渡御龍威權現ふおゆて獅子舞献供あゆて其間馬場ふおゆて競馬と催す駿馬并ふ御者と買首ふて出す其両側ふ遨法師列立す冬花笠をつくるを太刀と佩大口をとゆて五人或ハ十人左右ふ執綱〳〵競馬の勝負を決す勝方ふ白布と給ひ又獅子舞ふを祿一計と賜ふ今ハ古来の祭式退廢す朔日ふ新宮八幡の両神輿新宮の拜殿ふ出御神樂あゆて三日両神輿渡御三十八所の拜殿ふおゆて衆徒法樂の奉幣あゆて次ふ神酒を供ゆ畢ゆ〳〵還幸あゆて云云

一乘寺祭　五日

八大天王の社洛北一乘寺の東ゆ在祭ゆ所祇園三社の中八王子し士人座ふの神ゆ子祭ゆ神三座共ふ今日祭礼し紀事云一乘寺の村人烏帽子素袍ゆ着て各裃とかけ〳〵高声ふ有幸〳〵と呼〳〵神幸とすむ○一説ふ宵宮競馬七番ゆ〳〵ゆ宵ふ馬場ふおゆて走馬〳〵當日ハ旅所ふおい〳〵村民こ仏ふ来ゆ神鉢出づ

石清水臨時祭　又南祭ト云中午日○山城国男山八幡宮天祿三年三月八日臨時祭其後毎年祭之このゝ〳〵平持門乱逆の報祭賽のゝゆ天慶五年四月廿七日ゆて始ゆ

江家次第○公事根源先辰日試樂を舞人竹葦のもとふ〳〵竹枝と挿頭ゆ〳〵仁壽殿のもとゆて御前ふ列て清涼近衛の召人求子こ〳〵音樂と合てゆるこゆ〳〵三献五献の後ふ臣以下ゆ〳〵の花と使舞人の冠ふさ〳〵音樂を合てゆるこゆ〳〵當日ふハ大の事あゆて荒野集沓音をもちゆ〳〵荷分十訓抄一條院の御位の御時、実方中將、祭の試樂ふ遲参あゆて、ゆ〳〵の花を給ハゆ〳〵ゆ舞人ふゆ〳〵ゆ〳〵ゆて、竹葦のもとふ〳〵ゆて、呉竹の

枝と折てさしくらべてみめでたけれど人々ゑめあひけり、
ことそうこのちに試楽のかざしにハ竹の枝とさすとかや

稲荷の御出

雍州府志云、當所稲荷の御旅所ハ油小路七条の南ハ之弘法大師東寺を営む時八幡と土地の神とす。其後稲荷の神出現す。芝守長者の家ニ寓年月とへて稲荷山よりうつす。今の旅所ハ芝守の宅地也。祭礼の時、神輿ここにあること二十日、是古への遺風也。紀事云、新御供社家毛利氏調進す。此日七条高瀬橋の東ニ大松炬を立る。土人傍によつて、神輿の来るところ時ハ火を点す。神輿本山稲荷山と出て、大和大路より七条通を経て、九条の御旅所ニ入、社家并ニ氏子供奉す。御旅の間四月第二の卯日ニ至る。其間諸人群参す。凡旅所の散銭米ハ田中来女島右近受納す。○この神二の午日御出、二の卯日還幸。故に世俗の諺に、のそくと御出ウカく還幸と云

池上千部 九日より六八日迄

長栄山本門寺ハ武州千束の郷池上村ニ在。開山日蓮上人、毎年三月十九日より廿八日迄法花経千部千日読誦。此節参詣多し。当寺ハ日蓮上人終焉の地也。但遺骨ハ身延山へ葬るとぞ

伊勢桜 此花緋桜の種也。至て遅く咲て花とりわけ近し。終と尾張と訓通ず。尾張の国に近きハ伊勢国也。因て伊勢桜と名づく

家桜 季吟曰、人の家に咲桜也。○花ハいかにも毛虫に

犬桜 小白花むらがりてすさまじ。たとへバ桜の属なれども、たかゞし家ざくら 嵐雪

いやしき故に犬桜と云。まゝに似て非なるものに犬の字を付ていふこと多し。犬蓼、犬豌豆、犬柘、又一番鎗二番鑓に似て非なるを武家に犬鎗と云。或ハ犬筑波集の類ニ同じ

一歳桃 実を種て当年花さく。其色単重、花大き

ろ

正月 六の餅、六入や部蔵 入の条ニ云

三月 爐塞

炬燵塞 ○冬十月より寒さをしのぐ為に炉をひらき炬燵をおく、三月ニ至て暖気なる故に塞を止む 白氏文集 別春炉

は

正月 腹赤奏

元日 公事根源云、腹赤の贄とて魚を筑紫より奉りし、昔ハやがて節会ニ供じたるにや。腹赤の食様とて食さしむると皆取渡して食しむ。十二代景行天皇筑紫の長濱ニて海人是を釣て奉る、其後四十五代聖武天皇の御時、天平十五年正月十四日太宰府より是を奉る。是よりして年毎の節会ニハ供ずべきよし定めおかれけると云

腹赤とハ鱒の魚のこと

初夢 紀事 云九初夢ニハ大晦日の夜より元日の曉に至るの夢と○年こゝろ春来べしと

八思寐の夢 西行

かたらふ初夢

初鶏 鶏旦 御傘 元日の朝鶏の鳴ども云寅刻鳴初る鳥とい

へバ夜ハ勿論元日と鶏旦

初暦 暦開 雑談抄 九暦と賣ものゝ名

初〻見或ハ〻〻と春と手、冬ようの用と共、

春の用と奏ずる為ニハ春勿論ふう、

歯固 餻鏡

世諺問答 ○けの部ニ注す可見合

人ハ歯と云て命と云る故歯の字とハ訓ず歯固ハ

ものゝ心とハ道江の大切のものとして用べし

本朝食鑑 本邦古〻餅と云て神明の供〻して大円堀ス作り

〻鏡の形ニ擬す故ニ餅と呼て鏡と称すこゝハ思の鏡ふ

擬する故正月朝旦必ず餅と云〻諸神ふ供ふ及一家の長

幼圓凝〻〻同〻鏡餅とすらて新歳と賀すゝ○歯固

の具ハ折敷六本ニ押鮎大根橘鏡など種〻の物と具す〻

岷江入楚

春駒 故事要言 云年の始ニ馬と作て頭ふ

おどふ委

いとゞき歌ひ舞をのこと春駒と名づけ

て都鄙とゝ云ふ是ハ禁中ふ〻正月七日ふ

白馬と御覧のこと云是と下ゝ

節煎賣 和漢

三才圖会 摂州天王寺の民家ふて河内の上糯米の穀と用〻

こと熬ゝ爆張〻〻浮ものゝ〻脱〻去〻潔白雪の花の如

云〻○昔ハ正朝ニ家内こゝ〻と搗こと云〻賣〻と説ふ

蓬莱草こゝて年こと數といふこと今ハ白米と用ふ江ふ〻ハ雑

祭ふて

と供ず

海嵒螺 同上 海螺俗こむい海中ふ生じて小キ

螺ニ色形田螺ふ似て堅く田螺より大

おゝ春夏こゝふ多く出ツ其内上黒く中白く盤曲て殼こゝ

ふゝ〻蒼腸ふ腸と去〻〻煮て食ふ甘く鹹〻高家こゝて

除夜及び歳の始ニ心用の酒肴こゝ

いふハ千倍万倍貴殖こゝるの徴歟

破魔弓 破魔矢 世諺問答 蚩充が眼の瞳と接〻〻木丁の玉こゝ〻の眼のふく

三重の 故弓射もの的ふ三重と画〻中の瞳と除く

雑談抄 或説ふ正月ふ射戯すゝ濱弓ハ蚩充が眼ニ射破る弓

破目弓ふ〻〻通唱の亘ニ〻〻

魔と破るの意ふ〻〻破魔

弓と書濱の字心ふ〻

羽子板 胡鬼板

つく

[世諺問答] 稚きものゝ、胡鬼の子とてつく事ハいかなる
ことぞや、答、とんぼうと云虫の蚊をくらふ事をかたどりて、
秋のころ蜻蛉と云虫出て、蚊をとりくらふ事のあり、このこ
と云ハ木蓮子をとりて、これにとんぼうのかたちをつけて、羽をつけて
板をもてつく時ハ、とんぼうのかたちに
のやうにして蚊をおそれしめんがためなり

初商　初賣

賣初　買初　注釈に及ばず

初子日

子日ノ遊　子日ノ松　小松引

[扶桑略記] 宇多天皇寛平八年閏正月六日有子日宴、行幸北野雲林院 [菅家文章] 予亦嘗聞于故老曰、上陽子日遊戯老之日、倚松根以摩腰、習風霜之難犯也 [拾芥抄] 正月子日岳に登るハ何ぞや、傳に云、正月子日岳に登らハ遠く四方を望ミ、陰陽の静気を得、煩悩を除くの術なり [十節記]

初子のけふの玉箒

[万葉集] 始春之初子乃今日乃玉箒手尓取加良尓動具玉乃緒　家持 [袖中抄] 玉箒とハ、蓍と云草に子日の小松と引ぐして箒に作りて、田家正月子日に蚕飼する家を掃初ることなり

初寅

[紀事] 正月初寅の日、師々山鞍馬寺に詣づ、是を初寅参と云、此日鞍馬の土民福等木を以て鑰を作りて是を賣る、これを福掻と云、福徳をかきとるのいはひなり、又生蜈蚣を賣、是を御福蜈蚣と云、多門天の使令とするものなり、凡く鞍馬山中雞を養はずといふハ、鶏好んで蜈蚣を喰ふ故なり

初卯

正月初卯日摂州住吉の社へ詣、是を初卯詣と云、社内において神符を参詣の諸人に授く、是を卯の札と云、江戸にても此日本所の妙義へ参詣す、今日受る処の紙符を串に挿ミ、諸人是を頭にさして家に帰る

萬春樂

春鶯囀　梅がえうたふ　岷江
青柳うたふ　大芹うたふ　入楚

万春楽ハ踏哥の曲ニ云々、萬春楽ハそへて八句の詩なり、これを漢音にとなへて、句毎のおはりに万春楽と唱ふる、踏哥の舞人の立ざまにうたふなりと○ [體源抄] 春鶯囀 合音 の作者、照于山右大将楽器とつくる、楽の作者ニ一説に天長宝樹楽と名づく、これも踏哥の曲也○梅枝 [梁塵秘抄] 呂之部に、うめがえにきゐるうぐひすや、はるかけて、二段 はるかけて、なけどもいまだや、ゆきハふりつゝ、三段 あはれそこよしや雪ハふりつゝ○青柳ハ [同抄] 律之部に、あをやぎをかたいとによりて、うぐひすの、二段 うぐひすのぬふといふかさハ、おけや梅の花

がさや○大芹 同抄 律之部、大芹ハ、ゐのさゝとの、こぶうこ
そゆぐ〜こむぎう、こまやこのぜんぶんさんこの木のゆーのさ
のぢんむ〜かめのぢう、さいくのさいやうさいとさゝやうぜん
かこあうけさゐ、さゝゝ〜、うゝらぢんこ、ゑ六ゝ〜しの一六
のさいや四三のさいや 年浪草 云各瑞寄の夜のこゝんこのし、我
皇延祢億仙齢 万春楽 元正慶序年光麗 初天
万春楽 かくのゝ〜八句の詩の句毎ゑ万春楽し唱ふ式

神、初不動 廿五日、北八日ハ、天神、不動の會日ゝ、今 北
年初めてのの會日ゑ北バ俗伝りに初ゝ祢ゝ

日正月、北日園子 和漢三才畫会 京師の俗、正月六
日家毎ニ赤豆餅餌と食ふ 紀
事 今日地下の諸人さの〜遊び、北日正月といむゝく園子と食ふ、
是と北日園子とらひて佳節とす、 事文類聚 江東俗号ニ
正月廿日為天穿一〇、今日又婦人鏡奩の鏡餅と祝ふ北
日と初顔と其訓近〜故 初芝居 紀事 正月二日、四条
ゑ初顔と祝ふの意ろう 河原浄瑠璃歌舞伎
等こゝと始むゝと初芝居とふ
武江堰町、犬坂道頻堀ゑも又ちう 春永 初春ゑ三春の季
長きをとさして

花の兄 梅の異名ゝ、二十四番花信風小寒ニ候 春告
梅と以て始とゑ、故ゑ花の兄とゝ

草 梅とゝ 蔵玉 ゝ〜〜〜の春つげ草の花の 畑打、畑
いろあ〜ゑゑ木ゝゝ〜〜〜〜〜〜〜雲

ゑす 田をすゝく 和漢三才畫会 田と墾〜ゝ美耕と用て
土とゝく〜、田と〜〜〜〜、ゑすゝ打ゝ同

苹耦と堀 本草 時珍曰、蓮花葉常ゑ偶生ゝ偶せざゝバ
生ぜず、故ゑ根と藕と云、或ハ云藕〜泥と耕
す、故ゑ字耦ゑ从ふ耦ハ耕ゝ冬ゝ月
春ゑ玉〜藕と堀ゝ、こゝゝと食ふ 兼三春物 初朝
早春ゝ〜めて漁人是とて、ハるのこゝ 春宮 礼記 春宮太子東宮
市ゑ賣ゝとゝ子細ゑ〜 也夫木 呉竹の園ゝ
〜〜〜春の宮ゑ祢ゝと千代
の色ハこゝゝき 後京極 春雨 春の雨 鬼貫独言
ことて 喜月 雨 春の雨ゝ〜め
てさび 春告鳥 鶯の異名ゝ 古今 鶯の谷〜〜出る声
十里 椿柳、白楊 時珍曰木高大葉圓ゝして梨の
如〜、肥大ゑ〜〜尖ゝ〜〜面青〜

もて光て背甚白く、鍬の如き歯を、木肌細く白く、性堅く直く、梁栂して撓曲せず

春のわざ

か部、霞の条に注す

春ふあぶや

春に逢んと云詞、又来る春とかくめることろあるや

春

あらぬ

伊勢物語 月やあらぬ春や昔のはるの身にて業平

春ちら

ぬ 藤文が春ちるときにことしとのるハいふ、青藍按ずるに、身にうきことをおどろき人の、春おぐり春ことちらぬと云意の

春まけて

ことばなる

春かさまけて○春かけてハ春と設もよく、春ことゆけハ春と兼設

春ゆけて

万葉 春ゆけて人のうるハしも秋風にあきにちの山とこそざくめやハ家持○鶯の未づ上梅のうつろハさくの花の時のさ

ちらぬ人也

二月

初午

二月上の午日と云 神社啓蒙 稲荷の社ハ、山城国紀伊郡にあり、京城を去ること東南一里にあり、祭ところの神三座、下社ハ大山祇、中社ハ倉稲魂、上社ハ土祖神也、○元正帝の御宇、当社影向の日偶二月初午日故に今に至て此日と用ふ 神祇拾遺 雍州府志 当社の出現ハ和銅四年二月九日に此説に従て長暦と以て之を推すに、其日偶初午の日に当る、然れども今九日と用ひすして初午と用ふ故に俗、初午詰と云、又福叢と云 紀事 此日新御供社家毛利氏調進す、中の社ハ倉稲魂に祭り、田中の社ハ大巳貴命に祭る、ハ本朝衣食の祖神なり、蒼生安逸の社に、今日農民黍詣こと多し、門前の家に百穀の種并に雑菜の種を賣る、又大小の陶器を賣る、その大ちらのを、ハ薄法と云、其こころハ摂州薄法の海濱にて始てこれを製す故に薄法焼と云、是に、其小さきのをつぶくと云、此土器こと手の中に運搏まハつぶくの音に、故に名とす、こまこと云く小児と賺く、又大人も塩と此内に入て火中に投て焼塩とす、

今日民家多く菜の葉を食ふ、是黍詣の人神前に投もの処の銭とも〳〵黍の間にあつぶるとのあせハその人福ことこと〳〵、請得て家珍とす○此神ハ七度詣こと云ハ導 拾遺集 滝の水 〳〵ことこと山七日のぶらと云〳〵と思ふ○武江すでに此日王子妻恋三囲真崎の社を始し、武家市中にを鎮守の稲荷と祀こ灯燭をかげ鼓吹〳〵舞ふ、近〳〵ハ雲間の霹靂の如く、遠くハ蒼海の波濤の似く、江戸の賑ひ耳目を驚す堪たり

初雷

初電

月令 仲春之月、雷乃発声、始電。

紀事 九一春の中始て声を発て長く初雷と云

蜂

蜂数品あり、蜜蜂、土蜂、黄蜂、赤翅、蟻、おこ、蜜ハ夏月蜂の脾の中に貯ひ、已に蜜の食物とせんが為に、自然に脾と結び貯ふると山蜜と云熊野に蜜ハ山蜜ふかく上品とす、又大樹の洞中に貯ふると木蜜と云、家に養ふと家蜜と云、凡蜜と蠟ハ所、諸国にあり、紀州熊野を第一とす

同巣

滋し、一牡常に数の牝に交る牝牡ともに九月にして一子を産の説未詳なり、年〇齊文曰、本草に九月にして一子を産の説未詳なり、年歴るの鹿多子を産て往こと是

孕鹿

時珍曰、鹿の性

あ、たゝかなるを三子に過ぎるなし

孕雀

雀の子 本朝食鑑

雀の性淫し、春二三月、秋八九月孕く卵を生む、班あり、瓦甍檐間の虧隙、堂社の破竅、朽木の空穴に巣をつくりて、卵を伏す、小きものを黄雀と云、雛の口黄にして赤黒くして故名

そこ鳥

カ部 顧鳥の条に注ス

初桜

花ハ端山より咲く、奥山に至て、紅葉ハ奥山より漸く端山に至る、其冷暖に随て遠近の差別あれども感ずる処ハ前後あるにあらず、凡桜の初て開くを、皆單葉山桜彼岸桜枝垂桜の類ハ枝を

花を待

初学和歌式 花咲そめてハ、ちらんもをしむとなく、余にくて散名残をとゝ、待花ハ思ひ入るゝ花ゆゑ、眼前の氣色たゝ〳〵ハ詮なし、花とつゞくる題に櫻とゝ、くゝ〳〵ゆゑ、櫻と出さる題にハ、ゝ〳〵とすぐにゝむかふと云

三月

巴字戈盆

ハ部曲水の条に注ス

半仙戲

志部戦戦の条に注ス

花鎮祭

晦日 公事根源 是ハ大神狭井の二祭と云 神祇令 ホのせくり、春花の魂ふこころ疫神ら散しく、人とゞまやまず、故ホのまこと、ちづめんが為此祭ハ、みとゝ、神祇官にて行なる

凡三日より七日迄、汐干見物の輩泥中の蛤をとると方言ホ、ゝるとゝ云、足にて蹈或ハ棒のさきにて突て蛤蜊のゝ呼と知ゝるとゝ

花

横川曰、櫻の我国に生れるゆゑ、さくらと云ゝ

〇芭蕉翁羽曰、我家の工花論に、花ハ櫻に、あ、ぶ、櫻ホ、あ、ぶるゆゑ

蛤ずる

摂州住吉の浦の海

花盛

花譜 吉野山の櫻と立春六十五日とさゝるゝと、すこぶる又年の来

温かなるまで、遅速ハあれども、大やうハかくのごとし、

吉野山の町より上のさくらハ六十五日よりハわたし

花曇　陸放翁　天織自何緟晩春雨裁無

彭牡丹記　半晴半陰謂之花曇、養花天同之

花錦　朗詠詩　遶籬任春風花飛如錦幾濃粧　下略

みわたせバ柳さくらをこきまぜて都ぞ春のにしきなりける　素性　**花**

雲　古今亭　さくらのあしさよしの山の桜ハ人丸が目にハ雲となむ

のさくら　**花雪**　○人丸集　白雲の色の千種にこえてハてのとかあふ

あらくさし　梢ハきゆる花のしら雪　為世　**花滝**

庭のおもにつもるかさくなれて風さそふ

御傘　花の滝ハ滝の如くおつる花をいひ、又花の散交ておつ

る滝をもいふ○山櫻ハ、ゆしよりえさもの雪おふにこゆる滝の白糸、

てきさら落花のこと考しもあり、一扁ふ心得べし　今式

咲つゞく巖おふ、さるるみさきまで又滝の上ふさし

れてきよる風情花のあふみて、滝とえゆるなるらん　**花浪**

御傘　花の波正花、水辺に三句也、波の花ハ正花にあらず、白浪の

花に似たりと云又、波の花の下に云、波の花、雪の花ハ正花なれども

ず、但波に落花のある句体なれバ春也、植物也、正花なり○

ふり春川ちるさくら花のあとハ波ハ

見えて音ぞなき春の世をかく　雅世　**花の鈴**　護花鈴

天宝遺事　寧王春時紅の絲を紐とし、金鈴を綴つて、花の梢

に繋おき鳥鵲翔り集ることあれば、園吏をして製せしむ、

鈴の索を以てこれを驚す、護花鈴といふ

通材抄　云花に鈴をつけて鳥を追と云是也　**花笑**　又花の

ことを云、ゑまひハゑみとゑむとことらしてを云、訓し、**花の顔**、**花**

笑咲なども、の字を訓をする花の開くるをいふこと

の姿、**花の肌**、**花の粧**　まそろへてよそえる花の美色ととも、褒美

ふたとへ、美人へ花の艶色にたとふ　して云し、花ハ美人の艶色

見えバ人の上をこいふも正花なり　**花唇**　朗詠　誰謂花不

動　**花ぶさ**　蕚也　字彙　華　**葩**　語、軽漾激兮影

唇　木ノ英華也　字彙　花ノ貌云　葩　**花輪**

花一蕚と　**花の宿**、**花の窓**、**花の扉**、**花**

一輪とも

の戸　今式　此るるこよく　花あるところなり　**花心**、心の花　源氏物語　寄木　云云

花でろれてそする表あるまバ 御傘 人の心し春ハうゝとこの事ゝバ心の花正花し 花衣 花の衣も 花の神、花の袂 枝折荻 花の神、うゝ〜き袖し花ハうゝ〜ゝ詞し 御傘 こゝもこハ紅彩ふて染れバ雖ちゝ〜なれど、只あるさとゝて、春の花うゝ〜〜うゝうゝし○正花こうゝし 花笠、花籠 和 漢

三才畫会 竹器無係為箇有係為籃下略 和名抄 箇加太美

御傘 正花し、植物し、春し、○花ゝさゝ花うゝ共ふ花とさすかでし、四時何の花ととさすこのあゝ、只花と しゝバ專ら春あゝる例あゝ〜ゝ春こうゝ 花皿 佛家て供養の花と盛る器ちゝ正花し 花活、花入、花筒、花瓶 この皆花とさ 花車、花見車 開元遺事 揚国忠子昂春時名花と を器あゝ移〜水檻中ふ植下ニ輪脚と設け、挽ふ絲繩とゝて、至る所自ら移春檻と号す○花見車ハ花ある処へ乘く行く車とゝし 花笠、花蔓、花の盃 増山井 其

花空穂 軟ふ花と 花筏 貞徳翁の説ニ筏ニ花の散ゝ 花の隨身 年浪草 大臣家の賜ゝて召具せゝ隨身ニハあゝず、花の身ニ隨ふの義ゝ、ちゝ〜バ楊国忠が移春檻の類ゝ、可尋 花造 年浪草 花肆又造花肆ノ類ニヤ○ 新古今集 題 新成櫻花と云題 花むすび 新成櫻花ハ古き抄ニ作花のてゝ、草木の花の名と探題ゝどの如く闘どゝ〜ゝ奇どゝ、又ハ男女の名ふ准ゝ縁むゝびの戯ゝ〜ゝのこと、女子の戯ゝ

花宴 花とゝて酒とゝゝゝ 類聚国史 弘仁二年二月、神泉苑ふ行幸あゝ〜ゝ花とゝのゝ、文人ふ命じて詩と賦し禄と賜ゝ 花軍 天宝遺事 長安春時遊賞花宴の節こゝとゝゝ始ゝて と盛ゝ〜ゝ士女花と闘ゝ、栽挿むふ奇多ゝことのゝとゝて勝ゝ、千金と用ゝ名花と市ふ庭ふ植〜〜以て春時の闘ふ備ふ 花莚 月令廣義 緑草鋪裀落花為褥○落花の上ふ坐ゝるとゝいへ、又花見の古ゝ

えのごとくなれば、又花見の席ともいふべし

花の繪 御傘 正花と持ち、植物におゝび春し

花の都 釈名 国城と都とは、國君の居る所、人の都會する所なり。花の都は只都に花は寝ぬる又都の華美なるを云

花をふる 法華經序品 是時天曼多羅華、摩訶曼多羅華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華とふらしゝ、佛上に散ゝ諸の大衆に云 ○ 御傘 法華經の四種の花とふる何とあれど春に云 正花もあるべし

花の踊 御傘 花やうなる盆の踊と云とゝ、花見とゝ云と常の事なれども、せんさくむつかし、正花にうるはしく春し

花の縁 一説に花の淵の誤りとゝ云

花香 風静花芳とよめる題なれば世中に花香春風ゆくえを飛ぶ花の香はうるひけり 逍遥院

花しび 御傘 花やうなるとも云 正花もあるべし

花鳥 季吟曰花にやどる鳥に、又花と鳥とを云、○花と鳥と二つとは鳥の字清て訓し

花散る、飛花落花 天水抄 花のおちる体は山里深山人倫と絶くうる人も稀なる所花おるとゝ

散を体とゝ、とるとゝて花びらに、散は禁中寺都名所又くゝある所の庭、花ちるはさこそあるくる木と感とする又落るとも

花の主 花のあるじ、花守 皆人倫

花とあるゝ、花とゝ、花とゝ人倫

花園 花と種る処と花

花圃 花さく草と種る所と云、故に貞享式園とゝ

秋の花部に加へゝ注す、秋季に決せるゝと論べくもくゝ

花嫁、花聟 共女の夫を帰し、男の女をむかへ、ゝるを月日のゝくるとゝ、花嫁とゝの花聟とゝ

花の幕 くゝるを正花と持、古式は雑とす、蕉門は春に寄

花見のゝ用る幕ゝ

花の山 花ある山ゝ、花山とゝの文字

花の雨 かけうゝくふるゝ花のあめ 文考

馬闌 蘇頌本草 葉蘇似ゝ長ゝ厚ゝ、三月紫碧の花とゝ、五月実と結び角子とゝ麻のごゝく大きゝくゝ赤色稜ゝ根細ゝ長ゝ通黄色ゝ人取

て刷

母子草　鼠麹草し、時珍曰、二月苗と生ず、莖葉柔軟なり、許慎曰、白華草の耳の毛の如し、小黄花と、穂〻細き子と結ぶ、大和本草、鼠麹草又佛耳草、上巳日菓と用ひ、餅に和す、近世多く艾葉と用ひ、

令法　救荒本草、山茶料、條の高さ四三尺枝梗灰白色、葉、皂莢の葉に似て円く又梶の葉に似て亦円く、四五葉一処に攢り生ず、莖稠く密に、味苦し、嫩葉を取て烘熟して水に淘て洗ひ油塩を以て調へ食ふ、亦蒸して晒して乾して茶に煮て飲む、

八十八夜　立春の日より八十八夜なり、

春の湊　春の日ごとに心くゝ、○ふしくれ春のこゝろと

當るとも忘霜の

春の限、春と惜　行春

叙位　八日、近代ハ吉日とえらぶ

正月

女

日本紀、持統天皇五年春正月癸酉朔、陽内親王女王内命婦等位を是始め、公事根源、是ハ女房の位階と

叙せらるゝことあり、

二宮大饗　公事根源、正月二日王臣以下二宮に參りて隔年ごとに行ハる、

拜礼あるべし、饗をつくる、二宮

旬草　梅の異名　蔵玉

庭

ハ東宮中宮の御事なり、

竈　紀事、火炉と庭上に、合家席を鋪て円坐す、是と庭竈と云、世間胸筭用、元禄五年印本、巻四に正月奈良中の家〻ゆく庭に竈つくり、釜をけ〻焼火し、庭に数物共家内旦那も下人も同ハ明もすて、所のあらゆとて、論に入る、

螺有　時珍曰、其

蝸牛　似紅、其類多し、唯泥水と食ふ、春月に取て鍋中に置て蒸ば、其肉おのづから出て、酒に煮糟に煮て食ふ、

兼三春物

旬の鳥　鶯の異名、異名分類、篠目に雪もまや消えあらぬ山里の

二月

二月堂行、同水取

南都東大寺にて、朔日より十四日に至て行ふ、紀事、牛王加持の行法を、朔日より七日に至て、上七日と云

三月堂本尊観音の像大小二体あり、上七日八大像観音の前ふわ〳〵法事と修す、八日より十四日に至る、こゝより下七日とゝ、小観音の法事あり、七日の夜又十四日の夜、ともゝ水屋の井ふかい〳〵牛王と貼するの水とゝ、九年中用る処の水この両夜ゝと汲く桶ゝ蓋ふ、古へ実忠若狭国笥飯の明神の詫宣ふ、ゝて、水と掘井ゆゝ牛王と貼ふ七日十四日の夜水ゝ掘井より温出ゝ、今の井水の常ふ満るが如し

韭 時珍曰、葉青く翠し根と以く

かゝ〳〵子と以く撞べし、葉の高さ三寸、前ゝ日中を忌む一歳五〳〵び剪ふ過ず、子と收るとのハ只一〳〵び剪べし、八月花と初ゝ叢ふ八月種ゝ春苗と食ふ、

蒜 夏薤と食ふ秋種と

とあり、九月ゝ子と收む

接骨木花 和漢三才畜金 接骨木人家の藩籬ふ植る三四月小白花と初ゝ攢生〳〵朶と作す、年ふふとの八実と結ぶ攢簇して赤

迩波櫻 和名抄 朱櫻和名波ヤカ 一名迩波佐良久良 ○季吟曰、山櫻も庭櫻も、その山ゝ咲き、庭ふさゝと云と、名木のやうふもゝるハあり、

きゝと

蜷 時珍曰、蝸蠃一名螺蛳師ハ衆多ゝ、湖漢ふ多ゝ、其形蝸牛ふ似く其類衆多ゝ、故ふ二名あり、其大きゝ指の頭のごゝ、殼ハ田螺より厚く、たゞ泥水と食ふ、春月人采く鍋中ふ置く〳〵出づ、清明の後其中ふ虫あり用る堪ず 和名抄 河貝子奈用蜷字非也下畧○古へハ蜷と云、今專らふ蜷と唱るふ、部ニ附ス

鮡子取 和漢三才畜金 南部津輕蝦夷最多し、九十月ゝ春ふ至ゝ〳〵と取、大きゝるものハ尺餘あり、一網ふ数万と得る、頭と尾と去く干魚とす、去るゝゝの頭尾ハ田園の培とある数の子即ち鮡の子く

三月 **仁和寺高雄の女詣** 三月廿一日御影供と修す、故ふ女人登山すゝと許す、ゆゝ結縁の喜

任 **正月** **星佛** 清稽雑談 当年星の光曜こゝと歳の初ふ祭〳〵為ふ其星の形像と彫て、禁裡院中ハ佛工所〳〵調進す是と頭密の行者或ハ陰陽家ふ仰せく、星供と行せ〳〵、民家

ゐも亦星と祭るこの九曜の次第、羅土水金日火計月木と一歳ごとに九歳ぐるぐるふりめぐる、十八歳より十八歳といくたびも九年目ごとにふるなり

蓬萊飾

紀事 倭俗新年三方臺に海老鬚斗見布榧擡穂俵ほと置、先賀客に供ずて新年と祝ふ是と蓬萊臺と云

列子 渤海東有り山、一曰岱輿、二曰員嶠、三曰方壺、四曰瀛洲、五曰蓬萊、華実皆有滋味、食之不老不死、所居人皆仙聖之種、蓬萊盤に据ゑ

穂俵

朝式 奈良里曽、神馬藻

漢語抄 奈乃里曽

和漢三才畫会 西南の海ゆ多し、冬これを取乾し、藁稈とはこれ握りぶくり折巻て束ねて米俵のかたちにつくりて穂俵と名づく、正月蓬萊臺の飾ものゆ

穂長

志部の歯朶の糸ゆ出す

宝引

福引 雑談抄 故ゆ餅と福と云、古へ福引とて、餅と二人ゐて引あはせて侍ると云、福引宝引これなるべし

爆竹

さ部左毛長の条に出

春

骨正月

京大坂に新年の嘉祝ゆ必ず鮒の脯を用ふ其魚の骨ゆ大豆酒の糟と共に煮熟して節物とすることを食ふ故ゆ骨正月と云ふ

堀入

の部野大根の条に出

蕎三春

物 菠薐菜 時珍曰、四月薹を起し一尺ばかりの間、雌雄あり、雌は実と結ぶ刺あり、種の時研開まぐ、雄は茎ゆ就て碎紅花と云ふ、ゆゑに月朔を過て乃生ず亦異し

防風

和漢三才 蟲会 其嫩き時、醋未醤ゆ和く食ふ極て美

二月

ロさいやうとう、五月花と云ふ、じやうとうさ子とも云ふ

本妙寺詣

初午日○江州三上山の辺ゆ旧跡あり、今こと二月初午詣あり、此本妙寺、山門ゆ屬し、天台宗に織田家の兵火ゆ亡滅の時、江州辺の末寺と共ゆ回禄す、こゝと又其一寺ゆ相傳ふ近江国野洲郡、百足山本明寺、本尊馬頭観音と、今旧跡三上山中ゆ堂宇僅ゆ二間四面、里俗の説ゆ、本尊ハ俵秀郷ゆ守り本尊と、御長一尺ばかり、毎年二月初午開帳ゆ、鰐口の銘ゆ、百足山本明寺とあり、其麓の

亟林ゐ三上明神の社を、是と以て思ふに、本明寺観音八三上明神の本地佛あるべしとや、堂の前ゐ三拾三間の矢場あり、初午日今に至て弓矢莊嚴とし、里民ども矢と商ふ参詣の人ことに買て奉納す、本尊平日ハ秘仏ゐて、初午日或八三十三年と開帳の期とす、當日初午の外八北さとり南さとり村の百姓四十人ばかり講を結び、一村より六人づゝ各十二人と年頭に、万事と支配す、本尊南村ゐいます時八北村より封を付、北村ゐ在すト紀八南村より封を付て互ゐ尊敬の意を示すとぞ、初午の日、節分の豆と十二銅と捧て、諸人祈願すとぞ

三月

木瓜花

[和漢三才圖会] 世ゐ木瓜と称するとの、本草の註ゐあず、是本桃ゐあらず、木瓜ゐあらず、近頃唐木瓜と云もの也、人其花を愛す乃ち真の木瓜ゐ[蘇頌圖經] 木瓜八柔の如し、春の末花ゐ[花彙] 山中ゐ多く生ず、一根叢生す、葉長さ一尺、冬も凋まず、形蛭を芒ゐ似て、厚くこゝく緑色し、冬中箭を発し、数瓣苞ゐあり、紅白色、三

春蘭花

[和漢三才圖会] 深紅色

月ゐ至て幹の長さ数寸悄ゐ當て花苞中より出く、たゞ一花五出、青黄色、形建蘭花ゐ似て、ていふ〳〵、香気あり、此物、蘭譜ゐ出る独頭花し

郭公の巣

[和漢三才圖会] 杜鵑八巣を営なむことあるゐず、鶯の古巣を窺て借て卵を生す[說文] 杜鵑蜀王望帝所化也、至今寄巣生子、百鳥為哺其雛、尚如君臣

二月

月令 仲春之月、蟄虫咸動啟戶始出注謂始穿其穴而出也

蛇螈地虫の類穴を出る

月

歳徳神

[元方棚紀事] 陰陽家、来年の支干ゐ因て四方の間、吉凶を考こと得方と祢す、[簡篇内傳] 年徳神八、頗梨女ゐいまゐる八将神の母なり、云々下

板、桃梗

[仙木、神荼] [淮南子] 羿、桃梗を死す、許慎注云、梗八大杖し、桃と以てこと〳〵とつくる、以て羿とす、以来鬼桃と畏る、今人桃梗と以て杖と作り、歳且に門ゐ植て

鬼を辟るゝこれよりての故也【六帖】元日桃符を造り戸に着くるを仙木と云百鬼の所畏也【風俗通】東海度朔山に桃樹あり屈盤て三千里其卑枝東北にむかふ鬼門と云二神あり神荼鬱壘と云衆鬼出入執て以て虎に飼ふよつておらて黄帝法てこれを象る桃板を門戸の上に立る

膏薬 三日 主上へ千瘡膏と云膏薬を進らる也【後醍醐抄】御額并に耳の裏へ傳ふ云々【江次第】ニハ主上取之右の無名指を以て左の掌にぬりしめのふを乞法に右の手四の指を曲るは是大師の印相なりと云一名千瘡万病膏と云からやくの名を忌てたうやくと云

屠蘇 とみ部御薬と供ずの条に出て

年男 【紀事】云 若水と汲むを年男といふ

鳥追 【雍州府志】乞丐の人元日より十五日に至るまで笠を着白巾を以て面を覆ひ手をたゝき祝語をとなへ門戸に来りて米錢を乞ふ是を敵の与次郎と号す又鳥追と称すもと民間田疇の鳥を追ひはらふ辞なるといへるものか○今東都にて八俗に女太夫と唱ふるもの編笠を着三紙とひきかへて錢とるなり

年玉 新年の賜ものとするもの年玉といふなるべし

東叡山大黒の湯 三日武江東叡山中護国院に大黒天あり正月三日餅を湯にひたし参詣の人に飲しむこれを大黒湯と云てさきをのむとの必所願成就すといへり此日諸人参詣す或ハお福の湯ともいふなり

どんど と部左義長の条に出

宿直人 真言院御修法の条に出す

泊山 と部の鳴鳥狩の条に出

鳥さうる 【書言字典】仲春厥民析る、鳥獣ハ孳尾

十二の花 に出

飛梅 ま部松の花の条に出

菅家筑紫へ左遷の時、梅に詠じたる哥に、東風ふかバ匂ひおこせよ梅花あるじなしとて春をわするなと於て梅飛ゆきて、論所の庭に生ずといふ

とめこうの梅 【新古今】とめこかし梅さかりなる我宿とうときも人ハをりにこそよれ　西行

野老 ところ 【和漢三才図会】云 蔓葉顔る萆薢に似て白花をひらき青き子を結ぶ三稜あり其根老萆薢の形に類す俗に野老と書し鰕とをて

海老〻〻共ふ
嘉祝の食物に充つ

三春物

鳥囀 水鳥囀

古今 百千鳥さへづる春は物ごとに
あらたまれども我ぞふりゆく

とび色鳥 鶯の異名○とび

めるさへ〻〻あるに又富の八重
紅梅の花ふる〻〻〻〻〻〻

鶏冠菜 和漢三才図会

公忠

そのゝうち鶏冠のごとく、
紅色にして石ゝ〻〻生ず

二月

東福寺懺法

恵日山東福寺は洛の東南にあ、門前の街道に橋を地と一の橋
と云、愛宕郡の境に南と二の橋と名づく、即稲荷の社前し、
毎年二月に方寸の紙に方の字と書き、当寺内の同聚庵
より出す、火災疫病を除くと○今日初午方丈にて
明兆が画く処の観音三十三幅の像を掲げ懺法を修す

祈年祭 四日○神祇官に於て

祈年祭神三千一百三十二座之内、神祇官祭
神七百三十七座 案上案下 国司、道明寺祭 九五日、河内国
祭神二十三百九十五座 志紀郡

土師村にあり、一名土師寺と云、中興住持の尼覚壽は菅丞相
の伯母なるが故に左遷の時、この寺へ立〻〻〻〻〻〻、
天穂日命の宮に菅丞の社と

雑談抄 当寺興の天神とは、

二社合せて、この二十五日に祭ると、道明寺祭〻〻〻〻○世〻〻
道明寺糒とりもちとの、

鳥巣 古巣 五雑組 羽族之巧過於人其

此寺の比丘尼の手業なり

為巣只以一口両爪而結束牢固甚於人工、大
風拔木而巣終不傾也、雑木枯枝縦横重畳不
知得膠固無恙、此理之不可曉者、凡鳥将生卵
先雌雄営巣、巣既成而後遺卵、伏子及長成乗去
則空其巣

三月

桃花粥 部寒食の条に出ス

不復用矣

月令廣義 唐徳宗以上巳為令節、桃花節攄之乎

桃花の節

鶏合 闘雞は周の世に始まる

列子 左傳 事文類聚 紀事禁

程清涼殿南階の前にて闘雞あり、其雞諸家の中雲客
に出さる、仙納弥市此こゝに頂に
勝負を決す、是を行事と称す

土佐海硯

石取

雜談抄云、毛吹草ニ、三月三日土佐国の西寺の御崎の海底ニ碩石と取出す事侍る、其潮干の時刻ニ及ぶ、西寺の僧、海上ニ出る、經と讀誦すると侍る、今世多く八国主領主の采地とおもふて、掘ふる石とかふ

鳶巣

鳶の巣ハ梢上ニ在、木の枝と以て組合て、巣とする

あるぎこの

鳥帰

千載集 花ハ根ニ鳥ハ古巣ニかへるなり 順德院

春のしるしとなる人ぞ

虎尾櫻

此樹の類多く枝條屈蟠して、花の並みしげく、枝上ニ花と葉と斑ニして、虎ふの如し、故ニ虎尾の名あり、

ち

正月

朝賀、朝拜

奏賀、奏瑞

公事

小朝拜、

根源 朝賀とは朝拜ニ同し、元日辰の時ニ天皇太極殿ニ行幸あるなり、行ハせらるる、群臣ニ礼服と着して、さきの御即位の儀式ニ同し、奏賀奏瑞とハ去年の目出度嘉瑞とをのおのと国々ニ奏せバ、そなたと記して今日奏すなり、小朝拜ハ只臣下の元日ニあれば、天子と拜し奉るべきなり、ト請て行ハるる公事ニ、

朝庭の為ニとすぐれ、神事仏事ニとあらずして、ハ私の礼ニ、君ニ私ニ臣ニ本文あるべきなり、

六十代延喜の御字ニ勅ありて、延喜五年、右大臣時平公ニ仰てども、小朝拜ハ殿上ニ、抑朝拜ハ百官ことごとく拜したるなり、故ニ私あるニ似ることなきなり、

又ことの如く行幸ありしなり、同十九年に、元正の日、君と拜し奉ることを年の始ニ上皇母后の宮ニ行幸ありしなり、

年八月ニ、朝覲の儀ハ、嵯峨天皇大同四年ニ、嘉祥二年正月九日ニ、仁明帝の母后ニ朝覲のため、冷泉院ニ行幸ある時、南階と下りて拜ことなり、跪きのぶるなり、侍ることなり、周礼ニ春日ニ朝覲、秋日ニ覲すとかふ、是朝覲のことなり、

朝覲行幸

公事根源ニ云、是ハ天子

千代の春

千世の初春、又百世万代ニ古歌

帳閉、帳書

紀事 正月四日市中諸商人ども亦其事と始む、九年中の物價と記さるるこころの簿冊と裁補すべしと

帖綴とかふ、ものの

兼三春物

首

本朝食鑑 二月彼岸ふ種と下す、三四月ふ苗と生ず、葉と采ら、蔬〻食ふ〻足る、五月黄花と開く、初て綻るる野菊のごとし、一花子と結ぶ

二月 中和節

李泌傳 唐德宗上巳九日と以て皆宴樂を〻く寒食す、上巳同時二月と以て節と名づけむと欲す、泌二月朔と以て中和節とせんことを請ふ、上巳と九日とを加へて三令節とあり

兒櫻

山櫻の一種あり、又小櫻のうちふ、別種しと云、按るふ、山櫻のうちふ、紅色と含て義〻愛らきを花あり、故ふ兒櫻の称あり

蝶

胡蝶、黄蝶、蝶々 鳩車、胡蝶の夢、時珍曰、蝶ハ鬢美あり、蛾ハ眉美あり、故ふ又胡蝶と名づく、俗ふ鬢須と胡と十〻〻

拾物論 一種大さ蝙蝠の如く或ハ黑、或ハ赤、或ハ青、斑あるものと、鳳子と名づ、一名鳳車、又鬼子、

新撰字鏡 加波比良古

莊子齊物論 昔莊周夢ふ胡蝶となる、翩〻然〻として胡蝶あり、自喻て志ふ適ふ周ふるを知らざるなり、俄然〻〻覺る則ハ蘧〻然〻〻周あり、もし〻周ふ夢ふ胡蝶となるか、蝶の夢ふ周となるか、周と胡蝶とかならずしも分あるべし

三月

重三

野客叢書 今五月五日と重五となし、九月九日と重九とし、三月三日と亦重三とつくる〻

長春

時珍曰、月季花ハ處〻人家ふ多く栽て、ことを挿さむ、亦薔薇の類なり、青き莖青き蔓硬き刺あり、花ハ薔薇〻〻小くもて、深紅千葉厚軟あり、月と逐て開放して実と結ばず

丁子草

天和

本草 葉ハ柳の葉ふ似て、中の竪筋すく〻白く、花ハ丁子ニ似て淺葱色ニ〻嫩葉と生ず、蓋焙て苦き水と去り、こゝを求て飲べきなり

本朝食鑑 凡茶と採の候ハ八十八夜あり、氣候の遲速ふ隨て、八十八夜の前後と宜とす○宇治の茶師馬場氏俊ガ曰、始て茶と摘ことを手始とす、九三月朔日、或ハ三日

茶摘

蘇頌嘉經 茶ハ春中始て

り 正月 履端

左傳 先王之正時也、履端于始、舉正於中、歸餘於終○

両のとの

小士器、名義詳ならず、疑〻元日とす、八開豆開牛房の両種と土器ニ盛て雜煮の膳の右ふおく、此両種と盛物とこの略語歟、又料の物〻〻と両種と盛る料とすべし

年浪草

臨時客 年中行事哥合 正月二日、臨時客とも、摂政関白の家ゝ春の始、大臣以下の上達部と招て遊ぶ

[illegible]る公務ゝもあるべ、臨時客とも侍る

[illegible]、大方大臣の母屋の大饗八年とゝ行侍るゝ、鷺銅

[illegible]渡して 其典[illegible]と

履新之慶 李吟曰、履端ハ端とゝ、

[illegible]ふゝ賀する心ゝふるハ領すゝんゝ、

履新と同ゝんゝ、改年の御慶をゝえて同ト

三月

鏤人 唐の時三月ニ鏤人蒸餅とゝ、鏤人 **流觴**

ハ此方ゝ鏤人形のゝぐゝ

き部の曲 **林檎花** 宋馬志聞本草 林檎樹柰ゝ似ゝ

水の条ニ出 二月餘紅花とゝ、子も亦柰の

如くゝ 蓋円ゝ

ぬ

兼三春物 ぬくゝ 毛衣ゝ

ぬくゝとゝ曝ゝ ぬくゝ鴨

の足 芭蕉○常ニ

を

正月 **御降** 元日ゝ降る雨雪とゝ

大服 大服と八点桑の名ゝ 紀事 其式茶と点ゝ塩梅

山椒を若碗の内ゝ漬て合家ゝとのむ、又賀客

ゝ献ず、ゝとゝと大服ゝとゝ、季吟曰、元日ニ大ふゝゝゝたる

茶と大福とゝひ形ゝゝ用ふるゝゝとゝ、大服ハ去年

の青葉の匂ひ 防川 **押鮎** 江次第 元日 押鮎 塚、煮塩鮎 塚、

の鮒 塚、 玉佐日記 元日ゝ用ひ

ゝとゝゝゝ、是齒固の臭ゝ○鮎ハ年魚

とて、其年長する故ニ、新年嘉祝の食とす、 **女王禄** 八日

ゝとゝハ女王ゝ禄と賜ふゝゝ、其禄法ゝ別ゝ絹二疋綿六屯と

あゝ 江次第 ゝゝ委ゝ、 公事根源 云、女王禄と字ハ書

ゝゝゝ、たゞ王禄とゝゝゝて、

女の字と略するとゝ口傳とハ云ふ

男踏歌 あゝゝゝ

公事根源 踏哥とゝハ、正月十四日の男踏哥のゝゝゝ侍るゝ、

近頃おこゝゝゝ侍るハ女踏哥ゝ、ゝゝゝハ十六日ゝ光源氏物語

ちゝふゝ多ゝ男踏哥のゝとゝゝ侍るゝゝ、 岷江入楚 天

武天皇の御時ゝゝゝて、聖武天皇の御時ゝゝゝ

おこゝるゝ、又曰、円融院天元六年正月十四日、有男踏哥、以

後中絶ゝ 西宮記 古語ニアラレバレリト讀ゝ、田の終ふ、万

年アラレとゝ祝言と必ずゝゝ納むる故ニアラレバレリとゝ

ゝ未詳 花鳥余情 男踏哥十四日ゝゝ、殿上地下の四位以

下の輩ありて所をさめるもて、催馬楽といへる舞あ
あつることもなく云、○男踏哥、女踏哥、隔年にありけり[細
流抄]みそくらう。○かざしのことは[河海抄]踏哥の人綿の造
花を以て冠の額にさすなり、かづけものとは踏哥の人にたまふ
禄

女踏歌 十六日[公事根源]むかし正月十五六日八月の
頃なりしバ京中の男女の声よく物なとつとめし
つゞけて、年始の祝詞をのべて、舞をまはせなどせしより
故に踏哥とハ申すめり。天武天皇三年正月に太極殿に渡御
ありて、男女あつまりて、闇夜に踏哥のことありしより。然
るに八月のころたえてしかども鳥羽王の闇の夜のことありしとや、
○此外委しきことは[江次第]に見えたれど今ここに略す

女節分 十九日○吉田の疫神詣之節分
の夜とりて疫神を祭るが故に、男ハ夜分よりでも参詣す、女子
ハ夜分とりハ時分の家事多くして、節分に詣づることをえ
ずよりて十九日と節分の代りに詣づる心なく、女節分とよぶ
るや、吉田の清祓の条と互見すべし

女礼者 注ニ不及

鶯宿梅 [大鏡]村上帝天暦年中ニ清涼殿の梅樹枯萎む、勅ありて、これが代りを
の梅をもとめしむ、人ありて参して云、西の京何がしの家に
梅ありて、花開けぞ其色深く其香濃し、これを其家主にえ
應ずるとなり、主の女、枝に短冊を着て献ず、既にして禁
庭に移す、主上これを見させたまふに歌あり、勅なればいと
かしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ
こたへむ 紀貫之女 今此木相国寺中ニあり

薺蒿摘 [和名抄]薺蒿、一名莪蒿、和名於八木[雀禹食経]状茶草に似
て香し、葉を取てこれを食ふ[夫木]春日野ハ今日ハ雪ま
のおぼつかなくもせて若菜の中にあざみかや
らん 信実 ○よ部よめがはぎの条見合すべし

大若 は部萬歳の条に云

[兼三春物]

朧月 白楽天詩ニ不明
不暗朧々月[新古今]てりもせず曇りも
はてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき 大江千里

於胡海苔 [和名抄]海中石上に生ず、乱髪
の如くして青色にて東海ニ多し

[二月]

おごの
釈奠のりて、
つゞて
せ部にて可見

黄梅 [大和本草]黄梅ハ小樹なり、
もれども本草ニ遷草の

下ゐ載て曰、高さ三尺、方る莖厚き葉、初生の小椒葉の如うく、黄ゐ、面青く背淡し、云々所言ワイと同じ、正月ゐ黄花と開く故迎春花と名づく、花のうちに梅ゐ似たり、故ゐ国俗兼梅と云ふ

大原野祭

上卯日○山城国乙訓郡ゐ坐、春日と同神に、本社遠きゆゑ、都近きところに奉る、これバ大原野行啓ちどやとの侍ゐ毎年彼岸の申日に、摂州四天王寺念仏堂にて此すあり、天竺の名号とて、九八菩薩の画像と掲げ念仏修行を相傳ゐ、良志上人、洛北轍馬の毘沙門天にて感得の御影あり、今日平野大念寺来りて法事と修行す、法会ゐ大和河内の道心者来りて各十徳と着し鉦と付て、手ゐ持て踊るゐ踊るゐハあるゑず、一心不乱ゐ念仏唱て、誠ゐ感ゐたゑ〳〵踊るゑ〳〵ゑゆゑ、大和河内の者ハ由緒正しき豪家の禅門あるゑ、此法席ゐ入事を許さるゑ、此寺の西門ハ極楽の東門ゐあるゑ故ゐ、昔より浄業を修するの人、此寺ゐ参ずるゑて西海の

踊念仏

公事根源 この神ハ、皇后の奉ぜるゆゑなり

落日を観ずるゑ、弘法大師ゐ、この西門ゐて日想観を修し給ひ、法然上人も、此地西南の一宇 今世号一心寺 ゐ住し給ひ、没日ゐ浄土の観を修ずるゐ由、旧記に侍るゑ、今ゑ諸人弥陀の来迎を拝まゐて、今宵彼岸の中日群集すゑ、是没日ゐ向て浄刹の方を拝むの遺意ゑ

萩の焼原

野火ゐ焼ゑる跡の萩原と云ふ 年浪草 引説ゑ皆ゑ〳〵 後撰集 ゑ〳〵ハ

とぐめぐけハゑゑさけゑ〳〵若葉つゑゑを誰とさゑゑむ

兼盛王、この哥の詞ゑ 続古今春部 順徳院御製、かゑゑが野やゑゑ霜枯の春風ゐ青葉まゑ〳〵ゑ萩のやけゑゑ、

ことゑゑゑ兼盛王の哥ゑゑゑゑゑゑゑ

萩の若葉

萩の初生芦筍の如く生ゑ漸〳〵葉の状ち分ゑゑゑゑゑ若葉ゑゑゑ

三月

御身拭

十九日○山城国嵯峨清涼寺の本尊釈迦如来、五尺二分の立像中に、天竺毘首羯磨、赤栴檀と以て作る処に、今日開帳ゐ、寺僧白巾を以て仏像をぬぐひ拭ふ事と御身拭と云、この起ハ此堂建立の人、七日泰籠のゑちゐ本尊告ゐて、汝が父今生を畜生ゐ搏ゑ此堂

の耕作を助く牛となる、弥増に善をなし仏果を得すしむべしとて、急ぎこの牛を乞得て堂の側に繋ぎ、父の恩へをおもひて養しが、三月十九日にいたりて仏果を得せしめ給ふ、牛の衣を以て如来を拭ひ赤栴檀の薫りとなりて牛に着せ葬ぬ、其後年毎に今日如来の妙香をうつして、衆生煩悩の不浄を清むとかや

芋生の浦

梨 勢州芋生の浦、梨花の名所也 【新古今】撰 あさのちくふのこくたくえたちかへりてこゝろ見よ とあるは山梨の花 俊頼

わ

【正月】

若水

包井、井華水、若水桶、【公事根源】立春の春立日是を奉ると若水とかけり、是ハ年中の邪気を除くと云本文ある故也【世諺問答】これによりて此日ハ井華水をとりて、あらくにくむる水と飲事まゞりや【御傘】若水立春に元日にあらずといへる意にて今歳旦にもちひる事となりけり ○包井ハ御生気の方の井に蓋をしてく立春に開くと包井開とも云

若菜

初若菜【公事根源】内蔵寮并内膳司よりて、正月上子日に是を奉る、寛平年中よりて始まりけるとや、延喜十一年正月七日に後院より七種の若菜を供ずる ○七種の条見合すべし

若夷

夷廻【紀事】京師街頭に、数多の夷子の札を売る、馬毘沙門天の紙符並二福神の簡を売る四民是をもとめて門戸に貼し、或ハ歳徳棚に供じ、元日是を拝し福を祈て祚をとむ、南都の市中毎年吉野より来て、守り福神の札を売二日の暁又毘沙門天を迎ゆしとりひく、毘沙門天の札を売る、三日の暁又恵比須と迎ふべしとりふ、猶京師にて元日の暁天に若恵美須の札を売ものし ○夷廻ハ是傀儡師とも云、津の国西宮に跡を垂給ふ夷三郎殿蔵の始に衆生に笑ひをもたせて富貴を守らんとの託宣あらく、昔より西宮より春の始に八都を始め方々傀儡まわりて勧むるこの傀儡師を夷廻と云、又京大坂にても大黒舞の類あり、夷三郎殿の姿をもなし、鯛を釣ことをするを雑とあれども、悲田寺并八四ヶ所の垣外の賤き者の業也

若餅

三日の間に搗を若餅とも由古老いへり【雑談抄】一説に三ヶ日に餅搗ことあるべからず、俗に餅の大小をも時に若を云、是小の詞を忌て云これ賀客に饗するに便ある故に、小そと賄ふ故とも云、唯祝語とせる

の

若草

新草、○三種ともに春初草、艸の初生なり

幸木の若緑

本草 松に三月雛と抽んで花と生ず長四五寸に見る緑とこまやか雛正月に三月すぐる、松緑柳緑なる其色の青黄の間色をいふべし

蕨布

兼三春物

山葵

大和本草 山葵、加茂葵に似る、其根の形味生姜に似る、故に山葵山姜の名あり、中夏の書に見えず、漢名芸薹

和漢三才図会 山中水に近き石間に多くあり、人家にも是を種る、二月種を下し三四月苗を生ず、葉蕗及び葵の葉に似る、六七月穂を出す、二三寸、細なる黄白花を開く、細なる子を結ぶ

三月

蕨

早蕨、蕨手、の初め先生ずるを早蕨と号す○時珍曰二三月芽を生ず、拳曲して、状ち小児の拳の如し

朗詠 紫塵嬾蕨人拳手○仙人の碁子と指さす蕨出

乙由○序に云この朗詠の句、塵と嬾との二字は莖と蕨との誤りなり、下学集に辨じ

頁 ○の塵ちりは春の野に多くある蕨はとのぐげみて、心

若紫

本草 蘇恭曰紫草は蘭香に似て茎赤く節青し二月花をひらく紫白色にして実をむすぶ白色にして秋熟す

○雑談抄 連俳に若紫を春に用ひ、花紫を秋に用ふ本草にの説のごとく、二三月花と考ふべし、若紫は春月の嫩苗といふべきなり

三月

若蔣

本朝食鑑 訓麻古也 古訓古也 江湖也沢の中に生ず二三月白芽を生ず、筍の如し是菰筍茭白菰菜也、を若菰と為す

若鮎

此時農民種を撒の事を手、九立春に子の条に云

忘霜

八十八日の夜霜あり、必霜あり、諸木の花房嫩芽こまやかなる時は多く枯る故に此前後蔓蕪を以て是を蓋ひ霜気を侵さしめず、宇治の茶園殊にこまやかなる時は八十八夜まぐる時は霜と防ぐの蔓蕪を撤す、八十八夜の後さらに霜なし、故に忘霜別霜とも

正月

門の神棚

堀川百

季吟曰、在家の妻戸ゝ掬と搆てゝ神と祭て、夜ハうゝけゝ灯と供へ侍るこゝ〉○未其義と詳ならず、按ゝ月令廣義ゝ除夜門神と祭る注ゝ道家門神と謂て左と門丞と右と戶尉と今、蓋門と司どるの神ゝ其義桃符よゝ本て、神荼鬱壘と以て、邪と辟る故ゝ

門松 立松

朝ゝ此意ゝ據ゝ本朝ゝ千門ゝ樹るゝ

飾松、飾竹 世諺問登 門の松立るゝ、昔ゝ来るゝ竹ハ万代と契るゝ、松ハ千年と契る、年の始ゝ用るゝ、

飾縄、飾藁 注連飾 同上 ゝ縄ゝ藁ゝ八左縄ゝて、縄のゝ〜ゝ左ゝ清浄ゝ〜ゝ〜ゝ〜

祝棒とも新婦ある家毎に入る新婦の腰とも、兒童の戯なり

粥柱 粥の中へ鰒を入れ食べもとも、七日の粥なり入れども十五日の粥に八往古なり食べ来れり

男踏哥の条に出す、

鏡閇 くに部具足の鏡閇とのべる条に云

ぐしの綿 部

獺魚を祭る

獺の祭りとて、こも類田の奥に

礼月令 三孟春月獺祭魚

埤雅 獺取鯉於水齋、四方陳之進而弗食也、世謂之祭魚、蓋祭其先

香散見

草 梅の異名、○山さとの杉ぞふさける色とも香とも見つるやさん、順德院御製

兼

三春物

霞 和名抄 唐韻云、霞赤氣雲也 和名加須美 ○吾邦にかすみとなるものハ漢土にハ霧

御傘 水辺にあるべし、霞の網に似るとも、

家集 小夜ふけぬ霞の網にかゝるの月とおくやこるるとの

蜃のうべ 正徹

霞の海 聳物語、水辺にあるべし

霞の衣

御傘 衣類にあるべし、是も形容、

古今 春のこゝろ霞の衣

ぬきとりすてゝ山ぶせふこゝ

こゝにあるべし、行平朝臣

霞汲 流る霞、とも酒とも、徳補

子 到天上仙人以流霞丁盃飲之

霞の袖 霞のゝ袖、

書言故事 天仙酒名流霞、

霞の窓、霞の笆 霧のまがきとも同意、惟不知

霞の衣の縁語なるべし、

霞の波、霞の沖 霞の海の縁語なるべし、

鐘霞む 春の

ふく、声のかすむとも

なるも、夜なかあるべし、

霞の洞 真治詩、万里洞中朝王帝九光霞内宿仙

御傘 霞の洞、仙境とも、

霞の命 仙人八霞とあり、て命とのべるこの

又院の御所とも、

霞の命

長きこゝろ ○八重霞 八雲御抄 八重八口、深きこゝろ、

こゝろ

多きこゝろとも八重と号す、○九ヶすみ、仙境とも、

必ず八重あるべし、一切のこの、かさなる

○一ト霞、横霞、いづれも霞のこゝろ風情とも、

○春の、契沖曰、春のゝどしとハ霞ゝとも、奥風の哥、山ゝの花の香ゝとも春の霞ゝとも

陽炎 養蠶輪 陽火糸遊 同物二名、春気地より外へ
と陽炎或ハうげろ也、空にうちつき
又降ることいと

川柳 水揚く其葉円かして史こ、枝短
ゆたかいろう く硬くして、水辺に生ず、又蒲柳と
云、川ぞひ柳ハ只川辺の柳と云、

門柳 陶淵明宅の辺に手づから五株
の柳と栽ふ〳〵五柳先生と
号す

風見草 柳の異名 蔵王 あづさゆ春の梢に風
見草のゝけさいろのうち靡ひく〳〵び

二月

春日祭 上申日○大和国添上郡春日の御社、
大中納言の内 織あそこのえ〳〵て上
卿とす、前後京を出て、南都にくだりて、夜に入て奉幣の義
と勤らる、左右の馬の允神馬一疋とひく、翌午刻帰京し
く此事を奏す上卿往還の間雨ふるとも吉〳〵、祭の
前日、春日の社家祭日の支干と南曹の弁に告ぐ、朔日〳〵
関白氏長者并諸家門外に僧尼 うめど 〳〵
軽重服の輩不可入の札を立 公事根元

亀戸天神花踊 九五日 江戸本所の亦、亀戸村に、二月九二日花踊の神事き、
祭礼八月廿五日〳〵、本所牛御前と隔年〳〵、

貝寄 雑談抄 天王寺法花記〳〵 粗其旨あるべし〳〵
と亦、詳、二月九日前後に難波の浦辺に吹風
仏縁感動〳〵竜城の魚鱉鱗介の種類あ〳〵
の浦に浮て出て、此会に値遇〳〵奉こ謂ふ〳〵傳〳〵侍る、
此沖津風に濱へ吹よせる貝と拾ひとりて、聖霊会供
養の造花にとり着て
上宮太子の前へ献す

鬘草 本名未詳、九二月に生
じて其葉三四すバの
ゝ、恰と麥の苗葉のごとく叢生す、女児春月是を採り
鬘に結び髪と組のよ結びとす、故に鬘草
の名あり○又雛草と云為忠朝臣の哥あり、

貝鳥 八雲御抄 貝鳥ハ春日山にあ〳〵、
尼恋するものと〳〵夜昼〳〵ず
恋すれば〳〵、ま〳〵ぶく春の野〳〵、源氏物語
若菜巻〳〵もあり、是其鳥と定る所、但定家不知之と
り〳〵と推ふ只〳〵〳〵鳥〳〵未決之 哥林良材
花〳〵〳〵花〳〵貝鳥同〳〵 仙覚抄 此鳥のわく〳〵と鳴声
と名と〳〵〳〵 湖月抄 貝鳥ハ深山にある鳥〳〵常陸国に、
杜若〳〵〳〵花〳〵〳〵此花咲時鳴〳〵〳〵○兼文曰、貝鳥

かゝる鳥ゝと鳥一物ゆゑ、何の鳥とえらん定めがたきゆゑ○此外諸書ゆゑ〳〵の説あれども略す

歸鴈 今ハの鴈 **月令** 孟春月鴻雁來 **淮南子** 燕春分而來、雁春分而去○今ハの鴈、今ハとハ今ハかくもんちどゑ心今ハもうんと思ひうきさのとゝかめり **猿簑** 立さらぐ今や紀の厂亀の厂 澤雉

鳴 **夫木集** 川越のもとの田中の夕闇ゆ **蛙** 無声の蛙 何ぞとき付バ亀のかゝ〳〵と鳴 **為家**

長明無名抄 井手の蛙とゝもゑ、こゝ〳〵あるゆゑ侍ら世の人おゝひまぐるハ只もてるハ皆うぐゝらとゝ思ひく侍ちゆゑ、それもたゞひまぐゝ〳〵ぐかゝぐとゝもてるハ外えさゝゆゆまぐ〳〵ず、只この井手の川ゆゑ侍うく色ゝるきやうゆゑ、ちゆハえとゝと大きゝまあぐ〳〵ずゝうつ後の水のもうゝ、ちゆハえとゝマありくゝとゝもてゝもまぐ〳〵ぐ、をゝハ水ゆゑすみく、夜ゆゝるゝゝゝゆゑ鳴ゝハゝ心すゝゝあるゝゝ

声ゝゝまぐる○無声の蛙と、江戸小石川無量山壽經寺傳通院の開山了誉上人聖冏和尚勤學のゝゝゝ

べ揚柳の葉とともに飾を添ふ、色青くして光あり、是を食へば陽気を資ける道家これを青精飯青飢飯といふ、

○桃花粥 金門歳節 寒食に萬花奥を粧ひ桃花粥を煮る

○榆柳の火 周礼 四時国の火を変る、春は榆柳の火を取、夏は棗杏の火を取、季夏は桑柘の火を取、秋は柞楢の火を取、冬は槐檀の火を取る、 輦下歳時記 唐榆柳の火を取て以て侍臣に賜ふ、陽気を煩はす、

○きの大官人はいとやまあるもの、ようこそ古哥ようよく各づけ、樺とらべざくらと訓るは非し、かべざくらは八重櫻し、加尔波、今云加波佐久羅 ○樺櫻は山櫻の属、古今ふかみどりとよめる是なり、 海棠 聯花 多識篇

かどづけ草 櫻の異名し、

樺櫻 大和本艸

書揚貴妃傳 明皇嘗て太真妃と召す、妃酒に被て新に起く、帝曰、此乃ち海棠の睡未足耳、 柳葉 新詩抄 俗に柳の花といふ

で柳の葉と称す、 按ふに柳の花三月末開、依て宗瑞も柳の絶とよめり、柳の葉は京畿の俚語なり、柳の花とも、

本艸の説を四月開花とのべ、元よりこれ四月の季なり、ことに、季吟が増山井に三月に生ず、是なり、秋の説と云へり、京畿の児童柳の花の蒂抜落ると拾ひあつめ、藁稭に貫き連ねて玩弄す、是と柳の葉を繋ぐとなり、花に治定せり、

雁風呂 秋戸の渡る時小き木を束ねて海上に浮べ、其上に羽の労を休む、其木を、南部外ケ濱辺に落ちたる木多くあるを人に捕らしむ、又は死し戸のあれば、故に其木を拾ひ供養の為、風呂を焚て諸人に浴せしむ、

蠶飼、蠶棚、 先代旧事紀 蚕を養ふの法養屋の先島、桑蠶、飼屋、西北にふかくして一の祭棚を設け、注連を曳て常に蚕神を祭る、頭て桑の大葉を取て、陰干布干し、こまかと箕箱の中に納めこれを祭棚の上に安く、繭室蝶を出す時に至て、其干葉を取り葉の上に置く、蚕種を産しむ、産已て、種子を以て箕箱に納め、老蝶を以て鋪幣に宿し、同く祭棚に安す、 和漢三才図会 ゆゑに作らんとする時、葭簾を用て棚を作り、凡蚕已生て稍長ずるものこれを箕に移し箱に入て並べ置の処を蚕と蚕棚と云、 尔雅 蟓桑蠶也、雖由樗繭也、蓍繭棘、樂、

之輩皆各因所食之葉命名ス 桑蚕ハ食桑の蟲故
み名く○ 蜀屋ハそのうち蚕とゐ家ゝ蚕家ともいふ、

蛙のめかゝる時

夫木 はらめかゝる蛙のうゝきこゑ 年浪草 是ハ
俗ゐ蛙のめかゝる時とゝ、蛙の鳴ころ眠を催すとゝ○此めっ
る蛙と八目と借るゝゑ心こ夜短く眠を催すと蛙の人の目を借る
るゝて俗諺ゝ 西華集 卯花と月夜と見こう山鳥、里ハ焙
炉の白ふ門ゝとゝつる 俳句の評ゐ支考曰、其頃蛙のめかゝる時
あゝん日永く夜短くふゝ 葛松原 閑子島
あくや蛙のめかゝる時 珍碩○年浪草、俳諧歳時記ゐ
只めかゝる時とのゝ出せるハゝゝゝゝゝゝゝ、心蛙のめかゝる時とゝ
又此題、増山井、そゝ出ゐふも出さぶゝゝゝゝゝ元禄年間の
句ゝも題ゝゝゝる例をゝず、今この季と定りゝ、支考
が評の詞も、珍碩が句も、初夏の物ゐゝゝゝゝゝゝれハ四
月の部へ入べき
とのなゝらん

よ

正月

吉田清祓

十九日 紀事 正月十九日、大祓毎年夜ニ入ゝ
吉田ト部家新年の行事を、斎場

よゝの年

去年ゝゝ年と
いふあるべ

所の前ニハ所壇をゝゝ、八方を拜せゝる、其後斎場所ハ角
社内ゐ入て、宗源神道の行法を修せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ大祓とゝゝ、
○一説ゐ今日の祓ハ疫神祭ゝ、八幡の疫神祭ニ同じ、節分
の夜ゝゝゝ正月十九日迫ゝ、此間疫神と封ずゝ、十九日ニ至
て其塚を撤す、

餘寒

春寒 説文 餘ハ殘也○ 餘寒ハのゝる寒ゝ、

藁蒿

時珍曰、二月莖を生ず、葉食ふべゝ、野圃家園ニ分植と
を用ゐずゝゝて叢生す、香気あゝて、秋花をむらく野菊
ゐ似ゝゝ○ヨメガハギ、ヨメナ同物ゐ
るべゝ、オバギハ似れども別ものゝ

兼三春物

横霞

か部霞の
条ゐ出す

二月

吉野の餌配

朔日 吉水院考物 二月
会式とハ正頭と
て當五月ゝゝゝ来五月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

頭坊よりし施行の儀あり、近国の貧人乞丐幾〻来集る、

雜談抄 摂州平野大念仏寺の本尊、一仏十菩薩の西像に供する元朝の餅と、歳首ふ吉野山蔵王の神人参りて此餅とも請て、扨蔵王権現へ備へ供養式終て、此餅を破碎多くの米ゆりく炊くて又餅とし、今朝日本堂ふおいて諸人ふ施す是と餅配とも、又吉野山中の僧俗へ丞残賦るし玉〻〇山を国軸山と号し、寺を金峯山寺と云、役行者の開基、本尊ハ蔵王権現三躰〻

本草 春月嫩艾と菜て菜ろ〻食ふ或ハ麪ふ和して餌飩とす〻一切鬼悪気と治す、**大和本草** ようぎと灸治ふ用る故ここぐさとも云と等て、次ふ五月五日ニ至る、

三月

本朝食鑑 艾餅ハ嫩き艾苗と菜り豆とを煮熟て〻、蒸糯ふ合せ搗て餅を作て、三月三日必この餅を用ゐて賀祝とす、

吉野の會式 十一日、吉水院の寺説なり、大和国吉野山子守勝手の両明神の神輿、本堂へ渡御、旧記ふハ三尊両社の宝前ふて、一切経会修行とあり、中古以来仁王会修行す、法華と云て、西神輿還幸、又云三月花の頃ときて花会式と古来より云傳ふる〻ふ山中行事ニ日数〻の式ふ吉野草ふも引く、花会式と云迫て、花見のみ引

櫻の異名 吉野と才一と

楊貴妃櫻 興福寺の僧玄家とも云すふ此の名引くべし、

楊花粥 かゆ部寒食の条ふ注ス

蓬餻 蓬搗

愛せし故名とす、一説ふ、此花大輪ふて紅色と含ミ海棠ふ似る、故ふ海棠の雌とする故事ふ各ふ子ふとを之ふ、

呼子鳥 此鳥のこと、古今集三鳥の一ちとしいひ、諸説ふ説くあり、或ハ猿のなりとハ、或ハ山鳥と云、又ハ山鶉、又ハ鶯、郭公、ほとゝぎすの鳥ふあるべし

年浪草 或書ニ云呼子鳥ハ唐ふ喚起鳥と云、春の中つゝ鳴鳥ふて、爰ニハ鶯ふ似る鳥のこと也、ゆくゝと鳥の子と呼べハ来る故とも、又ふ云れ鳩とも云、又景鳥とも云、四月の部郭公の来るを啼鳥と、此鳥ハハコ〻と鳴ゆを呼子鳥と云、〇真淵翁曰、ふて鳥ハ春の暮より長うけて啼鳥と、此声ハ人と呼ぶ〻〻ゆふ〻て呼子鳥と云、鳩ふ似て羽も脊も灰色ふ

みゝ〜腹ハまゝゑ鷹のごゝ、足ハ鳩〜〜火〜高〜、又曰、
加江鳥ゑゑもこの鳥し、今俗のかんこ鳥ゑゑこの、兎子
鳥の字音よう
とゆく誤まるし

た

正月

室船數 大晦日より元日に至るの夢を初夢と称す、されど、今俗

大黒舞 悲田寺垣外の類、大黒天乃姿を摸〜、面にゝ頭巾と着〜、民間の門〜と唄ひ舞ふ、年〜嘉祝の詞と以〜新作〜して唄ふ故ふ坐唱寄とと大黒舞ゑゑ、○江戸ゑゑ大黒舞ゑゑハ、新吉原町ふ限ゑゑ、非人のゑゑ、狂言物真似ゑゑ〜ゑ、

橘 和漢三才圖会 太知波奈の和名ハ橘類の惣名也、今ひとふたもちゑると称ゑゑものハ乃ち包橘こ、○大和本草 ニ、橘と密柑と二〜○時珍曰橘品十有四、

月令廣義 正月初二日、賜橘、於群臣、則古今以橘為嘉祝之果、

橙 和名抄 橙、似柚而小者也、和名安倍太知波奈 和漢三才圖会 五月小白花と開く、八年を歴ゑゑの実と結ぶ、霜後黄熟す、其辨苦くして微酸し食ふべゑ、春ふ至る〜色濃く冬きふ耐ふ、夏ゑ

後色と変じて青〜新舊辨ず〜〜、故ふ俗ニ呼ぶく代〜と名づ〜不敢とゑ、以て嘉祝の果とすゑ、

俵子 名義未詳、按ずるふ奥州金花山ふ近き海辺のごゝ〜祝語ゑゑる、春耕糸切歯 俵子ハごゝゑゑふ小殿原ハ武家の祝語、田作ハ農家の祝語、俵子ハ商家の祝語、○南海ゑゑ、海鼠と俗ニ俵子と云ふ

田作 小殿原 和漢三才圖会 五万米鰮ニ、正字未詳、一名田作、又古止乃波良とゑ、

店卸 商家にて、去年中金銀の出入簿用、又ハ賣買の利不利の高ふと改めゑゑ、

大元師法 延喜玄蕃式 凡大元師法、毎年正月起八日至十四日、一七日於省修之 公事根源 治部省ふ〜七ケ日是と行ゑゑ、蔵人内蔵寮の官人ゑゑ、御衣と給〜壇所ゑゑ、御衣箱ニ入緋のつゝみ〜是ゑゑ、御所〜ゑゑ蔵人封と付く、是と治部省ふつゝみ、御祈をゑゑゑゑ、結願の日ハ御衣ゑゑの如く返上ゑゑ、○師の字ゑゑ、たいぐんの法ゑゑ、

種物 神代巻日、

以粟粺麥豆為陸田種子以稲為水田種子因定天邑君云〻

抑 稱美の名し玉撥玉拍とゝ云ふなり

二月

七日ゝう南都興福寺南大門薪の能ゝ云ふる元是興福寺夜中の法会の間寺僧の奴僕春寒ふたゝ〻門前に於て火を焼其光ゝ〻〻〻

捻堂と号す、是より先光念寺の北上の御前の社に詣て、各
異口同音に安乐比花と唱ふ、太鼓横笛その節と助くるもの
後大源菴の社下の御前の社に詣て、おのゝ踊どかゝ、ちはて
上野村の捻堂に帰る、是ゝ一の里正の前において踊畢
て各家に帰る、又上賀茂、梅辻、邑本、河内、三ヶ村の土俗、今
宵に詣て、おのゝ踊と催すこと、上野村の如し、ゝ後者
賀茂に帰る時に社務及社司の家にも踊とゝまる、到る処其
家の主人肩衣を脱ゝて、是と期ゝ帰と告ル
〔繩頭の微意〕欲 傳云、春時疫疠多く行る、今宵
八疫神に、故に踊と祈ゝ神灵と勸め祭る、と、或説に、花
ゝの祭ゝ花落と惜ミ、風雨をゝと祈る、故に安
ゝ花ゝと、又一説に、今日高尾神護寺の法花会動れ
八魔障ある故に踊と催し、魔と防ぐ、故に千ゝの花と、
安ゝ花と八法花平安に修ると祈ると、此説すゝ
むゝを 〔雜談抄〕 この祭八、寂蓮が奥行ゝ処、今土人の囃
唱ふと、寂蓮の作ゝ

〔天木〕 高尾山あれあるゝ

〔賡韻藻〕 竹秋三月也、

蘭秋七月也 〔贅事竹〕

竹秋

西行

〔譜〕 八月為春、三月為秋、天ゝ

礼

正月 霊辰

〔唐李嶠人日詩〕 七日最霊

辰注、以人為万物之霊故謂人日

〔公事根源〕 上卿并外記史也、

二月 列見

ゝ、太政官少ゝ、六位以下の芸能あゝゝのとゝゝ、式部
兵部の二省ゝゝ率ゝゝゝゝ、上卿ゝゝゝゝ、器
量容儀と見るゝゝし、挿頭の花と上卿以下冠ゝゝ、
大臣八藤の花、納言八桜の花、参議六位ゝれゝゝ花と、非参
議以下八時の花とゝ千ゝ、

〔江次第〕 云、列見、

二月十日、諸司長上、成撰人列見太政官二省事之

連翹

和名抄

和名以多知久佐、一名以多知波世

正月 葵瑞

ち部朔賀の条に出ス

雜煮祝

かゝと祝ふ

〔雜談抄〕 雜煮八餅に大根、芋、蕈、鳥、豆腐、打あゝびゝ、菜ゝと加ゝ、

喰ふ多種と交ゝ煮る故に、雜煮と

孫すゝゝ是と暑ゝて、夢と祝ふゝゝ、

蘓氏将来

ち部、

厄神詣の糸に出ス

送窮

北九日

〔四時宝鑑〕 云、高陽氏の子、衣の敝ゝゝと好ゝゝゆと食ふ、正月晦日

死す、世ふ糜と作て破衣と巻口ふ捨て貪思いのぶく、又池陽の風俗正月九日と以て窮九と為す、産宝の壷撤と掃除して、是と水中ふ投ることを送窮と云、五雑組謝肇淛曰、俗説ハ信ずるふ足ず、窮也窮也皆晦盡の義也、諸月といえずして、独正月といてこの八其端ふと挙ること、○按るふ送窮ハこの方ふて晦日掃あて、

兼三春物

素麪海苔 長く色青黒し海素麪是なり、

二月

園韓両神祭 雍州府志ニ舊宮内省ふて、後禁庭ふ移す、古へ春二月冬十一月上丑日ごとと祭る、冬議一人祭所ふ就て事と行ふ式西宮北山両拔ふ詳あり、相傳ふ延暦年中遷都の時、處と他處へ易てんとす、神託して曰、唯この地ふて皇基と護ること、今ハ其社ふて惜いふ、紀事追加ニ云、洛陽醒井通り高辻上ル町ふ社あり、延喜式ふ所謂園神一座、韓神一座とあ是と、今本荒神と云

井 ミ部、若水の条出

正月

包

経巻 紀事江州大津の人、三井寺門前の人と、各野原みるいて、左右ふ列して互ふ大経と角を争ひ引、両方ともふ太鼓とちたゞひのふ進む勝方其年福となる、是と綱引と称す、十三日より十四日の朝ふ至て去ることこの戯を所くこの条ニ出ス

土筆

和漢三才図会 春月土筆出ス、状筆の頭のごとく

兼三春物

継尾雇鳥 あ部、鳴鳥狩の

摘草 雑菜摘 通俗志 雑菜機菜雑こ摘ハ春と云て、

角組芦 角 ○支考曰、あのてえいづるハ牛の角の如く、組ハめぐ芦 鍋 むし、○野相公詩碧玉寒芦錐脆蘆 新古今三島江や霜もやぐもめ芦の葉ふ角ぐむなどの春ふもぞふ通光

椿 山茶、海石榴ふ和漢三才蒔会 其能厚く大きふ艶美ちことと牡丹芍薬ニ亞ぐ惟恨らくハ其、蕊むくこと甚醜く、其落るも亦脆きのみ、草の瓣赤きものと山椿と名づく、此乃ち木源あり、白紅粉絞て紅或ハ白相半す、八重千瓣の種枝挙せず、秋ふ蕾と生て、春花と開く、冬開くものと早椿と名づく、人以て春と賞す

列く椿

万葉 巨勢山乃列々椿都良々々に見乍思奈許
端乃春野乎」式哥より作例なるべし、つゝ、
木の数本列哥 唐 椿、葉狭く長く色淡く、澤なく、葉の紋横細う
生る椿とこそ。○ 椿、
う〳〵 鶏冠に似たり、其花重弁大き〳〵 ○ 玉つばき、
して正紅なり、いとゆる蜀葵ことのゆゑ、八千歳と以て春とし、
○ 八千代の 荘子 大椿とえたり
玉椿 八千歳を以て秋とす、 後拾遺 君が代も
もろもろ〳〵玉椿ふたゝび色八あらたまるも、
こゝを荘子に云る大椿と以て、山茶に准てとる、○ 二階椿、
○ 伊勢 花形のかたち〳〵
椿、 別種の名なり、○ 落椿、 散椿、 椿表
くも昔や 蒲公英
ちる椿 羽紅 **皷草** の一名し **三月** **接木、接穂**
月令廣義 梨と接ぐ、春分の前十日と用ひ、
〳〵、猶と接ぐ、春分の後十日と用ひ、 **蔦の若葉**
天和本草 地錦葉八衣の紋に付るつゝ、似て、冬月葉落
ず、秋八紅に、又常のつゝ云八冬葉落つ、秋八紅葉する、

この両種の若葉遅速あり、冬蔦
八芽ぐち遅く、夏蔦は早し
游波、天女、和名豆波久良女、俗云豆波久良、又云豆波女 和漢
三才畜会 燕八玄衣白頸赤黄の頷に、春来り秋去る、偏鳥
と表裡にして、其飛翔すること甚捷く、直に翼り仰ぎ不能
飛、他鳥のあさぐるところ、故に鷹鷂あつて敵せず、○
時珍曰、泥をつゝ、 **燕、同巣** 鳥、鷂、鶴鴫
屋宇の下に巣を、 **三月** **茅花** 本艸 白茅、葉、
茅と云白 花常の桃より小さし、故に茅を
花を開く、 **油桃** 和名抄 李桃 和名都波岐もゝ **壺菫** 萩枝折
もゝは花の墨つぼの形ちなるゆゑなるべし、童墨入の意なり、
千金翼方 羊の花とくゝバ躑躅もて斃す、
躑躅 故に羊の性至孝、此花の赤き蕾
母の乳と思ひ躑躅〳〵感じ折〳〵飲之、故に云
躑躅衣 桃花御記 面蘇 躑躅下重面蘇 茅裏青打 三月着之 台記
面紫裡紅、岩つゝ面紅 山 唯心院御抄
裡紫、白つゝ面紅裏むらさき、○ 時珍曰、高
四五尺低もの一

二尺、枝少〻花繁〻、一枝数蕚、二月始て花と開く、紅うゐ
ゐ紫なるあり、五出なるあり、千葉なるあり、一名紅躑躅又山
石榴又映山紅 ○白 躑躅、 万葉 細比礼乃鷺坂山乃白管
又杜鵑花 自吾余尼保波氐妹余示 作者不知
○羊躑躅、 韓保昇曰、小樹、高二尺、葉八桃の葉に似て、花黄色、
瓜の花に似たり、 和名抄 羊躑躅 以波豆々之、一云毛
知豆七之 ○蓮花 つゝじ、 和漢三才画会 羊躑躅 一名八九
蕚、遠望ちハ蓮花の如く、故名之、
按本草に羊躑躅と蓮花つゝじと訓ず、韓保昇の説も亦蓮
花つゝじ、麟つゝじ、羊躑躅同物と見ゆ、倭俗別種なり、
○浅葱 はゝじ、 大和本草 葉八大霧島の如く、枝蔓のごとし、
小木にして、花八棉花に似て小〻、色アサギ、
大山の岩上にあり、 ○紫の 山つゝじ、 圃上 紫花春咲木の高
深山つゝじ、 一丈許ちかく、常のつゝじ
の三倍の大サあり、花〻八〻、葉三角にして野州日光山中に
多〻、土人ヤシホと云、又白花のものあり、又土人白ヤシホとよぶ、
姐 洛外山中に多〻、花紫色、小輪紫の 瓔珞
○つゝじ、 映山紅の花に似て、葉三角にして花可愛

紫の花に似たり、枝に連なり咲て下り垂る
こと瓔珞のごとく〻、故に名づくなり ○平戸つゝじ、 琉球躑躅
とも云、平戸八九州の地名、琉球より出づ、四月 段 段
花と開く、単瓣白く、其大なる者、一二丈に至る ○ つゝじ
地名に、上賀茂の南の山に壇と云所あり、赤紫 ○茵芋、 本草 綱目
繡蓮花四種のつゝじを、壇段西宇共に書来り
茵芋 ○あい つゝじ、 和名抄 山榴、和名阿伊豆ゝ之 本艸
ザウキと訓ス 時珍曰、深紅色者、即山石榴、
○ はゝじま 白紫の数品あり、ことゝ大隅
国霧島山より出せるや

正月

年始状 注に不及 子日遊 は部、初子 子日衣 何ぞ子
日の遊に着用 日の条に出
の衣を云べし、 猫の妻恋、 猫さかる 雑談抄 此者陰獣に然バ
陽気に犯されて、交合と好む、是と猫の恋と、

二月

二月のこと 仏のワヽ斗 涅槃会、 涅槃像 拶厳経 涅槃乃清浄不死不生
之地、一切修行者所依帰、注

超脱輪廻出離生死之地と云へり死とは如来御年七十九二月十五日大喪を示し已て頭北西右脇すゝ滅し給ふ娑婆ハ大蔵一覧入滅品に出づ○涅槃像ハ五十二類天道人道地の三十六禽洪河の鱗魚天地の間に生を受るとの皆愁歎の容形を画く也、是と二月の別仏のゝゝ去し仏忌じゃうはつ云し

正月

菜摘川神事

七日 神社啓蒙 勝手明神の社、大和国吉野川ハ五祭る所の神一座受曇神、云て毎年正月七日此社の神人氏子の男女此川の辺ハ至て若菜とって勝手御前の神供ハ備へ祭祀とす故菜摘川神事と云、

内宴

公事根源 内宴とハ内々の節会に仁寿殿にて行ふ、文人ども題とあたへて詩を作る、やがて御前にて講ぜらるゝ、

七日正月

俗に正月七日と五節句の初とす、七種の羹とゝ〳〵遊宴をなす嘉義とふす、是と七日正月と云下賤の輩正月七日ハ

七章

ホの日と正月とゝゝハ恣ふ遊びをもとゝ、

薺打

荆楚歳時記 正月七日七種の菜と以て羹と作す是と食ふ人万病ハ〳〵、○七種ハ芹、薺、蒲朔、蘩

な

佛座、於蘿蔔、世説故事苑 七種の菜と打て、諸子の考いとゝ見ず、按ふ事文類聚ハ歳時記と引て曰、正月七日多く鬼車鳥渡る家〻門を槌戸を打、灯燭を滅し〻〻ことゝと禳ふ、和俗七種と打ハ唐土の鳥ハ日本の玉地へ渡らぬゝとふと唱るハ此鬼車を忌む意〻歟と打ハ鬼車鳥の止まるゝゝふ禳ふ、太平廣記 鵂鶹ハ即鴞あ人一名姑獲一名夜遊女又ハ鬼車と名づ、春夏の交稍陰晦ハ遇ハ飛鳴〻嶺外ハ過ぐ、尤多し人家入人の魂氣と鑠ハ或云常ハ血と滴る血を滴らゝの家ハ凶咎あると云〻

鳴鳥狩

泊山朝鷹

鈴こさす人、○泊山と八山野ハ出て宵ハ雉子の鳴所を聞継尾鷹、置て未明ハ行て鷹ハ雉子と捕らゝする也、泊山とも鳴鳥狩とも聞き及鳥とも朝鷹とも云、○鈴子指ハ鷹百首抄云、是ハ泊山泊狩ハあさたるかけゝる鈴ハ鈴子と云ものとゝて鈴の鳴らざるやうゝ〻鷹とすゝく狩〻て合するゝ鳥とぞ〻ゝ〻ゝとの義云〻○継尾ハ古へ継尾の鷹〻〻ものあて鵠の尾と以ゝことと接ゝ何の用とゝ云ものゝ近世尾羽

損傷し、或ハ短小なるもの他の鷹の尾と以てこれと接

兼三春物

永日 遲日

詩国風 春日遲々

二月

苗代

朝食鑑 二月蒔とのと民俗苗代と云、籾種を用て俵子に充て川水に漬す十五六日或八十八九日及び廿日三五十日もすこしあるも取出して俵子とひらく、四五日六七日と経て後に假田に植と蒔と苗代と云、○苗代と云名ハもと種をおろす処の田をいふ代とハ七十二歩と十代とも云ふ也、田畝の数に五百代千代まで代に同じ、こゝ轉ずるに、春田に水と引種蒔ものの各目と

水口

本朝食鑑 凡稲苗水と得ざれバ枯る故に苗

祭、代水と引の祭なり○旱損水損のもとあり

○苗代の水口に幣を立て祭る、俊頼朝臣の説に幣串に豆とつゝぬきを祭るとそ

苗代菜 黄

和漢三才画会 胡頽子大抵三種あり、其葉と実と皆少異あるのみ一種春月に當りて苗と種時実熟す大さ小き麦の如し、苗代胡頽子と云

菜花

時珍曰、菘ハ今人白菜と呼ぶ二月黄花と知ること芥の如し四月三月角と結ぶも亦芥の如し

蕣花

和漢三才画会 葉地に布て生ず形ち蒲公英の如くして微硬し香気あり、実と結ぶ三角にして大く本窄くして三稜の嚴の如し小児其二つを以て相磨まバ音あり故に三線草と名づく

庵爵

本草 冬至の後苗と生ず二三月細白花を開く

三月

東東の粥

か新寒食の桑出

東東

の花

大和本草 夏芽と出を故に名づく○蒹文曰、東東の間来の芽たち又花とゝ云ふ上の説の如く夏に俳諧活法の書に三月に出す人恐らくハ誤なるべし九月に八四月に小葉と生じ五月葉稍長し葉の間に小白花と開く微青し

梨花

時珍曰、二月白花と開く雪の如くして六出、棠梨、土已に風ふくなれバ実と結ぶこと佳なり○梨、時珍曰、棠梨八野梨に異なるこの山林にあり軒の其擬梨に似て小く二月白花を開く、○軒バ妻梨、小生たる、芽生の伊勢国芽生の奈良櫻 泝石集 ニと云 ○浦梨、浦梨の名呼び奈良の都の八重櫻とゝ云ふ八重時も東円堂の前に立上東門院、興福寺の別當に仰せて かの櫻とり〻ハ堀て車に

入てゆかせると大麻に名と得さる櫻と左右かく奉らてい
僻事かりとて打とめさ女院にて奈良法師ハ心
あきものと思ひ是ハこの花ハ大麻と真ふ色ふかしとて、
さ〳〵ハ此櫻をハ我櫻と名付んとて、伊賀国余野と云庄
とゝまて花がきの庄を

あをみ

名付けて、かきとせられり

青白く、白華細豆蔓生す、四月中子と生す、時珍曰、獮
蓉ハ葉 蒼耳ハ似て微長く、地菘ハ似て稍薄く、節ハ對
て葉と生ず、皆細毛あり、肥壤に八一株ハ技と分つこと十八、
九月小花を開く、深黄色、中ハ長き子あり、

徒然草

此草をつく耳花、すかひちいゆと名んなり

夏近し

夏と待

ら

三月 禮拝講

台記 後一条院御宇万寿二年、大宮
権現の託宣ありて、叡山大宮の室前にて、法花八講を修す、こ
れより以来毎歳三月十二十三日ことに行ふ、てまと本礼拝講
と云、新礼拝講と云ハ同月廿四廿五日十禪師の社前にて是
と行ふ、是又後堀川院元仁元年、慈鎮和尚の本願なり、

む

正月 結昆布

新年の雑煮ふくまと加ふるなり、
むつびとふこぶと云に訓のちり
なり、

二月 紫の塵

乙部殿の
条ふゝ、

蒸鰈

和漢三才図会 大きさ
陰乾ゆゝ数日ゆく、炙こて喰ふ仍てむし鰈と名づく、
やゝかるものと塩水と以て蒸して半熟せしめ取半て
春月
賞之、

三月 麥鶉

本朝食鑑 三四月田麦長を時、
春草麥の中ふ子と哺まる鶉い、アイフと云ハ
鶉の雌をらむ、雌ハ囀アノ、子と哺まる時、ふくとと、
ナキ
しる、

う

正月 裏白

乙部歯
条尖、

裏白連哥

雍州府志
北野社ふ正月四日裏白の連哥あり、九連哥懐紙四枚ふ、
中古執筆誤て片面と脱て、片面と記さず、是ふて流例
とかるて、片面を白紙ふす、故ふ一枚
とそ〳〵五枚ふす、依て号ふ、

馬乘始

法歌ふ
土ふ、

謠初

ま部松
嵯峨条山

郊杖

江次第 上古有出御南殿皇太
子参上儀、近代不行、春宮祓

獻卯杖其木槇櫪三束、木瓜三束、比々良木三束、平保己三束、黒木三束、桃木三束、梅木三束、椿三束、〔公事根源〕御杖とハ、持統天皇正月の卯日大学寮ゟ是を奉る、日本紀ニあり、又仁寿三年正月ニ諸衛府祝杖を献じて精魅を却ぞく、悪鬼を拂ふ、是を以て悪鬼を拂ふ、作物所ゟすでゝを造物ゟ、其上の岩ゝの中ゟ御生気の方の歎をほくとく、卯杖ゟありむ、〔雑談抄〕今の世ゟ賀茂ゟ、卯杖ゟ、在家ゟ毎ゟ一尺余ゟの白く削ゟる木ゟ、日陰のゟを纏ひく、倶利伽羅竜の形ゟ作ゟる物と、〔三光院御説〕卯杖卯槌円

卯槌

〔月令〕孟春之月、魚上氷、○孟春発端の

〔本朝食鑑〕其生じて二三寸ゟ、氷ゟ上ゟ、魚泳ぎ出て、氷ゟ上ゟ、

鶯菜

是を鶯菜と号すゆゑハ、鶯の鳴く時ゟ当て生ずる欤、

土竜打

畿内正月十四日、此事ゟ見る

先生の歳時記ゟ、西国ゟ此日薄暮ゟ明燒ゟ至ゟて、土竜を打て、藁と束ねて、地を打て、是を浪花

春

あてハ此日地上と海嵐と縄あてくゝる曳あくゝ鉦太鼓と打て拍子呼もあり〔和漢三才図会〕鼠海嵐と畏る、海嵐ゟ和名抄梅、和名字文潜

鼠の拄と以て、花園とおひ

ゝてハ鼠ゟ入らず、

梅

〔確類書〕梅四徳と具す、

初生の蕾ハ元ゝ、開花ハ亨たゝ、子と結ぶハ利ゝ、成熟する ハ貞ゝ、梅ゟ四貴あり、稀なると貴て繁ゝと貴ゝ、老ゝと貴て、嫩ゝと貴ずず、瘦ゝと貴ずず、肥ゝを貴ずず、蒼ゝを貴て、開ゝと貴ずず、○梅数品あげく計ゝ、中華ゟハ大庾山領、梅多し、名勝の地ゝ、日本ゟハ、山州日野、梅ヶ畑、鞍馬、高雄、伏見の梅林、その外諸州ゟ多し、凡梅のゝハ、范成大梅譜ゟ詳し、○飛梅、江梅、紅梅、鶯宿梅、越中梅、腹の梅ゝめてゝの梅、末閣紅、鑢梅、八重梅、櫻梅、座論梅、○異名 好文木、この木ゟ、花の兄、春告草、白草、香散見草、以上おの〳〵頭字の部、○尋見草、○難波梅、中花ゟ白く千葉ゟ、○豊後梅、大花ゟ白く八重ゟ深紅紫のごとし、○軒端の梅、中花ゟ深紅紫

軍葉うう、洛の寺町、誠心院の境内ある、小式部の墳墓あるべし、つくえ、和泉式部の愛せし処の木なりと、○行幸梅、大花ずつ紅あり、千葉、○綸旨梅、行幸梅とおなじ、

臥竜梅、武江本所亀戸清香庵とゝあり、数十株の梅と栽世ゝ梅やゝさゝと、又一株の梅あり、枝條地ゝ横ハりて、卧ゝる竜の如し、故ゝ卧竜の名あり、○白雲の竜とつむや梅、花嵐雪

山中ゝハ、梅の咲そゝて春と、梅が枝うゝふは、部、萬春集の条ゝ注す、知るとゝ心ゝく、昏とゝ、

梅花衣

孫念院御拙 抄 梅衣面白裡蘊芳自十二月、至二月ニゝ

梅暦

梅是山家暦○

梅重表濃紅、裏紅梅、

逍遥院御拙

鶯衣、鶯袖

藻塩草 萩枝折 ゝゝ、袖の腕縫ゝゝ衣の袖と東小袖とゝ、衣の色ゝあゝぐゝ、名ゝ依て春あるべし、

兼三春物

麗

杜詩 遲日 江山麗○麗、華麗、妍麗、おゞ続く皆春色の百花咲乱る、鳥獸山川もいろめきて春とかゞる意、

鶯

詩経 出自幽谷遷喬木 古今集

巣の谷ゝう出る声まゝハ春ゝるゝとゝ誰ゝゝ、大江子里○清山記 正二月ゝ至る毎ゝ鳴と春起とゝ、三月ゝ至て鳴止と春去とゝ、呼て報春鳥ととゝ、

和漢三才画会 鳴ととハ尾を揺ゝゝハ、冬月卿々ととゝが如し、人の舌鼓ゝ似ゝゝ、立春ゝ至ゝ始て囀り、季春ゝ止る、其声清亮円滑ゝゝ、飛啼ゝゝとゝハ急ゝして長し、法花経ととゝが如く、或ハてけゝゝとゝが如く、月日星と、ゝゝゝゝゝ、

歌よゝ鳥

鶯とゝ、 古今序 花ゝゝゝゝゝゝゝ、水ゝゝむ蛙の声とゝけば、いけるとの、いづきゝ哥とゝゝゝゝゝ、哥ゝゝ鳥ゝゝゝゝ、○とゞめ鳥、人来鳥、短ゝゝ鳥、金衣鳥、春告鳥、ゝゝゝゝ鳥、以上鶯の異名ゝゝ、おのゝゝ頭字の部ゝゝゝゝ入ゝゝと見ゝゝ、○黄ゝ鳥、詩ゝゝ、所の黄鳥ハ今の鶯ゝあゝぶとゝる説ゝゝ、あゝゝの云、黄鳥ハ俗ゝ朝鮮鶯とゝとのゝて、其羽真黄ゝて鳩の奔ゝゝ、

鶯の琴

赤詳、疑らく ハ鶯の琴ゝや、

鶯笛

徒然草 ゝゝ、ゝゝゝゝ、ゝとの作りて吹笛也、

鶯

鶯の琴 和漢三才画会 其声円滑ゝて短ゝ、鳴時、声ゝ隨て両脚と互ゝ挙て、琴と弾手と揺す

加一、故ゆ俚俗宇曽琴と弾ずるを以て宇曽姫と云、或ハ形麗しく声艶

大

雄ハ晴とよび、雌ハ雨をよび、

和本草 雄とて雌とあるを紅うぐひす紅

本草別録 此の草風と得て

獨活

動ずず風あるくして自ら動く、故に独揺草と名づく、

二月 五加木 蘇頌嘉經 五加木春苗と生ず、茎葉とも音一叢をなす、

羅山拾稿 この花繁栄

姥櫻

老婆多く歯落て別に歯と葉と和訓相通ず、故に是を姥櫻と

三月 飛羽觴

き部、曲水

梅若祭 木母寺大念仏會 ○武蔵の国葛飾郡黒の条ゆ出、十五日

田川梅柳山隅田院木母寺の縁起に云、往昔吉田少將惟房卿の男七歳の時父子別れ愁傷のあまり遂ゆ有為の門ゆ入ることを願ひ、叡山月林寺ゆ登りて修学す、十二歳ゆ〳〵野人の為ゆあざむかれ、東海の旅ゆむく、病ゆ〳〵〳〳終ゆ貞元元年、丙子三月十五日此処ゆ早世す、忠円阿闍梨適〻ゆ会し、無上菩提の作業を別に、常行念仏を修す、それよりこのかた今ゆ至り大念仏会あり、遺語ゆ〳〵塚を築き、柳を植ゑ今日諸人群す

鶉

鶉の巣 鶉ハ性醇ゆ〳〵淺草ゆ叢伏す、常居ゆ〳〵常に、地ゆ赤す、○ゆ部ニ再ス

随ゆ〳〵安んず、巣をもつて草中ゆ

萍生初る 月令曰、萍始生

菅也、雀の巣ゆ似て〳〵秘ゆ

穀雨之節 氣候也、

ね い部ゆ係セ生ス

の

正月 賭弓 江次第云、

射礼の後朝を以て行ふ、射礼正月十七日賭弓翌十八日 其略云、主上射場

弦ゆ出御、ゆ射手四人立具ゆ〳〵と射る、南ゆ〳〵この

二人射ずして後ゆ退出す、次の者歩進む、又次者到来

と待つ、其退出路左近ハ射場の北の砌ゆ退き右近ハ

弓場の東西北間小部の下ゆ〳〵退く〳〳勝方乱舞ゆ

て勝負の舞と奏す、左羅陵王 右納蘇利 ○賭弓ハ清和天皇貞観

二年正月十八日ゆ始て行ふ、公事根源 是ハ天子射場殿

ゆのそなへ、弓と御覧ずるゆ、仲春ゆ弓とるゆ礼記ゆ

どゆも侍るゆや、堋をつき的どうけゆ、左右の近衛左右

の兵衛四府の舎人どもの射侍ゆ〳〵事ゆ〳〳〳

射手ハ饗をとる、是を射礼あるべしとぞ、○射礼ハ賭弓の前十七日ハ行なる、西月ハ三月十三日ハ也、公事根源にはこれ、又射遺しまハ、射礼の翌日に、昨日射礼ハ春ぜさる四時ハ今日射是なり

蹴斗

下部古事記 天照太神伊勢国五十鈴川上にて神代の人形を学ばせるなり〻蹴斗を作りの事、打鞠に、

残雪 続拾遺 春あさてきあか風ふるる山のげにこそ

のこるこゝろぞの――う雪 一条前関白

野大根 兼文曰、西土の小大根、相州のそなる大根是、

兼三春物

海苔 説文 苔水衣、水上○青海苔、甘苔、鶏冠菜、潤氣所生在水傍 於期苔、櫻苔、素麪苔、黒海苔、浅草海苔、以上おの〻頭字の部にこれ入る、○品川海苔、武州袖の浦に生ず、○奥津苔、廣サ六七分、長サ五寸ばかり、頗る厚〻紫色、○葛西苔、総名なり出ず○十六島苔、雲州に生ず、紫菜なるべし、

野遊

天木 春部 野遊 都人宿をすぐるの事今日も野辺にてあそぶ 後京極摂政 貞享式 野遊とは、

川狩の名類あるべし、平匂の雑ハ勿論、春秋の二ハ用るとハ例の衆儀なるべ、

長閑 春の日のユフ方りと長く閑うあるとぞ、

二月

荅葱 時珍曰、山原平地に野人これを食ふ、白花と開き実を結ぶ、

軒端の梅 部、梅の条ニ云、

三月

上巳梁 和漢三才録会 魚梁ハ竹簀を左右に立、上廣く下狭く、空口に別に簿を曲く籠の如くにして底に、巳梁の空口をとるるもの即ち筍、魚流に隨て入、又簀を以て靠の如くして、巳入るとハ頃ふ〻障ゑ、出るとハ逆ふ〻去るを〻、○上梁ハ若鮎の川水にさかのぼるを逐下して、梁に入て取るを云、

水 部に併出す、

く

正月

元日、元朝 三朝 玉燭宝典 正月一日為元日○朱子曰、元大也、始也、尚書大傳 正月一日為歳之朝月之朝、日之朝、故曰三朝

元三 三始○師古漢書注 元三亦三朝同義也、

春 れく

又元三者三元之轉称也、【魏宣傳】元日歲之始、月之始、日之始、故曰三始【玉燭宝典】元日、歲之元、時之元、月之元也、故曰三元元始也

元日節會

諸司奏

七曜御暦

氷様 国栖奏 履赤奏 ○各頭字の部に出 ふ渡御あり、群臣百官ふ酒とゐへく、宴会あるの儀、宴会と書てトヨアカリとゐめつ、大うさの節会の名ゑて侍ゐゐや、十一月中辰日の豊明節会ゐハ限るゝ〳〵ず、云〻其式江次第ふふ詳く、

【清稽雑談】この節会ハ天子紫宸殿

○せつさたゐふのさとゐねやさ〻〻しさの豊の明のそゝめあるゐん

頭昭 国栖奏

【日本紀】應神天皇十九年冬十月朔、幸吉野宮時、国樔人来朝之因以醴酒献天皇而歌之云〻【延喜式】九諸節会ふ吉野の国栖御贄を献ゝ歌曲を奏す、節毎ふ十七人と以て定とす、国栖十二人笛工五人伶人二人山城綴喜郡ニ有、夫国栖八人ゝ甚淳朴ゝ毎ふ山果をとり食ふ亦蝦蟆を煮て上味ゝす、こゝを毛味と名づゝ、其土京ゝ東南の山を隔て吉野の川上ふ居、峯嶮ゝ谷深ゝ道路狹嶮を故ふ京ふ遠ゝ〻ずして来ることゝ希ゝ、こゝを以て土毛と献ず、其土毛ハ栗菌年魚の類ゝ云〻

【公事根源】今の国栖の奏近世吉野ゝて参ることゝ絶ゝ、歌をゝゝ笛を吹あゝ千、吉野〻〻年の始ふ参りゝることゝ云〻

国栖笛

【江次第】国栖の歌笛ハ諸書ふ考ふ、元日ふ於て奏之云〻【雑談抄】国栖の歌笛ハ諸書と考ふ、元日ふ於て奏す、七日の節会ゝて踏歌の節会、五節ゝて舞ことゝ見ゝ、作者心得ゝ、但始と以て正とゝ、ゝハ早

元日不開戸

【公事根源】江戸の高家多くゝて春ふ許用ゝ、元日ゝと開ず、一日廃務ゝ、又俗間ふ家内と掃除せずハ元新年の陽氣ゝ重ずゝ云ゝ、唐ゝと此事あゝ、閩部疏ゝ云ゝ、閩の俗歳首ゝ重ず、民間正戸を開ず云〻

元日草

福壽草 荆楚歳時記 正月朔日盡鷄を戸上ふ帖ゝ、葦索と其上ふ懸ケ符を竟ふ挿めハ百鬼を畏る云〻

画鷄帖戸

食積

追加のくれ部ふ注を、

串柳

【和漢三才圖会】竹の串ふ賣さて乾ゝ〻ゝ、【酉陽雑俎】柳ふ七絶あゝ一ふ毒、

の嘉賓に今新年嘉祝の物〻〻蓬萊莖に用ゐハ此黄ノ、蓴菜

ず人蔓菁し、春二三月の至て、茎肥大高く立く茎とあり、具足鏡開

あり、慈姑具足するの謂こ、其供ずる処の具足の餅特の刀を

以く截こと忌む、故の手とうつて、槌をうて是と破り

切くきと賞して鏡開こ、戚開

新年截の字を忌む故あり、

雑談抄 和俗年の始の戚を開て積

蓄の金銀米銭の多くを、一切の貨財を取出して用の充

く、賣買の事を調ふ、右其年始の吉日を撰びて庫蔵と

部、若夷の条あるを見るべし、

花燈夕 日の条に出

兼三春物

本朝食鑑 慈姑 於毛乎加波 白久和井ト云 浅水中の生ず、或ハ又ものと種、三

月苗と生ず、青茎ありて中空にして稜葉ありて燕尾箭鏃

の如くして、前尖て後の岐を、四五月小白花をひらき、穂と

なす、霜の後葉枯る根顆を結ぶ、春の初掘て果とす、

慈姑 鳥芋

同上 鳥芋 黒久和恵 又久和井 俗の不登井と称するの根と、水田湖沢の

中の生ず、其苗三四月土を出る、一茎の枝葉なく、灯心草の似

く、肥大の〻二三尺にもと刈て帝を造る、其根白蒻状

後顆と結ぶ大栗の子の如く、脚の聚毛あり、累〻と〻

泥の底の生ず、自ら生ずるもの、黒くして小く食して淬多

し、種て生ずるものハ茎ものく大くして食ハ毛多し、

冬春堀收て果にす、半食煮食皆佳し、時珍曰、慈姑ハ

一根歳ごとに十二子を生ず、慈姑の諸子と乳するごとし、

故の黒海苔 又雪海苔トモ○若狭の海中の生ず、臘月

名て、 の取之、色黒く義あり、貞享式 此もの

北越の名産なり、海辺の岩間の降積る雪と波の打浸

す拍子して、凝りて海苔とハあるとぞ、ちりとの雪と黒

き訓ずるハ白と青とのつる訓義あり、今按ずるに、海苔の

名ハ春夏とのつるれバ雪海苔を以く冬のるさバ例の

衆議の及ずして、こゝ〻と

二月

当用の加減とのごし

枸杞 蘇頌本経 春

苗を生じ、葉

石榴の如くして軟く薄く食ふ堪こう、俗呼て胡菜

と、其茎幹高三五尺叢とる千、六七月の小き紅紫の花と

生ト隨ふく紐交と結ぶ形微長し、

草の若葉 兼文曰 東の枝の如し、其根と地脊と云、 俳諧浩法の書ふ、正月の部ふ若草 新草初草と出せり、又二月の部に草の若葉ふ稍長くる心、

草芳 梁武 墓要

春草を弱草 又芳草とも、

熊谷櫻 大和本草 高サ尺ふ過ずして、花櫻ふさきぐちて、八重の好花ぢ、櫻の先登し、花色白くして小紅と帯さし、接ふ源平の合戰ふ熊谷次郎直実 振州一ノ谷の先登して名と形ふて、平家物語ふ記せり、

草餅 菱の餅 三代実録 田野ふ草を、俗ふ母子草と名く、蓬餅 部二月始生ず、莖葉白く脆し、三月三日婦女くさのもちひを採て蒸し搗て糕とす、傳て歳事 ○草麹 門ハはの部、

勸学會 十三日

朗詠注 真林寺月輪院にて行ふ、天台の大衆法華を誦す、紀典の儒ふ詩聯句を成す、康保年中ふ大内記保胤狂言綺語の罪をそろをさんとて、文道先達の学徒をそろめて、三月九月の十五日毎ふ行ひ始りしを侍る、きい勸学院ハ三条の北今の崔の森その

三月

跡

鞍馬の雲珠櫻 神中抄 唐鞍の雲珠ふ似し、ハ鞍馬の縁ふ、

雲ニ入鳥 朗詠 花落隨風鳥入雲、行未ハ雲ちふ入てゝ、ととかすまぢ、ふ春の花ふ、

汲點 ふ部點子 此虫と育ふ始終菜の嫩葉と以て、ふて菜子ニ蚕の条三上ノ、

菜子

九輪草 救荒本草 莖を抽でゝ小花を開く、櫻草の花似り、

暮春 法不及 暑大く、豆の囲ふ八捶各一様車輪の如し、

正月 消ふ至て七層或ハ九層、浮図の九輪似り、

藪入 六の餞 紀事 正月十六日農工商おのゝ遨遊す、是ハ十六日遊びとす、又藪入と称す、いまこゝろハ往ところふき入ハ林藪ふ入のんく遊楽す、一説ニ子ゞし、藪入ニと宿入の誤りし、此日洛内外の男女或ハ両親の家ふ到ル、又姻家ふゆき、或ハ寺社ふ詣で、又山林ふ遊び、各隨意ふす、又奴僕ハ我宿所ふ帰る、

○六の餞とハ大和国の俚語ふく、藪入と云、大和の民間ふて、旧年嫁ーしる女、今日親里ふ帰ること、必餞を春て祝す、是ハ十六餞と云、十六日の餞の略語ふ、彼是名目混雜ーて、六の餞六入の名ふ、

厄神詣 蘇民將来 ○山城国綴喜郡 十九日

又江戸ふハ宿おことり、

郡八幡一の鳥居の内ハ八幡の御旅所なり、年毎の正月十九日、この所ゟ疫神を祭る、諸方の男女参詣す、この故ゟ此所を疫神の社と云ハ非ず、一日の勧請し宿院頓宮のごゟ頭の神数千本を建て疫壇表し、夜ゟ入て、宮守神主各榊を囲ミ立ツ、九宮守の上首を一の行事とし、その次二の行事三の行事と極て、ゟ火燎と以す、夕ハ燎すること勿し、と、ぞ、旧きゟ倣ひ、囲ミ立ツこの榊ハ疫と攘ふの義、神人と背炙衆と云、参詣の人年齢支干と小き木札ニ記し、捧る所の銭ゟ添、疫塚の内ゟ投入れ、昔ハこの木札疫塚共ゟ焼て、こゝを又疫を攘ふ、十五日ゟ参詣あるこ、十九日特ゟ多し、是を疫神祭と云、帰路ゟ矢を買さ、小児の戯び、ものとす、又昔此所ゟ祇園の社を、故ニ今と藤民将来の木符と賣ル、是と小児の衣領ゟ繋ハ疫を除くことを中華則卯の徴意ゟ、又山腹の岩間ゟ出る水を、こゝを香水と称し、参詣の人小せ筒ゟ盛り携て家ゟ帰る、疫病あるこの、少し く飲こゝ ハ愈ゟ、凡厄年ゟ、この疫神の社前ゟ、砂をとりかへり寝ゟ の下ゟ置、年過て此砂を倍〻〻返し納ル、故ゟ俗又厄神と称ス

○李吟曰神代ゟ牛頭天王、藤民ゟ情を得ゟて、波ゟ子孫永く災難を免るべしと誓ふ故、藤民将来ゟ子孫と云札をうけとり

こゝゟ別て、厄神ハ牛頭天王なるべし、

鑓梅 中花ゟ白く淡紅色を帯ぶ、

柳衣 冬平公御

説 而曰 **山笑** 卧遊録 春山淡冶ゟして笑ふ、夏山蒼翠ゟして滴ル、如し、秋山ハ明浄ゟして粧ふ如し、冬山ハ慘淡ゟして眠ル如し、

兼三春物

柳 本草 時珍曰、揚ハ枝硬く長て揚起す、故ゟ揚と云、柳ハ枝弱く垂流す、故ゟ柳と云、蓋し一類二種、春初泉黄と生ド、即ち黄蘂花と開春晩ゟ至て葉長成の後花中ニ黒細子と結ぶ、蕊落て絮出、白絨の如し、風ゟ吹て飛ぶ子、衣物ゟ着ハ能虫と生ず、池沼ゟ今て即ち化して浮萍となる、

柳髪、柳腰、柳眉 美女の風姿ゟ見立て云、

○青柳、川柳、玉柳、糧柳、猶やなぎ、留柳、めばえ柳、風見草、以上おのゝ〻かゝら字の部ニ入て注せり、尋見べし、

八重霞 か部、霞の条ゟ出ス、

二月

○糸やなぎ、注ゟ及ぼす、

山櫻 一重櫻の一種、山野平林ゟ自ら生ず、梅ニ野梅と云如、

山根草 蔵の異名、

八重梅

梅の条に出づ

三月

柳髮

酉陽雜俎 唐制三月三日侍臣に細柳圈を賜ふと記したるを帶ぶべし

蠱毒を免るゝこの故に柳髮と名づくべし、又一説に陶岡羽桃柳と好き、齡を延ぶ依て本邦にも取傳へて世俗上巳に柳桃を必ず雜、雜こと供じ、髮うとさゝしてさゝゝ嘉伐とする、

やすらい花

左部、高麗注花会の条に出づ

藥師寺宸勝會

藥師寺八大和国高市郡にあり天武九年十月創る持統文武の二帝造花翻然絶といふ馬琴ゞ野州の藥師寺と註したるは誤なり

八重櫻

詞花集に、

いゝくのゝの都のさくざくら九重に匂ひぬるかな伊勢大蒲

此哥より八重櫻とゝゝゝゝゝん 徒然草に八重櫻、奈良の都のゝさくらと、些ごろ世に多くあり待るゝ、

棠梨花

左部、梨花の条に注す、

楊梅

本朝食鑑樹高丈餘葉如瑞香水揚而細厚深青經冬不凋二月開花三月四月結実云、

山吹

大和本草 棣棠は園史及び充齋花譜に其形狀詳なり疑もなき山吹なれども猶詳に記さず、

欵冬 餘醾 ゝゝゝゝゝ

の条見合すべし

正月

舞初

紀事四辻家に楽始あり、舞人樂人来集り多く陵王納蘇利あ

松囃

謡初 紀事公武の両家、松拍子あり、傳俗正月三日より十五日に至て唱謡し、或は鼓舞を

公家譜 天正十五年正月二日謡初あり、諸士皆賀祝を献ず、

豊臣秀吉

す、是を祝〻松拍子と称す、松は長久の義を取、

松の内

注連の内○正月十五日迄を、松の内注連の内と云、江戸にては八七日を門戸の飾を除く、近来の風俗に、黒田家にては八吉来のごとく十五日迄飾らるゝ、

松の花

十〻その花○時珍曰、按るに本草石の字説に、松柏は百木の長さ、松は公の如し、故に松は公に仕ふ、五〻三月蕊を抽で花を生ず、長四五寸、其花蕊を米〻、松黄とす、

藻塩草 松の花は十〻その花

兼三

とて、十年に一度咲と、或は百年に一度咲と云、

春物

鱒

孫炎曰、鱒は好で独行す、尊で収するものゝ、故に字尊に従ひ、必に従ふ、状鱒に似て小く、赤脉瞳を貫き身円くして長し、鱒は鱒よりも細く、青質赤章、好で螺蛳を食ふ、網を遁るゝを善とす、

三月

摩耶参、摩耶昆布

摩耶山切利天上寺は摂州兎原郡畑原村の山上にあり、大化元年の草創、伽藍坊宇三百餘あり、後敵廃して今絶て存せず、二月初午の日に剣馬の無難を祈るとて、馬を引て参る、土産の昆布を買て帰る、これを摩耶昆布と、

松毛

鳥

千梅

京師の小鳥屏風の類の小鳥〻〻甚殖やすく、籠中に育ひ易し、

鶯

鶯は例に春旅行するに、東三河より遠州路を出て、武蔵木の松に囀の声の如く喧〻鳴とのあり、擔夫ども、松むしくと呼ふ、袋井掛川日坂などの間、殊に多し、是は鳥にあらず虫なり、○鶯は田京師の鳥屏風に画ふ、啄木鳥は毎年西近江の大浦の出生の雛と仕ふ、かの大浦の児女の唄ふ、松むしは恋の番、つゝ木の根が絶たら、と唄ふ由を聞ふ、此唄の意も啄木鳥のやうに、ことばを、住語、證とす、

菊戴鳥

八菊戴鳥に似る小鳥を苔むしと云、下野の山中に、松むしとて、この春、松の緑と食ふ故に松の赤葉を集る、彼

松むし〜八松むし〜ヨの下略なり、夫木 こゝろまの雪ふる巣ゝうかぶそて あぢきなくも松むしの、宗運 馬刀 陳蔵器曰、蠬海泥中に生ず、長さ二三寸、大サ指の如く、両頭両〜、

三月 眉作

あ部 薊の条に出、

花

雞旦

東方朔占書 歳後八日、一日鳥雞、七日と人日とは雞旦なり、外記政始 公事根源 是吉日とも〜

正月

びくおこなふ、元九日なるべし、上卿以下位次の公卿あるとも、宰相廳に法〜、こ事ありさるは、弁少納言外記史わらはの事とおこなふ、上卿より大弁も廳にうゝ、おこなふ、南の所にて勧盃のことゝもいでゝ、出ざのことゝもゝ、参内して左近陣にて、外記ハ恒例臨時の政とゝ、官ちゝ、正月ゝ先

拾芥抄 結政所、在陽明門内、近衛南、左衛門府西、

削掛挿

或書、初子の日小松と引て、是と百草にけづりかけゝ御方の御殿に八東方にかけゝるゝ、こゝを削り花とも年木ともいつゝ、此遺意なるべし、今八十四日の夕べ貴賤ともに家毎に、柳の枝とゝりて門にけづりかけゝ、

懸想文賣

鶯水云赤帽子にてあるゝ、銭と与へつれバ女の縁の目出さゝ言べしと、いふことゝつゝり祝して洗米をあゝ帰るゝ、今八絶て其事なれバ、意の文のやうに覺えゝる人も有故に口傳とゝふゝ〜、

蕪頌晶經

墨粟 今処〜に人多く蒔て花を以て飾とす、紅白二種あ、微醒き氣あゝ、其実の形鏃の如く、鏑箭の頭に似ゝ、米粒極細ゝゝの如、園人年を隔て地に糞し、九月子と布、冬と洗て春に至り苗と生ず、極めて繁茂すゝ、是若葉く采て蔬菜、

三月 元巳

張華上巳篇 姑洗應時月 元巳 啟良辰、

胃索

の条に出ッ

華鬘

和漢三才会 華鬘艸高サ尺餘、葉石竜芮に似てふ〜し、三月豆端に花をゝらく、淡紅色、房とゝ、其花ごゝ微長く華鬘

を鈎る状ふ似げつばるこう故こう名づく、

五形

漢名碎米薺、俗こ、五形又蓮華草、

[和漢三才図会] 春苗を生ずハ其葉皂莢及び槐の若葉ふ似こう、両々相對し、枝莖地ふ布て蔓の如し、節の上ふ莖を抽んで頂ふ花を開く、三月より五月の末ふ至るゆえで、盛く、其花淡紫色、ことの間ふ白き処あり、状蓮華ふ似こう、故ふ名づく、莢を結ぶ三稜黒色長さ六七莢、中に細子あり、おのづから撒く生じ易し、其多き処錦を地ふ敷如し、人以て野遊の一興とす、

源

平桃

日月桃 ○三名一種、漢名を金銀桃と云ハ重ふ

江戸桃 ○色紅ふ白く、或ハ咲こけ飛入あり、

毛桃

[万葉] はるさめの降くるなかの毛桃本

ふ

正

月

福壽草

元日草 [紀事] 福壽艸を器ふ植て人の家ふ贈るハ其名の宜しきを以て、こう云ふ、新年の観とす、又元日ふ開く故、或ハ元日草、こう云ふ、

船乗初

摂州大坂の船乗始ふハ、船ふ松竹注連を飾て船霊へ鏡餅神酒を供じ水主とそろ、九十段ばかり乗出し、漕戻すこと其外所々ふ有て、

船霊祭

船ふ酒饌を供じ、以て船神を祭る、

吹初

笙笛のたぐひを吹初こう、

舊年

[新編古今] 春きぬとふるとしかゆく雪のうちに

雪のうちに、しと四方ふへだてたつかすみかな　権中納言雅家

畚卸

初寅諸と同日同所ふ用ふる、此日鞍馬近辺往還の西の山岸ふ高く小樓を構へ、その内こう縄をつけ、簀とかこう、参詣の人燧石を求めむとするこの、銭と簀を入るゝを引上げ、其銭の多少ふ應じて燧石を入れて再びこれをおろす、因こ畚卸こう、其簀を操るこの、鞍馬の地の出生の地下人こうして、鬢髮を剃こうこの交つて勤む、世ふ鞍馬坊主と称す、蹴石ハこの山の名産なり、○初寅諸ハ[illegible]こう[illegible]みるべし、

太箸

[雑談抄] 箸のこうハ落馬の相こう云、將軍義勝、幼少ふして治世のことに、元朝規式の箸折こう其年の秋落馬こうして失ふ、御舎弟義政続こう治世の時をうれざるゆえに取計らいこう太くせしこう始こう古実ふハあらず、

福藁敷

[紀事] 家庭ふ藁を敷こうこと福藁こう称す、

[雑談抄] 正月の神を祭こう勧請する間、不浄

と除く心なるべしと一説あり、福沸、福鍋 紀事に若水と賀客と送迎の為ともいへり、汲まんことを惜る福沸と云、是福と沸と二用を用ひる鍋と福鍋とあり、

雑談抄 俗に七日の粥を呼て福沸と云、是福と沸の異名なり、其故は古へ福引と云餅と二人して引合ひこれを

一とせや、其うへ餅の異名と福生果といへる、今朝餅を粥に和して

煮熟せるを、 婦つるべ 部毬打 福引 宝引 の條に出ず

の条に出ず

蕗薹

本朝食鑑 冬十二月宿根花を開く、正二月最盛く、初め地を出る時小蓮の如し、其蒼漸くにして黄あり、外に紫萼あり、とさること一二寸、やがて小蓮の如し、花開きて重ねて薹となす、俗に蕗の薹と号す、相重る貌を以て貞享式中の式用ひられど、此名は例の賞玩の

蕗のくさも蕗の花を同く春に用ひられど、此名は例の賞玩の

むら消の雪にまぶれもし、蕗のらふは冬と定むれども

蕗花は漢に費島が春雪の詩にも、春といへんも宜あるべ

その名はさて俳諧の用あり、俱に蕗の芽は

春すゝ、一物二用の例とす、云々

兼三春物

鮒膾

大和本草 膳夫録に云、膾は鯽が先なるべし、膾

魚の丹一とす、紀事 正月より三月に至る迄、専ら近

江の鯽魚、これを源五郎鯽と云、傳へ云、漁人源五郎始てこ

れを捕る、其大なるものを膾鮒と称す、

截て膾とする堪へり京近江の人専賞之、

二月

二日 灸

紀事 二月二日男女おのゝ点灸す、これを二日やいと云、中

華の書に八月朔日針灸あり、

用ひる、八月二日もまた同じく和俗大人小児おのゝ点灸す、

是とも二日

やいと云、

三月

ぶらゝゝ

鞦韆のこと

志部に出ず

冬桃

花單に、

普賢象櫻

横川詩序 普賢堂は天下に名あり、

世に傳ふ、鎌倉に堂あり普賢こ

れを安置、其地に櫻を、俗に普賢堂と云、或は普賢象と云、

和訓皇と花と音同じ、花の白くあるを天あるこの菩薩

の象たるところの白象の皇

藤

大和本草 花春のおそ四月

の如しと、西説のづれる是なり、

に咲かる、花の長さ三尺ばかり

充ちて、花瓶に花をさすに、酒を加へ見れば久しく萎まず、本

草に敗酒の中にこれを用ひれば正しと、互に相助ること如此

藤波 藻塩草 波と似るゝ、藤波を かゝるわにつくるゝもあり、

藤が枝 若葉ふ十うゝの花とあゝ字、

藤蔓 玉勝 ゐしゝかもかゝるやまさるふぢのづゝこゝ山人の

扨の藤がえ 文明十六

かゝゝろ ○ 下り 扨あどの藤ゝう咲 ざゝふ

藤、 下りゝもとゝる

とゝ類へ、洲石集に藤

藤樁 葉の木の癒と葉尊生

こぶを茉ともゝゝとゝ、

藤綱 藤ぶゝとゝり合ゝて繩と

三ッの内也、

藤丸 裝束の○青藍曰、藤繩藤丸藤瘤の類紋あり、

と春季ゝせんゝとゝいゝゝや、蕙門

ゝくハ雜物ゝゝゝ佳ゝんゝまゝ、

花のあゝゝ形ゝくハゝるゝゝ

は、部、初暦 同上、初子

の条ゝ出ゝ、

小松引 日の条に出、

去年、今年 雜談抄 貞德の説に、去年 今年春ゝ、今年とゝゝゝ

句ゝゝゝし、師説に、連哥ゝハ去年ゝゝ詞ハ春ゝ、今年ハ雜、

二月 暦閑

柳 大和本草 包橘ハ橘ゝも小ゝ、

子 皮薄ゝ瓣のゝぶゝ上ゝゝゝ、

昆布 和漢三才圖会 其大ゝゝゝの

一株ゝゝ林とゝゝす、葉長さ二三丈、ゝゝと長昆布ゝゝ、大一抵幅四五寸、長二三尺、海人鐮と用て刈ゝる、松前の産と最上とす、專ら嘉祝の物とす、和名 ゝ部田作 の条ゝ出ゝ

ゝゝゝぶとのゝる訓に似ゝる故ゝ、

小殿原

こゝきと 板 こゝきのこゝは部 羽子板の条ゝ出ゝ

江梅 俗ゝ、野梅、其花單葉小白

好文木 梅とゝ、○晉の哀帝、書とゝむ時、四時ゝゝゝ隨ゝ

梅花ゝゝゝ、

中の儒者 輪墨全書 羅江東が梅譜に、梅ハ花ゝゝゝ

問者講師をして、御前ゆゝ論義まゐらせ、内論義とゆ
こゝ、又天長十年正月廿四日、延暦寺の僧円澄をめして、論義
ありとこゝろ、是ら
や事の起ることゝ、

木の芽

万木の芽立なり

説文 芽、萌芽也、 兼三才

春物

黄鳥

詩經 綿蠻黄鳥、丈又云、出自幽谷、
迁喬木、○鳥部、鶯の条に出ス、併考ベシ、

駒鳥

和漢三才畜会 正字未詳、其声高清ゆゝく長滑し、
ヒルカニ カニ とゝゞ如く、走馬の鬣とゆゝ如く、其頭
毎ゆ左右ゆ振り、走馬の形勢ゆ似たり、故ゆ駒鳥と名づく、
春夏とゝ囀る、 大和本草 形ハ鶯ゆ似たゝ、大さハ百舌鳥ゆ
ども、身ハ洛黒、頭のんじの 九霞 かゝ部霞の条に出ス、 東風
廻つゝ赤紅褐色あゝ

尓雅 東風謂之谷風、注谷風五穀養育意也、春
晴而風曰東風、 万葉 細注東風、越の俗安由乃可是
とゝ、東風痛久吹良之奈呉乃安麻乃 瘤抑
都利須流流乎布称擽可久流見由 家持
白揚し、瓦葉抑とゝ、その皮を剥バ瘤あるゆ
肌の如ゝ、故ゆ名づゝ、多く楊枝とするの是ゝ、

二月

事始

針供養 八日○武江の俗二月八日を事納とゝ十二
六質汁 月八日を事始とゝ竹竿の先ゆ
目笊をつけて、家ゝの軒ゆ生ゝ、又牛房芋六根赤小豆ゆの六種
を煮ゝ汁とゝ、これを六質汁と名づ、婦人ハ針の折
ゝを集めて洛島の社へ納め、一日糸針の紫し停む是
を針供養とゝ、其由来ゝ詳なゝバ、十二月八日を事納
嘉祝の事なゝ、二月八日を事納とゝ
近世の誤ゝ冬のこの部事納の条を見べし、 水葱摘

本草 水旁ゆ生ず、葉沢泻ゆく小く、花青白色、蒸ゝ
咲ゆ堪ゝ、 大和本草 浮薔 三才図会 草木考 其図ゆ書こ葉
花、沢桔梗く、水沢ゆ生ず、葉厚くゝて慈姑ゆ似た
ゝ、夏秋紫碧花と開く、水葵ととゝ沢桔梗ともゝ

紅梅

范成大梅譜 紅梅花、色杏の
如ゝ、色洛紅、実扁ゝて班し、 寄居虫 和漢三才
図会 文蛤 鳥蛤ゆの殼の間ゆ寓生ず、形小き蟹ゆ似て
白色、碁石とゝ小ゝく身葉軟く、蓋ゝ寄生木と相
類す、 長明方文記 かゝ孔
ハちひさき貝をこの孔

三月

小弓引

著聞集 延長五

年四月彈正親王内裏ニ小弓ヲ射ル、酒宴累テ夕ベ
ニ及テ、清涼殿の東の廂ニ、又小弓の勝負ヲ
考 揚弓雀小弓ト類シテ二物ニ家ニ玩ブ 本朝事畧
游具の器ニ、武家の用ニ、武家の用ニ、
御燈 二月
公事根源 是ハ天子の北斗ニ灯明ト奉ルニ昔ハ北山
灵岩寺あどあ、高き峯ニ火ヲ焚キ供ス上、

小梅の花

和漢三才図会 庭梅 正字未詳 叢生シテ高サ三四尺花ト開ク形梅ニ
似テ小ク白色ニ紅色ト帯ブ萼黄ニシテ甚繁ク艶美ク、
花落テ葉生ズ、狹ク長ク、庭櫻の葉ニ似テ堅ク実ト結ブ櫻桃
ヨリ小ク生ジテ初メハ青ク、熟スレハ赤ク、味ヒ酸ク甘ク、
小梅と庭梅ト護花鈴ハ部、花の鈴の条ニ
と同じ。この、

辛夷

名候挑、木蓮 搭物論 一

筆、正二月開花落テ実ノ、夫木 うちはえてもとおきてし
ちるこぶしの木ん毋なくとを殺くこそ 萬家○十梅曰、抑
の葉ニ似テ紫の苞紅焰あり、又白花のものあり、小幣の如
し、故ニ幣こぶしと云、紫のもの木蓮ニ似テ、香気蓮の如
く蘭ニ

糯米

和漢三才図会 糯米ハ小樹叢生ス、高サ
三四尺葉狹く長く薄ク、縦理ニ、二三月
近し、

白花ヲ開ク、大サ錢ノ如シ、蕊ノ如シ、故ニ俗呼テ
小米花ト名ク、

小粉團花

同上 木の高サ四五尺葉狹く長ク、
棣棠花の葉ニ似テ、其花の形
粉團花ニ似テ小ク白シ、其大サ半ノ過ギズ、蕚
の大サ豆粒ノ如シ、部春菊の条ニ出ス、

高麗菊

俗ニ小粉團花ト云、
一名憂忘櫻ト云、江戸渋谷八幡の社地ニ、
渋谷金王ノ栽ルトコロ、小巣勲の部
子の条ニ出ス、

饗飼、饗棚

饗飼ハ部、歳徳神の条ニ出ス、

名ぐ摘

藻塩草 苛の異名ニ、顕昭曰、
名ぐとハ女蓼ト書テ、ものごと
苛の外ニ別ニ名ぐとて、ものげうえ、名ぐのこと
ハ苛ト同音ニ、或ハ苛ト云ヒ、名ぐのこと、
わ部、若夷の条ニ出ス、

夷祭

い部、居蓋の条ニ出ス、

夷廻

わ部、若夷の条ニ出ス、

籠梅

中花ニ越中梅のごとし、枝ト折テ籠ニ挿ス、掘東源太景季

正月 元方

兼三春物 繪踏 吾山遺稿 肥前長崎玉島大村、平戸、此処に、男女限らず、絵ぶとす、是、邪祭と禁せり

三月 越中梅 大花ゆゑ、白く、淡紅と帯ぶ、豊後梅に似たり、元八重の花、多く二月開

元亨釈書 資治表曰、延久皇帝後三条院二年冬十月、円宗寺成る、帝寺に幸して親ら法事を修す、落慶の寺、仁和寺の南にあり、主殿都下に冠たり、

江次第 円宗寺、最勝会、二月十五日、今寺跡絶えぬ、御室仁和寺の境内に其名あるのみ、

三月 江戸桃 遅櫻と、葉少し、赤し、花大輪にして、枝の条に云、

江戸櫻 江戸四谷柏木村、延正寺、業師豊茎長く下る、この種関東に多き故に名と

右衛門櫻 の前にあり、昔武田右衛門といへる、此櫻と愛せり、当処柏木村にて、右衛門が愛せ、さてこそ、後人源氏物語の柏木の右衛門に假借して名づくと云、

化倫草 和漢三才図会 今多く庭園に植ゑ、其花を愛す、冬に凋まず、葉車前子に似て厚く長し、

地に布て生ず、三四月莖を抽ぐ、花ごとに、肉紅色、或は淡黄、或は抑色、数色あり、其根蝦に似たり、

て

正月 天狗宴 紀事 正月二日 愛宕寺の牛王加持、清水坂の西、今日夜に入て弦詣客殿にあつまり、南北二行に座して、おのゝ宴飲す、其座上にある人、片木を以て立鼎とし、天狗酒盛、宴終て其躰豪奢なる故に、其音とゝろく、天狗酒盛、各堂に登り牛王杖を以て、大門扉或は床壁を敲き、是法螺と吹太鼓をうつ、其間に寺僧牛王と貼す、是ゝ悪鬼を祓ふの謂し、

雑談抄 天狗酒盛は東西に座を設く、左に資の高き人を坐し、勝負を争ふ、

天穿 煎餅と繋 事文類聚 江東の俗、正月七日を号して天穿、紅縷を以て煎餅を繋ぎて屋上に置く、是を補天穿と云ふ、

月令 季春之月、田鼠化為鶉 本草 鶉脚短く、僅に能行くと長す、訓目極て小く、頂尾短く、最取難し、或は竹弓を安て射て取る、

鳩化鳩 夏小正 三月田鼠化して鶉、八月鶉化して田

縣召除目

十一日 年中行事哥合 古縣召除目ハ

諸の外官と宗し任ぜらるゝ外官とハ諸国の司ゝて侍ル所舍とあるとゝもゝぐるゝ外国の人を召ゝ任官とゝぐるゝ也

おゝゝゝゝゝ名づゝゝ京官と京官ハ京もある諸司と任ぜらるゝ是ハ田舍の官と宗とゝ

公事根源 名替、名国替、挟抽、更任、任符、返上ゝ申文ゝゝ數を不知ゝゝこの除目ゝゝ可知事ゝゝ八十年の学ゝゝゝ百文の紙ゝも書のゝゝ

白馬 春ハあゝゝ召、秋ハ司召

異花抄 春ハあゝゝ召、秋ハ司召ゝゝ

ゝゝ誓ゝゝ○ゝゝゝゝゝゝ八北山抄、江次第、ゝゝゝ、ハゝゝ

節會

七日 公事根源 正月七日ゝ青馬と見ハ年中の邪気

とのゝゝゝゝゝ本文のゝゝゝ、仁明の御門承和元年正月豊楽殿ゝゝゝゝゝ青馬ゝゝゝゝゝ、世諺問答 礼記ゝ春と東郊ゝゝゝゝ青馬七疋を用ゝゝゝゝゝゝ、又青きハ春の色ゝゝて白きゝゝゝ八青ゝゝゝゝゝゝ

後ニ支考ガ偽作ニシテ八ノ書ト季ニ見ヘタル説ト
ヲ合シ、曠野集雪二十句ノ中ニ、「ちらくや淡雪うる酒盛
飯」荷兮、又冬ノ部ニ式ノ雪ノ「ふるとも消ぬ草鞋」
又炭俵集ニ「ちらちらと軍の大事かな」「淡氣の雪ニ雅
誘ふせる」明ちらし竈挑灯とうきけしてくらつて付おろ、
是ハ前後二句ともニ難句ナレバ、法雪ハ冬季ニシテ一句ニ
捨ラルベキモノナレバ、又支考ノ著ル真享式ニ淡雪、
この名ハ大昔ハ春ニシテ、中昔ハ冬ニシテ、今按ニ淡雪ハ冬
ニ用ヒタル所以ハ、雪ノ斑ナル形容ハ初雪ニ比シ、薄雪と
ヒタルン、春ノ雪ノ平白ナルモノ日影ニウツリテ淡雪ニ成モ、
寒気ノ去ルニ成ルニ成レバ、淡雪ハ次ニ春ニ成ル、
此ニハ例ノ加減ニシテ、例ノ當用ニシテ、又同人ノ著、
九五ヶ条ニ云、淡雪ハ春季ニシテ、口傳新古ノ法式ニ、
かのごとくあれば、春季ニ定メタルハ支考ガ説ニシテ、翁存在
ニハ冬季ニ用ヒられしこと、上ニ挙ル所ノ集、炭俵集ノ句
そもそもこれ、○おそ雪と、中古ニハ皆、淡雪とかく、淡ハ、
の假名にして、沫ハあわ、古事記万葉ニ阿和由伎とあるハ、淡
雪とかくべし、沫雪ニ云ク、假字もあわゆきと書ク、

葭灰飛 歳時記 立春ノ日、取竹為管、取葭為灰、以
葭莩灰実律之端、暦者候気至則灰
飛而管通、以応六律、

青柳ふ 部、万春 は部、鳥 狩の
楽の条ニ出ル、

朝鶯 和漢三才畜金 正字未詳、俗ニ阿尤利加比、
其形色蛤蜊ニ似ク小シ、其大サ一寸
小キモノ四五分、灰白色アリ、紫斑黒斑花紋ノ華美ナルモノ
アリ、摂泉播ノ三州ニ希ニ、東海ニハ極ク多シ、其腸中
ニ珠ヲ、真珠ト云ヘリ、

兼三春物

青柳 時珍曰春ノ初ノ柔荑ヲ出シ、即チ黄蕊花ヲ
ツク、其ノ葉ノ翠色ナルヲ、

暖 又ぬくし、ぬくい、

青芽 本朝食鑑 芽ノ
似ク柔毛アリ、兼深青ナルヲ、

芦角 芦の芽ノ
ヲ云、ヲ常ニ用ヒルヲ、

芦錐 和漢三才図会 乾苔ハ海と澤と両品
つ部、角ぐむ
芦の条ニ出ル

青海苔 あり、気味ヨシ、淡ニシテ鹹ニシテ、迎ニ
異ニ多ク南海ニ出ル、伊勢の産と勝
ル、正月ヒヒヒ内勝の浦ニクレと取ル、

甘海苔 崔禹食経ニ、紫

葉ならず紫の帛の如く凝て石上に生ず、この三四種共に紫色を以て勝れりとす、俗に呼ぶ神仙菜とも云ふ

浅草海苔　武江品川の海辺にて採

青饅

和漢三才図会　苔の葉青きもの醋に合せ、魚膾に和して食ふ、俗に阿乎乃太と云ふ、

二月

藍蓼

藍頌図経　藍八人家の蔬圃に畦を作て種て二三月に至て苗と生ず

麻蒔

蔵器本草　麻、早春に種るを春麻子と云、毒あり、晩春に種ると秋麻子と云、茎に入て佳也、

胡葱　時珍曰、八月葷を下す、葉葱に似て根は蒜に似たり、其味は薤の如くして臭甚し、時珍曰、蚕は翼を以て鳴す、其声蚕々たり、故に名づく、

蚕

淡青にして白色とあぶる異なる色し

あぶる乳草　櫻の異名と　蔵玉　あぶる草

うるる人のうるおすかるとなすなり

踏青　葦下歳時記　唐人上巳曲江傾都倾飲踏青○三月三日山野に出て遊ぶ、

三月

浅葱櫻　大論　八重と色

粟津祭　江州粟津祭八島ヶ川の御灵の祭礼、古は三月三日の祭りしが今民衆

撒すること祭祀すること能ず、

浅草祭　十八日○人皇三十四代推古天皇の御宇、進中臣とかなるの過ちあて、武蔵国浅艸の左迁せらるゝ、その臣檜熊、濱成武成と云三人の兄弟主人の跡をもとめきて、中日の仕へ漁して世をすぐす、時に推古帝三十六年三月十八日、件の三人、官戸川の沖に網を下すに、あやまりて用捨に観世音の尊像を得、即ち草と結びて堂を建て、その尊像を安置す、その三人の兄弟を祀りて三社大権現と崇む、今日則三社権現の祭礼、先ッ祭の前日、三社の神輿三基を本堂に移し、堂前にて俳優あり、てとじん舞と云て、の日氏子の町々遍物を勧て練り、翌十八日祭礼当日八町の引山、ものあと壮ひ先浅草見付の外に来て集り、次第を定めて御蔵前より瓢箪町並木町を過ぎ、観音の境内に入る、神輿の前にて切のく芸を施し、随身門を出る件の遍物、囃子に渡り畢て、神輿三基本堂に出て、氏子の町々と渡御、浅草御門の外に至て、神輿を船に移し、浅草川を漕上り、一の権現へ上ケ奉る、今日の船八品川の西大森村の漁人祭礼毎に出すに、是往古官戸川に在し漁人の後に大森に移ると以て、今日のすり古へと恋ざる遺

意く神輿ハ[illegible]り陸地を本堂へ還御し、今日茂草雷神門の辺ゆく蓑と賣る、あんぐのこと[illegible]こまきと浅草の蓑市云、

杏花

○和名加良毛と　大和本草　其花うるハ、唐音と呼、アンズと云、一種花紅ゆく八重うるもの、俗ゆ六代と名く、其木ひくき時花と見るもの、長ゆ八切ゆ、あせ[illegible]、平重盛の孫六代年長ゆくき[illegible]故ゆ名ゆ、

馬醉木

和漢三才図会　山谷ニ生ず、高きもの二三丈、小きハ一二尺、[illegible]枝葉茂盛す、其葉挾く長く[illegible]鋸の如き齒ハ、浅緑色、硬く[illegible]て枝梗ゆ生ず、花芽と出ず、春小白花を開き、房と作す、子と結ぶ、亦房をなす、一子の中細子多く、四時凋ゆ不ず、相傳ふ馬此葉をくらへば醉ふ故ゆ名づく云、

蕺

眉作の花　蘓頌曰、二月苗を生ず、二三寸の時、根と併て菜と為て食ふ、甚美し、四月高さ尺餘、刺多く、心中に花頭を生ず、紅藍花の如く、青紫色し、北人呼て千針草と云、

多識篇　大蕺、癸尓安左殄、○此花、婦人の眉拂の形の如く、故ゆ眉作の花と云、大蕺ハ鬼の眉拂と云、

通草花

大和本草　木通ハ蔓艸し蔓即ち木通、葉豈と通草と云、鞍馬の木芽漬ハ通草し、葉ハ五葉ゆ[illegible]ろ、三月紫花を開く、あづけ[illegible]花の容三ツゆ[illegible]る、秋円き子をむすぶ、

東菊

其葉初生ハ蒲公英の葉ゆ似く鋸齒あり、稍長くして車前子の葉の如く、豈を抽んずること六七寸ゆ[illegible]ゆ葉ゆ豈の頂ゆ花と[illegible]く、一豈一花、形菊の花ゆ似く、色淡碧色、黄心あり、単葉ゆ[illegible]、細瓣重り咲けり、単葉の状ゆ三四月関東の曠野の路傍ゆ往々ゆ生ずるなり、

鮎子

若鮎　小鮎　汲鱉　霍禹錫食經　鮎ハ鱒ゆ似く小く、白皮ゆく鱗ゆ[illegible]し、春生き夏長ず、秋衰へ冬死す、故ゆ年魚と云、

和漢三才図会　三三月の初、江海の交ゆ在く、大サ一二寸、いまだ鱗骨と生ず、潔白く黒眼と[illegible]ゆ、呼ぶ小鮎、吾鱉と云、

本朝食鑑　鮎ハ長ゆ[illegible]る時、小網を以て[illegible]ゆ、或ハ二夫長繩ともろ、繩の上に重、[illegible]ゆ小石堰とつくり、相戞く小石川と下る時ハ、鮎石声ゆおどろきて落ツ、一夫下流ゆ立く、扇網と持く二夫の至ると待つ、二夫近づゆ[illegible]相依く結び合すること如く、圍様すること[illegible]ハ、鮎扇網ニ入る、半網と挙、小拘と持て鮎と汲長と汲鱉と云、

紀事　大井川ゆ[illegible]ハ、木柄と以て鮎を

取る、こゝ也、汲點とい、

正月

歳旦開

止月吉辰とゝ、ひく、連哥俳諧

ものゝ席とゝ、ゝ、ゝ、ゝ、歳旦と、歳旦の句と云し、

歳首賀詞の発句と云歳旦の句と云し、

幸木、幸篭

菓盒子○幸木とハ接ゝ杖のゝ、北国ゝ幸木とゝ、女の腰とゝ、又門松の根ゝ立ゝ木とゝ、○菓盒子ハ盒子のゝ、門松ゝ、供物をこの内へ備へゝ、幸篭もこのゝ、

荆楚歳時記 立春の日、絲と剪り燕

絲燕 春燕と戴く

門ゝ

帖ス 羹木牛房 門部閑牛房の条也、

三毬打 左義長、どんど、

爆竹、吉書揚、

徒然草 左義長ハ正月ゝ打るゝ、菱の龍をゝ、焼ゝ、法成就の池ゝ、

和漢三才図会 正月十五日清涼殿の庭ゝ、吉書と天ゝ上らゝ、十八日ゝ亦殿の庭ゝ於ゝ、唱文師大黒松大夫、其使四人、二人

青竹と焼ゝ以ゝ 竹と飾ゝ、摺扇を結付、清涼

三人 鬼面を被り赤熊の髪と蒙ゝ、二媼ハ太鼓と鼓ハ二の鼓ハ逐

解ゝ、童子二人素面赤熊の髪と蒙ゝ、櫻鼓とゝ

ゝ、又ゝ肩衣袴とゝ、五人雙ハ立ゝ、

どんどゝ、摺袴ゝ者一人、声と和せゝ、其

来由とゝ、

歳時記 元日庭前ゝ竹と爆る山臊を避ゝ

事類聚 爆竹ハ、神異經云、西方深山の中に人を長尺余り人を犯

ゝ寒熱を病ゝ、名付て山臊ゝ、竹とゝ火中ゝ著、爆

ゝ吉ゝ、山臊驚き惮る、

紀事 洛中家ゝ今暁爆竹ゝ其焦

ゝ竹と廁の内ゝ、其家疫ゝ、或ハ

九義長の大ゝ餅とゝ、喰ふ是と羹の龍をゝ、

この丈を以ゝ今朝の粥と煮る○或云漢明帝正月十五日、佛經道

書の勝劣を試むの遺風也、是左義長也、其儀式浮図の

事ゝ拘ゝ恐らゝ附会の説ゝ、九民間十五日の朝ゝ家の飾

菓松竹と取扱め、一処ゝ集めて燒之止卑止ゝ、児童の試筆

の書と天ゝ上ゝ、○武江年ハ宮禁ゝ爆竹を禁ず、

御全 花

びらの条ゝ、正月の餅ゝ菱の花びらゝ、青藍ゝ、餅と菱の

花の形ゝ造

紀事 九京師猿と舞すゝの六人ゝ、俗

俗担公と猿ゝ、猿幸、赤縄

猿曳

と高貴の家ゟ献ず或ハ猿を挙して厩の故と事こゝに是馬櫪神とゝ厩の神を祭ゝ、さえずる

酉 廣韻 寒凝也○い部の凝こゝる、

ゝの部の餘寒、こゝ〳〵併こゝ〳〵

嵯江入楚 春ハ佐保山の神ゝ事ゝ〳〵、さゝ山の霞の色こゝ也

ゝく春と添る神ゝらん、秋ハ立田山の神ゝ事ゝ〳〵、紅葉と錦ゝ

る故ゝ秋と添る神ゝきく、○貞徳日佐保姫立田姫ゝハ唐ニハ

造化神と名づけゝく、春秋の花ゝ造り出ス神ゝ也ると日本ニ

ゝハ春の造化の神ゝハ佐保ひめ、秋ゝハ立田姫と名づけゝ、

神祇ゝハ佐保姫ゝ名づけゝて其ゝ〳〵ゝ

姫ゝ〳〵ゝ、姿のあでやかゝ句ゝ作て、衣ゝハ哥ゝ〳〵、実

体ゝ〳〵ゝ衣類ゝ

佐保姫の衣 新式 佐保姫の衣衣類

ゝ〳〵ゝ嫌ゝ〳〵ゝ

櫻海苔 大和本草 壹岐の島海岸ゝ産ス其色

紅白櫻の花ゝ似ゝ斤々相偶酢豉ゝ浸て

ゝ〳〵ゝ

是ゝ食ス

鼈 春月盛ゝ出ル故ゝ、俗ニ鼈の字ゝ用ル

山椒の皮 本朝食鑑 椒樹の皮外面ハ粗ゝ〳〵

皺あゝ、色灰黑、裏面ハ光ゝ滑ゝ〳〵ゝ青白、粗皺ゝ削

ゝ去ゝ用ゆ、其味い辛し、

二月 西行忌

十五日 西行法師ハ左金吾藤原の康清次男、俗名

ハ儀清、鳥羽院の上北面、徳大寺家の被管ゝ弓馬ゝ道

の達人ゝ、保延三年薙髪〳〵〳〵大実坊円位と号ス 隠逸傳

西行ハ和哥ハ禅定の修行ゝ、吾和哥ゝ〳〵ゝ佛法ゝ〳〵ゝ

と、常ゝ仏涅槃の日、花の下ゝ於ゝ〳〵ゝ死んゝを願ゝ哥ゝ

願ゝ〳〵ゝハ花のゝ〳〵ゝ春死んゝ

嵯峨の 哥ゝ月のゝ〳〵ゝ、畢ゝ〳〵ゝ建久九年二月十五日卒ス、

柱炬 十五日 紀事 二月十五日清涼寺釈迦堂の前ゝ大炬両基

と建、暮ゝ及ゝ火ゝ点ス、地丁ゝ名、炬をめぐり、

弥陀の号ゝ唱〳〵〳〵節ゝ繋ゝ踊ル、是西域ゝ〳〵釈迦ゝ葬ル

の遺意ゝ世ゝ〳〵ゝ

座論梅 中花浅紅千葉、其実枝毎ゝ四五顆

ゝ、柱炬ゝ云、長ゝ〳〵ゝ隨ゝ〳〵ゝ堀落ス、坐ゝ論

ゝ〳〵ゝ

櫻梅 中花浅紅八重、

さらさつまゝ 千梅らくぜと 虎杖さらさつまゝ一種二

名ゝ、其蒲ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ既ゝ長ゝ〳〵ゝ

云、○い部、虎杖の条ゝ

見合ゝて、意得ゝ〳〵、

三月

嵯峨大念佛 紀事 九日ゝ十五日迄

あり、是と亦融通念佛の余流なり、年の時士人堂上に於て俳優をなす、是諸人の夢とさとこんとなり、無二集に、後宇多院の弘安二年に始て行はる、

早桃 花草

櫻 大和本草 文選況休文が詩、山櫻発欲燃とハ果木の名なり、花朱色火の燃んとするごとし、王荆公詩、山櫻抱石映松枝、司馬温公詩、紅櫻零落杏花開、これ中華の櫻なり、ハ朱花なり、日本の櫻ハ中華にまされり、延宝年中長崎に来りし何清甫いへり、朝鮮にハ有と、なり、○初櫻、彼岸櫻、一重櫻、糸櫻、姥櫻、児櫻、熊谷櫻の類なり、二月の季なり、頭字の部ふつうに人々と見て心得べし、○八重櫻、普賢象、楊貴妃、奈良櫻、轡馬雲珠櫻、虎尾櫻、塩竈、伊勢櫻、江戸櫻、庭櫻、撞櫻、浅黄櫻、犬櫻の類なり、三月の季なり、頭字の部ふつうに人々と注す、○異名、夢見草、あぶり草、吉野草、曙草、臧玄名義 頭字名義 の類、頭字の部おなじ、見るべし、

左近の櫻 南殿の櫻 禁秘抄 南殿の櫻ハ紫宸殿の巽角 俗云左近の櫻 なり、○南殿の櫻ハ未ハ梅なりしを、後枯失して、天徳のころ改て櫻を植られしとし、歴代編年集成 あり、

櫻人 連哥新式 櫻人、

櫻のあるふ居人をと櫻人とのたまふ、○櫻人、催馬楽の呂歌に、

櫻田 連哥新式抄 源山櫻のことをもとめ田のつらなる一本なり、ハ生ぜんとのことなり、○櫻田、新式秘傳 櫻田ハ、何ぞと宗砌にふる事なり、さくら田ハ、名物なり、

櫻戸 哥林良材 櫻の木なり、つくる戸、松の戸、杉の戸の如し、○一説、戸の近辺に櫻の咲くことを、只櫻のわるの宿なり、

櫻狩 奥儀抄 櫻を尋ねもとめ、何とも狩なり、○草狩のごとし、

櫻草 和漢三才図会 山谷の中に生ず、即九論草の一類異種、葉の形り相似て微小、邊ふ鋸齒あり、甚光沢あり、春の心白し、三四月茎を抽んで花を生ず、單の淡紫或白花、櫻の花のごとく最艶美なり、故に名づく、

櫻貝 今櫻貝と称す、その、恰も櫻の散るごとく、地に落ちくだけし、

櫻奠 千梅 櫻川の謡に、作まうと孝ふ、常陸国櫻川夏が浦の辺りにハかく名のる奠のあらんとおもふて、予先年筑波登山して、彼辺一見せ一時好

事のことのゆ尋ぬるゆ、巻てえ、いくらとこの国えむ〜とう櫻美
とりひつと〜ゆ〜美おて、春暖をえて、吹河へ多くのぐ〜と、網ことと
てすくひこる、則この浦の名蘆吾さえ美是云云青藍云蓮

歩色葉 国栖の注、又鼓司、吉野の人の名おゝう、吉野の櫻落
て水ふゆ〜美とゆるゆもゆ、櫻美とゆふと
云云ゆえとれば活法の書これらゆ因て出たり、

櫻鯛 本朝食鑑 奇書

春、春三月さ〜の花ひ〜きて、漁人多くてとる、故ゆ櫻鯛
云云、○ゆく春のさくひの浦のさくらびあゆゆくみゆりゆやうらん、

雨泉 櫻うくひ 千梅うくぐ〜 正字未詳、鰓の字と用ひ来
る俗字くぐ〜、この美処〜〜ゆ、光江湖ゆ多
し、五六すゝり大きくゆこの七八す背黒〜、腹鰭赤〜、信濃諏訪の
湖水ゆ〜赤美とゆい皆根ゆく赤腹とゆ、其外処〜ゆありて、春
花さゆゆるゆ取ものと

櫻衣 道遊院御抄 面白、裏青ゆ、
櫻うくひとゆ多ゆ、 関白大臣等春着之 桃花御
説 面白堅裏蒲萄染、
又面白、裏赤花云〜

三月大根 江陰懸志 薑蕗一種、
長〜、名づけて楊花蘆蕗云〜 暮春の時有之形細く
至〜も赤葉と採て食べゆ、 和漢三才図会 春
の三月大根と名く、 三月盡 三月

の晦日ゆ云、春の果
春の限ゆ〜ゆ、

ゆき

正月 祇園の削掛 元朝 貢献

神社啓蒙 祇園社八山城国愛宕郡八坂郷ゆ、祭る所の神三座、
午頭天王、八王子、少将井、 紀事 晦日子刻、祇園の社神前の灯燭の
外ことぐく火を滅〜〜、暗中参詣の人口を慈ゆ〜〜他人の瑕疵
を斥ゆ〜、假令その声ゆ〜、其人を知ることゆ〜ゆ、聖こゆ恨ゆず、
こゆ〜悔の儀ゆ〜〜勧善懲悪の微意ゆ、刻ゆ〜ゆ執行櫻
興ゆ乗り社司前駆〜〜、執行拝殿ゆ登て、神前ゆ向ゆ〜〜黙坐
すゆことゆ〜ゆ〜ゆて、経呪を誦ス、東西の廊の内ゆ、瓢箪の削
掛の木を左右ゆ建ゆくこと各六也、是十二月の数を表ス、是こ邪鬼
と称す、正ゆ同時ゆこゆを燈し、傳へ云、其烟西ゆむ〜時ハ世夜の国
来年五穀熟ゆす、東へゆむ〜時ハ近江の国又ゆ〜〜ゆ、両
国の豊凶を占ふ、故ゆ西方ゆ居る人ハ高声ゆ近江と〜〜ゆ、東方ゆ
人ハ丹波と〜云、其烟気と避んと欲す〜〜、其後社司、新ゆ井水
を汲ゆ、別掛の火を以ゆ、元朝の供物を調ゆ、是新井水を改ゆの
義也、参詣の諸人も、又其火を携ゆ、家ゆ帰ゆ、元朝の餅と煮る、

君が春 鳥丸資慶卿の書ゆくゆものゆ、君ゆ〜〜ゆハ大君ニ
紗〜〜 故葉地のうちゆて 讃ゆ〜〜、君の

誰ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

の忌日に、故に御忌と云、○京俗、御忌詣と遊覧の始めとす、
[illegible]
[illegible]めと云、十月東福寺の開山忌と終して無常講と

三春物

雑子

華蟲又野雞、漢の呂后の諱を避て雉と野雞と云ふ、

月令 仲冬

雉始雊、孟冬入大水為蜃、**和漢三才図会** 雉、雉八頂る雄と雌と角毛あり、頭頸赤褐、幸黒色かゝ光あり、頬眼紅ゐ、背青くして尖り背翎彩斑色し、脚小長き緑の毛あり、尾長くして支条あり、翅短くして蒼黒斑し、脛掌、雞に似て動し、雌八黄赤黒斑すくして文暗く尾短し、**閑恒抄** このこの、雞を愛する切し、

金衣鳥

鶯の異名、**閑元遺事** 明皇禁苑中に於て黄鳥と呼て金衣公子と号、故に金衣鳥の名あり、**經** 鶯を云、その鳴き法華經と云ふが如し、故に此名を、

木地爐縁

千梅 茶人炉ぶたと用ふる、炉ぶたを仕替る、茶人曰、春に八塗ぶたを用ひ、春に至て木地のふたに仕替る、茶人曰、春に陽気つゝして、炉の内より灰を吹上げ、炉ぶたに付て見ゆ、依て木地のふたと用ふ、是茶道の古実、他説あれども此説に、

二月

行基忌

二日○播州河辺郡昆陽村、崑崙山昆陽寺、八四十五代聖武帝天平五年草創、開山行基菩薩、某師の像を作りて安置す、天正年回禄す、今僅に小宇を構へ本尊及び開山の像を置く、八町東に池を昆陽の池と云、池中の鮒こゝに一眼し、池の魚を奈て行波明神と号す、二月二日里民参詣す、是を行基忌と云、○行基八姓八高志氏、泉州大鳥郡の人、百済国王の孫、天智七年に生れ、十五歳にて薙染す、

祇園御八講

八日○今絶て此儀なし、元御八講八勅会なり、行基の法花経宸筆の写を、今吾家に於て修行する法、法花経二十八品に結経無量義経を加へて、三十日の式を、八講壇とし両座相対して飾之講師問者と定め、右座八仏名を唱へ、付ふ唱へ、左座、法花八巻の大意を論じ、別に論題を設け、論義を、其外如陀、唄散花等の法式厳重にして、天台一宗ゆゑに修行多論、或八禁庭の御八講八、奥福寺、東大寺、延暦寺、園城寺、四箇大寺の碩徳を召されて、行基菩薩の御事、法花経を[illegible]ことハ薪こゝし茅摘水汲つゝ、此事を付ふ唱ることハ[illegible]、提婆品を採薪及菓蔬題時恭敬與の例にて薪の行道とて、天子自ら御行道まゐり、薪菜篭水捕手六位

歳人三人役之捧物行香まの儀式、悉、記しがたし、祇園御八講
定さい台宗別院の時、勅会として行こまつりおも、今も社内ハ慈慧
大師の像と安置
して遺跡分明へ

吉祥院八講

北五日 菅家長者記 吉祥院ハ菅家氏寺、天神
の祖父清公建立、東寺の西南ハ在り、加賀国富墓の庄ハ古へより
主なし荒廃の地へ、宣旨とり請ト、神領ハ施入せしめ、永く
法花八講の料所とす、公事根源 二月廿五日ハ天満大自在天
神のこと、しるひ御日へ、夢のつげあるへ、天仁二年より吉祥
院ハ八講あり、菅家の

北野御忌日

北五日○米種の御供 神社啟蒙
ともから奉りて是を行ふ
北野社ハ山城国葛野郡ハ在へ、紀事 今夜西京御供田を頂
の家、大小の御供を北野の社ハ献ず、宮司老少相迎へ、ならび立て、
幣殿より神前の階下ハ至り、手毎ハ捧ハ、官司の一老と
巫女の支子とあるちハ是と取り、神前ハ供ず是と手供とらひ、
又轉供とす、或ハ菜種の御供と称す、供物の上ハ菜花と挿む、
故ハもらハ、或ハ歳ハ菜花いまだ開ざる、梅花と挿む、

禾子御讀經

江次第頭書 春秋二季、百僧と南殿ハ請ト、
大般若經を読しむ、其内御前僧北口と定へ、
御殿ハ於へ仁王經を読しむ、納言参議各一人南殿ハ着て
事と行ふ自餘ハ御殿ハ候す、自観御時毎季ハ行ふ、
元慶の天皇践祚之後、二季ハ修之 公事根源 二月八月大般
若經と百へ講ぜらるへ、四ケ日のてへ行幸とて僧ニ
奉とのふとて、天平元年四月八日ハ
ちゝめらる、行幸ハヒキチヤと云、

菊若葉

本草 初春地ハ
布て細苗を生ず、是ハ宿根より生ずとのへ、又種子ハ
立春ハ下ハ三月驚蟄の節種へ始へ芽と出へ候と經て
葉始て
分るへ、

三月

經供養

二日○指月四天王寺、太子堂
の北隅にあり、本尊如意輪觀
音、三月二日經供養と修ス、太子夢殿の經供養是へ、寺説
云、今日未の下剋、聖灵院の白洲ハ在て 経供養ハ、玉輦
を宝殿の西ハ出御ハ奉ト、衆僧諸役人着座す、僧惣
礼田向、次ハ舞楽ハ、其外

曲水宴

流觴 巴字盞
羽觴を飛す
二月十五日ハ行ハ
荆楚歳時記 三月三日四民水涓ハ並び出へ、流觴曲水の
飲をなす、○公事根源 王卿ハ着ハ、御前ハて
詩と作へ、講ぜられ、御溝水ハ盃ハ流ハ、文人

以下ことごとのむよう、康保の御記ふの色〻まさうゝ、又雄畧天皇元年三月上巳日後苑ふこゆきうしゝめくる水のごとのあるもそうしゝふ[illegible]ふ紀ふあるゝ、

埃嚢抄 曲水の地勢ハ巴の字ふ似うゝ、この金周の世の前より始り、久く絶るゝ魏文帝又奥〻〻高里といるゝず、善悪遠ふよう〻、臣下の才と試うゝ羽觴ハ鸚鵡盃にて用ふ海中の貝ふ鸚鵡の形ふ似う侍る、是を取り脊と穿破りて用ふ、此盃より水ニ泛こゝ、

祇園の一切經會

十五日

拾芥抄 三月十五日祇園一切經会云〻

雜談抄 この会式、當世沈汰ゝ、社家より供物ぬまこハさ〻ふもゝ〻神供所ふ只經行堂の名侍りて、供物を調ずるゝ、これら其遺意ふ、

金鳳花

一名毛茛、鬼の面茅子、○時珍曰、山人瘧を截ふ葉と糸〻按〻寸口ふ貼ス、一夜ふ泡とる火燎の如〻、呼〻〻天炙自炙とす、春苗と生ず高きこの尺余、一枝三葉、葉ニ三尖及び三缺あ、四五月小黄花と[illegible]、五出、甚光艶〻実を結ぶ、形綬んとする春蚕椹の如くみて失りあ、

大和本草 石竜芮ふ似く毛あ、光りあ、花黄ふ〻

河骨の花ふ似う毒草〻、千葉のこゝ美りそ可愛、

金盞花

時珍曰、金盞艸、一名長春花、金盞ハ其花の形とふ、長春ニハ久こふ耐る也、夏実を結ぶ、蕚の内ふあ、蛇尺蠖虫の数枝ふ蟠屈する状ふ似う、○周憲王曰、金盞兒花苦高サ四五寸、葉初ふ高昔葉ふ似〻〻厚〻〻して狹〻、莖を抱こゝ生ず、蕚葉ふ脈〻、莖頭ふ花と開〻、大ハ指のごとの如〻、金黄色、状盞子の如〻、

菊栽替

月令廣義 菊花穀雨の時、根を掘起〻〻壮嫩と剖揀ハ、根あるもの草四時絶ず、

ふ種、充白まるもの亦種ゝ〻、活す、但〻其根上ニ浮起せる白鬚一層と去ることと要ス、乾燥土を以く種、築実て、雨中ふ分種ゝ〻ず、盛泥と根ふつけ也ることと、

霧島つゝじ

紅白紫数種を花茂ふ早く分ることと、

和漢三才図会 譲葉

もこと大隅国、霧島ふ出せる所そ、

楪

本草 楪ふ作、

抱朴子 菌圃の具ことゝ[illegible]ふ、

埃嚢抄 杜の字ハユヅリハ、世俗正月ニ用之、○此木ハ新葉生ずるのち、葉落つ故ふ譲葉と名ふ、又和名親子草とも、

弓始

甲陽軍鑑 弓始ハ正月十日、豹尾黄幡と忌ゝ多久

是みうて豹尾の頭と略こと、黄幡の尾と射べし、陰陽暦 黄幡の方、弓とゝめる吉、

湯殿始

雑談

抽 和俗、歳の始め沐浴すると湯殿始とゝ、

柚耕

和漢三才図会 柚耕は柚の屬こと其枝葉花ミな柚ことゝ

こゝ卜実の我こ柚み似、最大ゝ、

雪解

雪消 ○陽春の気ゆゑ雪の消ゝ、

氷解 旧年の雪の消ゝ、

貞享式 解ると春と、消ると冬こゝて、合ゝれ、泥ゝれゝ

こゝ卜ハ冬の内こゝと雪の消ゝハあゝれど、大ゝ春気ゆ催さゝこゝ、冬の気の去ゝゆゝ天地の理ゝ云ゝ、只打ゝ雪消雪解ゝ云時ハ春と、其取ゝ、ゝて冬と定ゝ、既ゝ古式ゝハ解ゝ消ゝと春みゝ、ゝと同ゝこゝ卜ハ解ゝ消ゝの詞と以ゝこゝ云ゝ、

月令 孟春之日、東風解凍、

風俗通 積氷ゝ凌ゝ、氷壮ゝ凍ゝ、氷流ゝ漸ゝ解ゝ、氷解ゝ凌ゝ、

月令廣義 正月中、雨水中、気、雪散為氷也、一説ゝ、冬の本文、天地間大ゝの理を以ゝ定ゝ、ゝ、ゝて其意を得べゝ、

雪の絶間、雪の雫

御伽 雪のゝ、雪ゝ、春ゝ、雪の名残冬のゝ、雪の名残ゝ、

雪消の水ゝ、

雪譜 雪ゝ、

湯島天神の碁餅

春暖ゝ、山ゝ、雪の消ゝ、

十日○江戸湯島天満宮ハ文明十年六月太田道灌夢想のゝ、ゝて、城外の北畔小菅神の祠堂を建ゝ、数十頃の美田を毛、掃掃数百株を載ゝ、○毎年二月十日、別當喜見院、餅と碁石の如く四角ゝ、神供ゝ、後氏子の家ゝ配ゝ、世俗、湯島の碁餅と称ゝ、或ゝ餅ゝ、

遺教

経會

九日ゝ十五日迄、○瑞應山大報恩寺の釈迦堂ハ、洛の訓讀會、上立ゝ貫朱雀の西ゝ、

近世真言宗ゝ、ゝ、ゝ、

まくに、此寺の普賢像の櫻まうに、信濃普賢堂の櫻と、聞竜堂の櫻とを、凡千本、叡迎堂念仏に、文永年中四輪上人と始まりて、実に恵心僧都の高野足覚上人、叡迎堂念仏の祖と、寿永元年大念仏に、一日中絶して、二百五十年のとし徒然草にも、此法、寿元日から十五日の間、東山智積院の僧徒、とりとむ、訓讀会に、遺教と訓読す、叡教は叡迎涅槃に入の前の仏弟子の為の遺戒の経、故に遺教経、雪の果 凡毎年注繁の時に及て多く雪降る故に世俗雪の終涅槃とも是なり、

三月

油花の下

油の高下祝して花弁の枝を手折て、吉、これを油花下と、

櫻桃花

木大なるものは丈に近し、春花さい形止渇の似て小く白花紅蕾最繁密して枝に満ツ、其葉門光にして、援葉の如く、頗狭少く細き歯及び小毛あり、

夢見草

櫻の異名、

植おき

植おきたる草に夢見草

櫻桃の実

一枝数十顆、大サ脆櫻桃の如く、夏月熟して珊瑚の類に、鮮堂に愛すべし、採し食供ず、

行春

春の過行て暮春に、○行春に和哥の浦に追ひ付こう 芭蕉

め

兼三春物目録

和漢三才図会

竹串に以て鱠殘魚の目と貫き相聯ね曝して乾く鰈を作る、勢州桑名にて専ら製之、

めむり

抑

早春芽のまくに出んとする抑を、大子抑とめむり抑と云人あまた、別種なり、

三月

めかり時

部に蝗のめかり時と云出、

み

正月

供御藥

菓子 屠蘇 白散 度嶮散

○元日から三ケ日平旦に供之、天皇清涼殿の東廂に出御あらく、御歯固の御膳を供ず、次に一献を供ず、御酒と煖の御羹と入屠蘇を前に分て菓子に嘗むて帝に奉る、次に三献を供ず、此度度嶮散入献を供ず、則白散を事終て三献を供ず、此度度嶮散入御酒に入て奉る、其儀式 江次房 ホトトギス、○菓子とは御生氣の歳ある童女の、ものを嫁ざる者を求て、つとりむ、

紀事

古へ屠蘇の屠死戸の戸を忌て一点を加へて戸を作、是本朝之故実、

三朝

部元日の条出

三物の連歌、三物の俳諧、三物賣

紀事 四 附、連哥

俳諧おのゝ席をもらく、九京師おおゝく連哥の長、是と花の下と号ス、又宗匠と云、毎年今朝其一家中其事を玩ぶ、及び子孫其宗匠家に集り、各連哥を発句とし、其次一句を発句とし、其次二句を脇と称す、次三句を第三と作ると栄ゝ、近く此三句を三ツの物と称す、今朝ゝを作るに隨ゝ剖刷氏捽に鏤めて市中に賣る、近世俳諸も亦然ゝ、高点に連哥俳諸の三ツ物と呼ぶ、街衢を往来す、

水祝

旧冬新酒を事とゝ祝する男に水と祝ゝ、朋友相催し酒有を携其家に至ゝ、水を祝ひあゞ

箕面の富

七日○今夜諸人、掛茄箕面山の弁天に競ひ来ゝ、堂上に富とつゝ、先天女の前に大攫三箇と置、第一に二に三と称ス、その攫の上に小孔を穿、今夕寺僧数千枚の木札と積おき、参詣の人寺僧とて已が名と札の上に記ス、め、穴より攫の内に入、或ハ一枚或ハ三枚其喜ある者、各三の攫に納ゝ大に運転して後、寺僧長き鑷を以ゝ穴より突、各名ある札の次第に、其数八百官悉く新と奉書式にて、御新と書てこれを

御新

十五日 公事根源 是八百官悉く新と奉ゝて言内省に

三保祭

十五日 延喜式神名帳 駿河国廬原郡、御穂神社

元、慶長年中より有度郡に属ス、羽車磯田の社ハ、本社を去ること南へ六丁余外濱の海畔に、此社祠古へハ数十町とゝ、海中三四丁ばかりの島にありしと、往年狂濤衝突ゝく漸く汀渚を設ゝて社地と退く、只今坎処と羽衣の旧跡とゝ附会の事こ、風土記に、羽車磯田の社を御穂大明神の離宮ゝ、今に至ゝ毎年祭祀の時、社の神鉾を神幸ゝ、羽車の社に神幸ゝ神供を献ス、

○羽衣のこと、往昔この島へ天女天降ゝ故に、羽車と云こと、神主の家の傳に云、去ること羽衣の旧跡ハ今の社地にあること明らかゝ、例祭正月十五日と、十四日に十六日に至る、参詣の人昔より馬と云ふ事なくゝ、多く輩来る、十四日篝火の神事、十五日神前に於ゝ天下太平の祈禱あり、十六日古来ハ神輿神幸ゝ、湯立おこゝに、大永二年細川弾正忠整範の兵火あゝ、神殿諸宇神器に悉く焼失ス、今ハ神供神酒の

祭祀のもの也、社説さまざま、**水入菜** 洛の近郊畦の間に水を貯へ養すると水入菜と号す、豆葉甚熟く味美し、洛の野弥生に、**未開紅** 梅の一種にて色紅にして八重にして花大にして、そうびさまざまの時も紅し、故に名く、

兼三春物

水ぬるむ 春陽をむかへて、水もあたゝかなるとき、**三葉若** 二月苗と生じ、一本叢生して、茎稍に三葉を附し、今江戸の市中に鬻くものこれ、自然に生ずる処に非ず、三人の作り設る故中冬の頃ようあり、

二月

水間祭 上午日 泉州府志 水間寺縁起に云、竜谷山水間寺は、聖武帝の勅願に依て、行基僧正、天平年中に開闢せる処にて、本尊正観音、行基四十二歳にして自ら作る、二月初の午日を以て会日とす、相傳ふ坎日歩を運ぶこの八十二歳の厄難を消除して、且福寿を得ると、こゝ当日参詣の人出産に草蓐を求て多し、**水取** 部二月堂に行の条に出ず、**水口祭** 左部、苗代の条に出ず、

三月

外傳 三月桃花水之時、鄭国之俗、三月上巳、於溱洧両水之上、執蘭招魂、續齊諧記、祓除不祥、朗詠 源起周年、思魏文、巳の日の祓は周の世に起り、魏の世より三日と用ゆ、○本邦にも早くこれを行ふ、部頃、

巳日祓 韓林

御酒古草 蔵王の人や千代を

六の御祓の条併せ考へ、

藻塩草

御酒古草、三月三日内裏にて御酒に入れて桃を、**三千代草** 桃の異名、西王母の園に三千年に一度花咲こゝる桃の実を、○こちらせゝの桃の花咲春のあいだ、

水尾祭 九日 神社啓蒙 水尾神社は丹波国桑田郡、愛宕山の傍にあり、祭る所の神一座清和天皇、

雑談抄 帝の御国忌の日と用ゆ、三月九日に祭る、○祭式未詳、

士

生念仏 十四日より北四日迄 雍州府志 心浄光院、壬生にあり、故に壬生寺と云、又室幢寺と云、中世三井に属す、故に小三井寺と字す、本尊地蔵なり、傍に鑑真の像をとゝ真言南都の招提寺に属す、開基しるゝ、中興は一条院正暦年中、快賢僧都、後伏見院正安年中、円覚上人、安寺に住し始て融通念仏を修す、今に於て三月十四日より九日

ゐ至て念仏あり、其間土人俳優とす、世ゐ孟生是殺人の職と
कककककक

盤、を加と進む酒と飲の器也、

如願

歳時記 商人あり清湖を過ぐ清湖君に見ゆ、君問ふ須有人教て、但如願を乞へしと、君許之果して一蝶を得て、如願に即其名し高求る所あれば悉能くこれを致す、後正旦に如願晩く起るに及て商人これを見ず、今人正旦細繩を以て偶人を繫ぎ囊掃の中に投て囊壊の中に入るを見て、今人正旦細繩を以て偶人を繫ぎ囊掃の中に投て囊壊の中に入るを見て、今如願と云、五雜組 閭中の俗、囊土を除らず、初五日に至て輦あり野地に至て、布を取て返て宝を得ると云、則古人如願と唤、

春盤

生菜 齊人月令 立春日生菜を食、新を迎の意也、立春日の意也、

春餅生菜を以て相饋送る、春盤と号、

戴胜春燕

部、緑燕の条に出、

上辰

西京雜記 高祖宮中、正月上辰池辺に生く監灌し、蓬餅を食ひ以て妖邪を去る、五雜組 謝肇淛曰、今の人三月上巳を上巳、正月の上辰を上巳、

注連の内

部、松の内の条に出、

齒朶

穂長 本草 其根一本あり叢枝ことごとく貫く故に鳳尾と名づく、根と貫衆と云、和漢三才圖会 葉は蕨及び拘裏白

脊に似て薬柔に薄し、面青く背白し、四時枯ず、以て元旦嘉祝の物に飾る、○一説に齒は長ひ朶は短く、朶は長延に延るの故、齡の延る義と云、

人日

東方朝占書 一日を雞、二日を狗、三日を羊、四日を猪、五日を牛、六日を馬、七日を人、八日を穀子、

真言院御修法

宿直人 ○八日より十四日迄被行之後七日之御修法是也、帝王編年記 兼和元年始て真言院を宮中に置、鎮護国家、五穀豊饒の為、毎年一七日を限り修法せらる、公事根源 こゝに金剛界真言院八八省の北にあり、○宿直人 徒然草 後七日の阿闍梨、武者とあつむることいつとなくぬきべかめり、拾芥抄 直人とて、かくことべきあるべかめり、宿直人とは、一年の相は、妖怪中のあるべきなり、漢語抄 晝勤とて直とは、夜勤とて宿と云、合せて止乃伊

叙位

五日 公事根源 天智天皇十四年正月に諸王諸臣に爵位を授けしと、天徳五年より、五日に始て叙位あり、是は諸臣

の年労と奏〻〻、位と次第を叙すること、

十四日年越

紀事 今夜、俗十四日年越と称〻〻相祝ふ、

上元日

花燈の名 ○正月十五日と上元といい、七月十五日を中元といい、十月十五日を下元と云、○花燈の名とは、唐の世の上元の夜、燈燭を列ね遊観すること、天下の上元、灯燭の盛なること、閭巷のまさるとの〻〻

五雜組

獅子頭の神事

十六日○伊勢国、渡会郡、山田郷の祭るところ七社、或八八社、牛頭の社中島、大社一の木町、藤の社太神宮、今村の社高柳、坂の社坂の、世古、甚の社高倉山の、内甚根、箕曲の社箕曲、是御山内七社、瀬木の社吹上、以上八社、一社〻〻各の獅子頭と合せて八つあり、此内一頭、虚空より降りたるといい、残り七つは、常政長宮と云神職の作と云、祭の日、八ヶ所の町〻氏子、竜の如く長き獅子を出し、松明をともし、舞く、土人傳、云、人皇百五代後柏原院、永正の末飢饉疫癘多しころ、獅子頭を作り山田上の在家〻〻、次第に下の町へ追やりしこゝを、其頭を町〻の疫神を祝祭りて、産泉神と崇む、毎年正月中旬、社〻より取出して、鼓吹〻〻舞あり〻〻、氏子の家〻〻ゑをのとて、鏡餅松明、或八十二灯あまたと出し、十五日終夜廻りて、十六日小田橋の上にて、刀を

持て、悪神を切拂ふ体を為し、即座に獅子頭と舞衣を押つゝ其社へ納め入るゝ、十五日より十七日まで、とゝ〻り、

下萌

月令 是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木萌動、

春鶯囀

春魚、鱠殘魚、正餘魚、銀魚、和漢三才圖 俗云白魚、江海の交に生ず、立春の後に出る、

白魚

初に出る人〻〻を賞す、二三月腹に子あり、味稍劣る、生は青色を帯、水を離るゝ時は白く、煮れば赤し、潔白なり、下畧

兼三春物

志〻玉姫

拾藏抄 霞 隋書 刺蘂が父蜆を嗜む、呼て

蜆

扁螺と云、文字集畧 蜆貝ハ蛤に似て小し、黑色、字又蠙蟲に作る、

櫻柳

本草 一名垂絲柳 按に羅願小雅翼云、天の雨に〻んとす、櫻まづ先と知る、氣を起して懸す、又霜雪を負て凋まず、及び木の聖なるものゝ故、字、聖に从ふ、又雨師と名く、或ハ曰、雨を得るときハ垂〻として絲の如し、幹弱く、枝を撓む、生〻易く、赤皮細葉、絲の如し、

品川海苔

の部、海苔の条に出す、

白藻

本草 竜鬚菜、東南海中の石上に生ず、叢生して枝葉

あり、状ち抑眼の如く、髪漬長さ七の尺余、白色にして、醋を以て浸して喰ふ、

二月

常樂會 十五日

拾芥抄 二月十五日、南都興福寺常樂会、紀事 今日、東金堂に闍浮檀金の釈迦像あり、その龕面ふ、涅槃像を、相傳ふ、金匠が画く所と、今日其龕を開く、涅槃経 常樂我淨四德波羅蜜、○涅槃会、常樂会同じことなり、拾芥四天王寺にて、涅槃会と、

積塔 十六日

紀事 二月十六日、盲人、撿校以下裳分ふ至る迄、各京高倉綾の小路なる清聚庵ふ、ふるまふ、光孝天皇の皇子、雨夜の御子の為ふ、積塔会を修す、宿忌の頭人、大撿校、經営を設く、座上ふ、守瞽神の画像を置く、衆盲こぞりて拜す、其後大瓶の酒をくみ盲人六汎の中ふ四人をえらぶ、平家を説く、守瞽神八、日吉社の中十社を取る、祭之俗、守瞽神と誤る、病神と称ス、坐画幅、常に捻撿校の宅ふ安置ス、其人死する時バ次の撿校ふ与奪ス、盲人琵琶を彈ずる故ふ、妙音弁才天を崇む、盲人平家を談ずること、生仏ふてじまる、中畧相傳ふ、雨夜の皇子盲目なりしる故ふ、衆盲を憐ミ多く、明日、皇子の忌日なれふ、よりて衆盲、心經を誦し、琵琶を彈じて、宿忌を修す、○

千梅曰、雨夜の皇子薨して後、諸の座頭、墓に毎年石を積て、弔ひ祀る、遺風なりしとぞ

聖靈會 二月廿二日

○振旦東生郡四天王寺、聖灵会と、八聖徳太子の鳳輦を、聖灵院に、六時堂ふうつす、その会式、紀事 二月廿二日、太子像并ニ舎利堂の両輿を移し、六時堂ふ安置し、一舎利二舎利の十二坊の僧徒と合七、堂前の舞臺ふ於て大法事あり、寺中貴一鶏と、一舎利とのひ、ふ二と二の舎利とを、是舎利ふ頭ふ、ふりくく、當寺、年の法会の中、この会と以て第一、千八百五十、

時宗踊念仏 彼岸

○五条の西御影堂ふて、ことと修ス、一遍上人才二世、舊阿弥作の脇陀の像と本尊とを、毎年二季の彼岸中、もっぱら念仏を中世以来、尼と僧とて、寺中ふ、扇を製して、これと四方ふ撒く、世、御影堂の翁と称ス、是、寺名、新善光寺と、

社日

尚書 社日、土地、五土神也、按ニ今立春の後、第五の戊日と春社と、立秋の後、第五の戊日と秋社と、主る神と勾芒とり、

月令 二月之節、擇ニ元日一、命ニ民社一、郊ニ玄日一、社稷と祭ると云、春事興るが故ふ、祀之、農祥と祈る、元日と、春分の前後ふ近き戊日、と云、元ハ吉也、

社翁雨

提要録 社公社母日水と食べ、故ふ社日雨あり、これと社翁雨ふ

治聾酒 石林詩話 世ふ云、社日酒と飲バ耳聾を治す

鹿角落 月令 仲夏鹿角解、仲冬麋角解 衛波傳 鹿生まれて三年ゝ、其角れ

のづゝ落る○廉文曰、凡鹿の角ハ春生ゝ夏長ゝ、秋堅く冬脱ス、春ニ至ル角解の義未詳ス

地虫穴を出 蟄の条に出ス

三月

上巳 紀事 今日を、俗ニ節供と称ス、年中五節供の一貴ミ上ハ猶初と云ごとく、三月初の巳日と上巳と、三月辰巳と建と除日と、今ハ以て不祥と除くゝ、五雑組 漢ハ巳と用ひ、三日と以ざるゝ、東晋 魏ハ巳と用ひ、三日と用ひて、巳と用ひざるゝ、

上除 徐幹齊都賦 青陽季月上除之辰、無大無小、拔除の義、

鞦韆の戯 於水陽○野謂上巳の拔除の義、冒深、ゆさぶる、ぶらこ、荆楚歳時記 春の節長き縄を高木に懸け、士女装服し、其上に坐し立て、互に推引ス、名づけて秋千と云、楚の俗ゝ寒食と云、然ども、こゝに字書に考ゝ、秋千とハ縄戯、今其字華に従ふ、実に字に当て華と用ひず、天皇遺事

宮中寒食に競ゝ鞦韆と立ツ、今宮嬪笑ゝ宴樂ス、明皇呼て半仙戯と云、古今藝術 秋千ハ、北方の山戎の戯ゝ、以て輕捷を習ふなり、和名抄 鞦韆、和名由左波利、

白酒 本朝食鑑 酵ハ白酒の甘きゝ、和名之良加須、

和俗三月三日節物ゝ、雛祭に供ス、されども勺作ゝ、三春ゝ、

潮干 紀事 三月三日海潮大に退く、泉州 刀堀の浦、殊に甚し、諸ゝ競ひ来て、蛤蜊を拾ひ、小魚を捕ふ、当日住吉の祭ゝ、紀伊加多、武伊品川、其外所ゝ同ゝ、

修学寺祭 五日 紀事 凡此邊七郷、三月五日祭ゝ、其神一乘寺の八大天王に同ゝ、○一説に、牛頭天皇、或ハ云赤山明神ゝ、是天台護法神ゝ、この神ハ慈覚大師、唐より帰朝と共に来朝の神ゝ、山門法流守護の誓約あり、大師の遺誡ふ、て、徒に此社を建て勧請ス、赤山と号ス、ゝ、ゝ、ゝ

大峯山の後ヨリ入て、蛇の尾ヶ峯より截り、遂ニ熊野ヨリ出、是と逆の峯入ニ成、○春の峯入と、順の峯入と、本山方ニ成と動む、聖護院御門室ニ於く、是と換接せ〻る、三井の長吏増誉僧正、その室ニ於く是と行ふ、当山方ニ成と動む、三宝院御門室ニ於く是と逆の峯入ニ成、

白挑 碧挑ト云、○白挑や雪も落す水の色 挑隣

石楠花 本草 石間陽 花彙 処〻深山中ニ生ず、大和金剛山最多し、樹大なるもの丈ヨリ過ず、枝條柔軟うるハ葉ニ蓬莱紫ヨリ類し〻、厚く長し、面深緑色、背ニ毛茸あり、紋褐色ニ、四月技梢ニ花ヲ開く、数十集り生ず、粉紅色、筒子六出、形鬧羊花ニ似て、丈ハ十余尺、頗る采観ニ堪ず、雅談 拙 京都江戸ニ移し植ル、二月の末三月の始花を開く、五出形鄙鵝花の如く、

櫨の花 方言 於久夜麻能之伎義 我波奈能奈能其等也之久ゝと伎美ニ故悲和多利奈無 和漢三才図会 木櫨ハ巣を搗ニ似て、長く、搗ミバ暑椒気を、六月細き白花を開き結実

春

沉丁花 和漢三才図会 瑞香 倍ニ云 沉丁花、按ニ瑞香疑らくハ此山樊の類ニ、こゝふ云沉丁花ニ花と開く、高ハ四五尺、枝幹密集し、葉ハ歯なき梔子葉及び楊梅の葉の如く、春花と著く、丁香の如くにして、紫色、既ニ開く時ハ四出、外洗紫、内白く、十余朶攢簇まり、其香烈くて沉香丁香相兼るが如く故ニ俗ニ沉丁花と云、五雑組 相傳ふ廬山の一比丘、岩下ニ昼寝し、異香と聞く覚て尋ぬ、此花と得る故ニ睡香と名く、後好事のもの以て祥香と、改て瑞香とす、

春菊 高麗菊 和漢三才図会 俗云、高麗菊、春菊、春菊ハ花と開く菊ニ似て、故ニ名く、同蒿、蓬葉と深く食ふ脆美ニ然ども百菊ハ開くの時ハ之故ニ花と賞し難く蔬とせず、一〻び荊く後、おのづから秋に出て六七月花と開く、

新桑摘 月令 孟夏之月、后妃齋戒親ら桑を摘、東郷翁桑禁婦女勤蠶事

塩竈櫻 此花至て艶色あり、其樹葉ハ桜ニ似て、一名大般若櫻と云、小田町菓子屋の娘秋と云ふの、十三歳の時花見ニ来て、井のもとの橘ちぎり〻酒の酔醒

秋色櫻 東叡山清水堂井のもとの橘ちぎり〻酒の酔醒

おくのへ〜〜う此名を、秋色ハ秋が俳名、其角の門人なり、此句人口に膾炙せり、

正月

氷様

延喜式宮内省式 凡氷様の奏、主水司奏之、此司ハ宮内省に属す、氷様と、氷室の氷の厚薄す法、瓦石と以て其様をなす、奏之、公事根源 氷の多くなるハ聖代の験し、氷のあるハ凶年なり、待まバ、氷の御材とし、大法秘法と行なり、○元日の節会にあるべし、部見合

閼豆、閼牛房、羹木牛房

紀事 水煮の大豆、是を閼豆と、閼牛房煮ずして生の牛房、羹木の如くなるを盛る、仍て羹木牛房と、又閼豆牛房と、両種ともに土器に盛、菊朶楪をしく、

人を帳に貼す

荆楚歳時記 人日縁と剪〻く人をつくり、屠風の上に貼す、頭髻に戴く、又或は相遺る、新年旧を改め、新を取るなり、

弾初

琴三絃鼓弓の類を弾、

乙め始

俳諧歳時記 年の始に其音を試るなり、

常陸帯の

時記式 年山紀聞に云、資兼王日記、明應十年云、諸社之造拝之後三献有之、次香經、次御コワ、次比目始、海人藻茶 中御門朝右大臣子息 惠明院傳正宣中作 小云

公家御膳飯者強飯也、執所家手如此、婚飯全分暑儀也、但人〻依好悪用之、強飯時飯湯也、而近代雖飯之味、如ト伊まろ〻せし召不叶理也、為章曰、和名抄、糒、和名抄、或説云、非米、粥而非粥之義也、とあり、その次に別に粥とせり、和名抄、糒、之留加比、薄糜也、とあり、糒ハ、ひさ子〻の粥かわしハ、暦まひめ〻ひ〻ともあり、糒糠を食ハ、ひ〻ひ〻しく〻〻〻の諸説、ひめ始のまぐひと解に足ず、ひめのうあどいふひめハ、糒糠の義、

毘沙門切德經

元日

雜談抄 古老傳云、往古ハ元朝寅の時に天神人禁裡日花門の外に赤〻と、是沙門経の文句を朗読、唱〻祝の義とぞ、故に此者の黨類と呼て唱文師と称、又元日毎、風を候ふ故、風の者と号ス、風の字音志久世誤〻ちゆ〻くとも、風と宿し、音近き故、民家ごと、元朝未明に門に来り、是沙門経と朗読ス、中古迄侍りし、當世絶て沙汰なし、

常陸帯の

十日 神社啓蒙 鹿島の神社、常陸国鹿島郡に在、一宮記云、武甕槌神、○年中祭礼七十五度あり、中に常陸帯の

神事

祭あり、其日男女の名を布帯に書記、神前に置、社人〻〻と取授〻、相見〻て婚姻と定む、正月十日の祭是なり、

奥儀抄 華と

帯をうく、一ツ人我名と書、一ツ人男の名と書て、折返して、中とバ隱しとし、末を称宜お結バ古くよりこれ有り、結ぶ仕ようとしてハ掛帯のもとおゆるし結びつるなり、○常陸帯とは、神祇

十五日 神社啓蒙 枚岡社ハ、河内国河内郡在、社記云

枚岡の御粥

祭る所の神四座、内一殿天子屋命、内一殿鵜鷀草葺不合尊、才三殿大国主神、第四殿大照大神、又若宮一座天児屋命の子押雲命、正月十五日上田祭、當日神供所おいて小豆粥と煮、粥の上に竹管と掛け、百穀と納署し、蒸氣の強弱にうて、年数吉凶と占う、當社第一の神事なり、神主水連氏の外、相兼豆粥と煮く、其釜の上に、五十四本の竹と五すぢ切、管と一束と一鈎置、十五日早朝、其粥と神供とし、五穀成就の祝詞あり、五十四品の種物と、一管毎に書付く、釜中の粥に浸し、一ツ管と割て、管中の粥の多少をうて、耕作の吉凶とし、恭諸の諸人お告知す、

菱の花

さ部三徳

の条に出ず、

兼三春物

人来鳥 鶯と云ふ、古今俳諧

掬の花見ごとに来るとぞ、

うぐいす

海上叢草の中多く有之、黎明詩に、遇天晴霽則且飛且鳴、直上雲端、其声連綿不已、一云、叫天子、和漢三才画会 大低雀に似て大、頭背黛色黒斑あり、鮮明きらく、眼の傍領白く、胸腹灰色、脛脚細く長くして距あり、

雲雀 三才画会 告天子 褐色、鶉に似て小し、

雲雀 雲雀の異名 秘蔵抄 春の野に巣ぐみ

ひめひばり鳥

と雲雀に譬へ、くも足、

骨 瘦くと云、諺に、瘦くく

鳥とわがる雲の中に高きこそうい

鹿尾菜 本草 東南の海中石崖の間に生ず、大鉄線の如し、和名抄 比須木毛

伊勢物語 おそひあるべむぐらの宿にはも

一かんりきとのうえ袖をうてとあり、

干鱈 和漢三才画会 乾天魚ハ色白くうのと上に、黄と帯るとのと次に、世つ一角カと好むとの、常に嗜こと、多く食ふ時ハ其力倍て、麦識蓋 黄顙魚和名多賀

三月

彼岸 時正 竜樹菩薩天正験記 欲界六天中央夜摩天兜率の中に大城あり、名て中陽院と云、中の高楼閣と、雲処臺と云、此院内、年二八七ケ日の間、色界摩訶羅音羅天尊と上首として、八神 大梵天王、大歳神、乃至王女、道

祖神等の人、中天上の冥官冥衆集会し、一切の善悪を注す、天尊降るに八神に教勅し、三春勘帳を持ち、私、三復八校して天尊に献ず、天尊覧了て、善と證する為に八宝印を指し、悪帳と證する為に縛印と指す、処中善と證するが為に、非宝非縛の印と指す、彼八神は帝釈、閻王、天大将軍、天一行役司命司禄、俱生神、閻魔天尊何の由、あつく、二月と云へば天より降り、正の天地の神と召や、答曰、阿迦尼吒天は、自在尊の所居、宮殿の前に高揚あり、天生樹と名く、形ち須呂の如し、春華と仰らく、七日を経る、七葉七色、青黄赤白黒紫華を、秋菓と結ぶ、七日を経て諸の菓七色上の如し、花の開くことを見ば中陽院に移り、落葉と見て本宮に還る、定て知る、法命道理然らしむる所、彼岸功徳成就経 疾く仏道と成れ、十八誉に云へり、二八月七日晝夜同時にあつて、一切の諸仏三世の諸尊、及び無数万億菩薩、説法し、衆生に於て楽を与ふ、

金剛蔬 生死は此岸なり、涅槃は彼岸なり、煩悩は中流なり、般若の一心三観なり、生死の此岸に煩悩の中流を渡り、涅槃の彼岸に到る、

玄門和尚華記 ○時正は、彼岸の中日なり、中日は、年中の昼夜少しも長短なく、同じき故、時の正きを以て名く、

比良八講

九日〇八講の式、祇園の御八講の条に記す、

紀事 江州比良大明神社、古へ今日比叡山の衆徒、法花八講と修す、今に至て比良の八講と称す、此日湖上多く風烈し、故に船急事なし、

引鶴、引鴨

老菜湖千日、引帰る、雁鴨のうち、冬より春まで多く集り居て、春は引出さず、

○続猿蓑 引鳥の中に文字を田螺取 支考、この引鳥もとも初の意、半時庵其外さもくさく説くれども、三月の部に、引残る雁とあり、合せて考へ来て、

一重櫻

一重櫻は、春分の後花とひらく、彼岸櫻は十日ばかり遅し、又八重櫻は、先づ一重と以て本とす、故に櫻とのみ称するは一重のこと勿し、八重櫻は、春分の後、彼岸に開き、余の花は先づ一名小櫻、

三月

雛遊

雛祭

雛飾 紀事 三月三日良賤の児女、紙偶人を製し、是を立雛と称し、既にことの八礼贄物の義あり、被具に及ぶ、○古へ女児の人形遊び、三月に至りて、源氏物語 贄物の人形より、今三月三日これを祭り遊ぶこと、全く上巳の稜の

彼岸櫻

小白早菓、春分の後、彼岸に開き、余の花は先づ、

姫桃

堀川次郎百首 春雪ふるあけぼの 雛まつる花 道ぞの

緋桃 絳桃 ○緋桃、八重ありて、深紅なるもの、大和本草 拾江府志云、桃花千葉あり、大に紅なるものと絳桃

比良祭 十五日○江州比良村の祭、神輿二基、山王十禅師、飛梅天神の両社、十禅師八、南比良村の鎮守、天神八、北比良村の鎮守、両神の社一処に、村八南北十余町とへだたる、南小松村の鎮守八八幡、北小松村の鎮守八十禅師天神と合して、両村三社の神輿三基、同月同日祭之、比良祭と称へ、人聲忌 此辺、古へ八一円に山門の領分、故に多く山王と崇祭す、十八日○古へ官家御影供と修す、今おいて、和尚と好む人多くこの日寄会と修す、南都拘李寺の塔の、或八、和州初瀬の近処にある寄塚、是人丸の墳墓、洛西嵯峨の妙光寺に人丸堂あり、木像八傳へ、俊頼の作る処と、又播磨明石にも、人丸の御影供と修す、右大倉谷に社あり、○人丸終焉の地八石見国、神祠八高角の山上にあり、世に高津と称す、この祭祀中絶〳〵、御影供の義如〳〵、霊元帝の御宇に及び、勅〳〵絶〳〵と奥〳〵、引殘る廢〳〵と挙く、徒一位を授けられまろ〳〵〳〵、

鶴 二月の部、引雁の処に記す如く、二月に引て去る雁の、三月まで引のこりたるなり、

正月

餅鏡 仕部、歯固の条に出す、

兼三春物百十鳥 八雲御抄 春百十の鳥の囀る、万葉六 我門之復夾毛刺喫百十鳥千鳥者雖來君曽不来座、古今 百十鳥さへつどふ春八とのぞふ、和漢三才畫会 海温、水雲、俗に海雲の二字と用ふ、状あるさまなれども我ぞうゆく、○雪のこゝ〳〵説八〳〵〳〵、

海雲 乱絲の如く色青く黒く、柔に滑り、長数尺、石上に生して水上に浮ぶ、是ととんとすくふ滑りて得〳〵、鮑空貝と用ふるもとる、河易鳴戸、泉州岸和田及び對州の産、肥太く佳〳〵、薑醋み和〳〵くこまとと食ふべし、

二月

雛花煎 卜五日○京師の俗、正月用る処の餅花と貯へ置く、二月混製金に兼て供物とす、又正月の餅とあるいれの如く、蕚りても用ふ、是と鞆花煎と

諸子魚 湖水の小魚、長サ三寸と限る、鱗ふ光あり、美魚、其味脂多し、湖水佳品の内、江西坂本ゆモロコ川と云、此魚尤多し、故ふ名とす、大和本草に、西州ふモロコあり油身魚と云と記す、アブラメハ其鱗鮑の毛ふ似て、鮎魚と比べ、是モロコと八大に異なり、大和本草の説ふ、又モロコハ黄鯛魚あるべしふどつり、是もつづく、

黄鰤魚ハ[illegible]、江州の俗ワタカと云、大きさの七八寸、是も湖水に甚多し、モコハ三寸に[illegible]、大小あり、又柳とうこと云一種あり、活法の書に、柳葉魚と出せるこの是なるべし、形モロコに似て、脊黒く腹に黒筋あり、柳の葉の如し、九月より湖水に多くあつまりて、早春子をうむこと他魚にすぐれて、腸少も形、依て嘉子と、此魚おそくうく他所にもなし、江湖の産魚なり

三月

桃の酒

籙頌齋經 太清本艸本方云、酒に桃花と漬くすまして飲む、百病を除き、顔色を益す、**千金方** 三月三日、桃花一斗一升と井花水三升、麴六升、米六斗、こもごもに好く炊く酒に釀し、ことに飲ば大吉、○御酒古草、御酒ハ入る桃を委くハみ部に注す、

桃花

事類賦 其花、或ハ仙と成て壽と益し、或ハ鬼と制して邪と祛ひ、或ハ后妃の德とゆめ、或ハ瓊瑤の華に報ず、**和漢三才圖会** 或書云、伊弉諾尊桃子三箇と採て火雷を擊つ悪卒皆去、依て桃樹と勅して名づけて、稜威神富命と云、○絳桃、緋桃、碧桃、金銀桃、源平桃、江戸桃、早桃、冬桃、一歳桃、毛桃、姐桃、西王母、油桃、日月桃、三千世草、等の種類并異名ハ各頭字の部にみ付きて一覧、

木蓮花

大和本草 国俗、紫色と木蓮花と云、花の色悪しく白きを白木蓮と云、白色と

酉陽雜俎續篇 木蓮花、葉ハ辛夷に似て、花ハ蓮花に似たり、冬蒼に三月に[illegible]

正月

井花水

ハ部、若水の条に出す、

千壽万歳

紀事 大和国、窪田著尾の両村に千壽万歳両座あり、太夫所司の庭に来て鼓舞す、窪田皆是也、南都西南にあり、相去ること三里ばかり、此内両流あり、則窪田皆是也、窪田太夫、著尾太夫、左部右部に准じて云ふと称す、

煎餅と繋

ハ部、天穿の条に出す、

節振

舞、節小袖 **夕節** **紀事** 京師の俗、元日より晦日に至るまで、親朝節 戚朋友互に酒食を設け饗應す是と節と云、節とハ、節供の下略なり、節小袖も准て知べし、朝夕ハ、饗應の時刻と云ふ、

生米

ハ部、春盤の条に出す、

菜三春物

芹

本朝食鑑 源順曰、水芹、一名水英、水早芹ハ水中に生じて根多く、旱芹ハ平地に生じて根少し、赤芹ハ味悪しくして用ひず、白芹ハ味美しく常用す、冬この陂沢田川に多くあり、或ハ水田水圃にもあり、蓋養して四時ともにあり、其苣節後ありて中空し、其根細く長く肥えるものハ素麪の如し、柔にして脆く、其氣亦芬芳愛す

べし、五月小さ白花と開く、

二月

生子と献ず

李必傳二月朔日、民間昔農と以て百穀瓜果の種と盛り、相問の遺とす、号して、生子と献ずとす、閭里宜く酒を釀して、句芒神と祭り、豊年と祈て、百官農書と進て、以て本と務むると示す、今と著しく、上巳と九日と三令節とす、

釋奠

上丁日 公事根源 是八年か二度二月と八月とあるとす日蝕国忌、初年祭奠とあるとは、中の丁日なるとい 続日本紀 文武天皇太宝元年二月丁巳始て釈奠を行ふ、 礼記王制 菜と釈と幣と奠

先師と礼ス、 [illegible] 大学寮 [illegible] 孔子及び十哲の影と祀る、上卿ハ少納言、文章博士、孝経、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、左傳、年廻り

浅間祭

廿二日○駿州阿部郡、浅間の祀、年中の祭祀、朝廷と摸して八十三度あり、今ハ

ふるもと講ス

各目のく存ス、ちなみとも二月廿二日の祭礼八今ニ至て厳重ス、府中捻町ハ、狂言練物ハと出ス、此日社の外ハ〻簑と高ふ、近郷のもの必ず買之、○藤文日、今式ニ浅間祭と浅間祭とて、信州とす、信州浅間の別当ニ尋るに、二月ニ祭り、四月八日始て、山の口ひらきと称して諸人参詣スとも、今式ニ信州と記せるハ誤なり、

狗脊

蘇頌本経 狗脊、苗尖く細碎、青色、高一尺以来花ありて、其茎葉貫衆ニ似て細く、其色黒、長三四寸以多く狗の脊骨の如し、

三月

青精飯

か部、寒食の条

西王母

桃の一種し、西王母の園ニ三十年ニ花咲こゝろ桃

みとゝよりと名づく、花八重ありて大きく美し、

泉涌寺開山忌

洛の東山ハ在中興の開山俊芿ら忌と修すこと、狩書原氏生て数日樹下ニ葉ッ三日と煙く會獄の害ありて、阿弥往ちてとゝまる、祥児とす、抱を帰て母ニ付ス十八年ニ落髪、建久二年四月八来、五月の初来の江陰軍ニ着ス建暦改元年帰朝、嘉禄元年十月某の日、泉涌寺ハおゝて、重閣講堂を建ス、明年の春、華嚴落成、嘉禄三年閏三月七日、右脇して逝、

善道寺忌

十四○唐年六十二ニ、法会八八日、或八九日ニ修ス、

南山悟真光明善導大師の忌日

隋の煬帝太業九年、安西ニ生ル、唐の高宗永隆二年三月十四日、迂化ス、春秋六十九歳、本邦東山禅林寺、永観堂、智恩院中の善導院、小松谷、百万遍、ホの寺院ハて、此忌と修すと、

千本念仏

未生通の北の限、舟岩の南、引接寺の閣ハ堂ニ在、 紀事 是も又融通念仏の余流ハ、毎年堂前の普賢像の揚花むらくと期とす、寺僧一枝と抜て、諸司

代に献ずれば米三石五斗とかや、癸七ケ日念仏の料とす、一説に此法事八元刑人の為にこれを修す、故に諸司代より施米あり、是追薦の為こと云へり、開基定覚上人、鐘の銘に顕然なり、定覚のこと八、遺教経の条に此処を千本とかきたれ八、笹の窟の日蔵上人、冥土に至て約すること、其為に千本の卒都婆と、舟形山に立て供養を修す、此処舟形に似て、依て名へ

仙茸至萩 子 梅

[紀事追加] 今艸花肆あるもの、花八黄ありて豆の花の如く、葉八野萩に似てやゝ長く、本草菜蔬に載せる苜蓿に似たり、但し夏秋花を付ること異なり、

す

正月 **住吉の御弓** 十三日

[紀事追加] 正月十三日住吉の御弓、其式社人正鵠に准へ、尺三寸の的を立て、立合これを射勝負を論ずるあるべし、神事なり、今日泰詣の諸人、竹馬と昆布を買て土産とす、又鰕の魚を屋煎餅とす、名物なり、各これを買ふ、

鈴子さ

す

部、鳴鳥 持の条に出ず

兼三春物 **溯蛤** 拾遺住吉の溯を見、蛤を採て、其肉を升に盛て市に売る、醋を和して是を膾とす、故に溯蛤共醋蛤ともいふ、摂州大坂の名人、専ら正月賞して食ふ、

すゞ 部、雀 の子 の条に出ず

三月 **須广の御稜** [源氏物語須广巻] やよひのつごもりなどきこえるに

巳の日、こちらぶりし大海の原へ、おはらへとて、人形を流す 源氏物語

○是八源氏、須广へ左辺の時、三月の朔日巳の日、浦辺へ舟を人形と立て、稜の具とす、稜除

李花 [事物異名] 三月花さく、草葉、五出、白色 [和漢三才図会] 葉、五出、白色

杉菜 [大和本艸] 春月先花を生ず、草の如し、嫩き時味よし、佳蔬なり、別に豆葉と生ず、杉菜と名く、杉に似て漢名いまだ詳あらず、

末黒薄 一説に春の野の焼くる跡に生ずる、墨黒の暑くして、黯黑の薄ともいふ、顕昭八末黒の暑きりとす、

雀 [和漢三才図会] 倭に蘇枋の木あり、樹皮濃赤く白色、葉薄く光あり、但し葉豆長く、三月花さく、淡紫、横に生ず、大さ麥粒ばかり、莢と結ぶ、状蘇の子に似て小く、中に細かなる子あり、春子と種ずれば生ず、然れども

蘇枋の花 京兆曰、春紫花を付く、甚細碎、共に掬とすべし、花鬼て、葉出ず、○時珍曰、海島に蘇枋国あり、其地に此木と並び故に名づく、

すゝ 形ち桃に似て、味酸と雖ども、故に酸桃と称す、

すゝ 部、孔雀 の子 の条に出ず

すゝ 部、烏 の子 の条に出ず

ゆゑに大木とまず、故に其汁物と染るも否やとをべ、雑説抄和国に生ずるハ紫荆花ん、絳色と染るとの蘇枋と此この和に生ずることゆゑにこれ、俳諧に

いつ処、多く紫荆花あらん、**菫**

蘇恭曰、菫菜ハ野に生ず人の擣る処にあるべし、菫菜の似て花ハ紫ん、和名抄 菫菜 和名須美礼、大和本艸 京都にて、相撲取と云、筑紫にて、殿の馬と云、小児其花に鑑ある処と、両花相交へかけて引く戯と、相撲の形に似たり、鄙にて相撲取と云ふ早ハ別あり、若水に紫花地丁、別号菫菜と菜、故に国俗、菫菜と

みまと誤り称ス、菫菜ハ別なり

○壺菫、つぼの部に注せり、

追加 は 正月

初鳥 初鳥三ツ四ツ〳〵ハ 初えみ〳〵り 馬明

空 初そら 千五百番哥合 今朝とりハ雪げの雲のあとてみどりふくる春の初空 通具○

初空や 鳥とのせる 牛の鞍、 嵐雪、 **初風** 虚栗 初ふきもち〳〵け の嶋の空せ 雉 嗜山、 **花の春** 花の咲春とゆふ義あり○誰人の萬 兼三春 著ていまもて花の春 芭蕉

物春風 炎の点、ゆゑ寒、 ―春の風 許六、 **春の草** 名もしつ

や春の 草荷兮、 **春の海** 松蔭や旭見ゆる 春の海 不卜、 **春の川** 花 歌

てうゝめる体、雪きえて水 く春の海 不卜、 **春の月** 山の端ちかく

まきうし体まどよむべし、 貞あり春の月

春の水 うゝ〳〵うゝ鰍うき 春の野 春の野

町、 春の水 あり春の水舟泉、 春の野 や赤丸

ハむ〳〵ろの敷 **春の日** 春の日の念仏やる

あそ也 沾徳、 き野寺ゑ尚白、 **春の**

夜 春の夜ふ誰の初 **春の雪** れまだうくそ

瀬の堂篭 曽良、 春の雪 文考、

春の山 月令博物筌 春ハ草木もさう

そて山の景色面白き事あり、 **春の**

暮 蚊ひとつふ祇らるゝ 夜えで春の暮重五、 **二月** **初虹** 月令章句 夫崔陽和

せむ婚姻序を失ふ即此氣を生ず、虹あらはる青赤

の色あり、常ふ陰雲に依て日衝に見ゆる雲あるべ

賜ひなどで、輙日と相互ふまで、日西と以て東方より見ふ、

は 正月 干蕪、干大根 冬のまの部、新千蕪、新千大根の条より迄しるす、

に 正月 年立 年の再びかへり来ることゝふ義なり、年の花 続虚栗 年の花富士ハはが

ち 正月 千々の春 虚栗 雀さもあれ願洲生こめる安の天、蒙嚢、千々の春其角、

り 二月 龍登天 格物論 龍春分にして天に登り、秋分に淵に潜む、

ぬ 正月 鬼打木 月令博物筌 大賀王の木ともいふ、門松のつげの木と年木とて、正月始に麻ゐき木をとり、末は葉をのこし、門よせうけてかくもり、鬼打拂ふ采とのふことをもて、ふの張氣ともふの義なり、兼三春物 朧夜 一説に朧月夜とをいへ、朧夜とむかりハいえあるよりいへり、青蓋按ずるに、和哥者流の説ハもっぱら、俳諧にて細ふるべし、既に作例多し、曠野 辛寄の松ハ花より朧ふく芭蕉、

る 猿蓑 鉢たゝきこゝぬ夜とともれば朧ふり 去来、

か 正月 かぐみ草 大内まそ餅の上ふ置く大根ふ、ふるり 夫木 さ紀草の中ゆ

早きうぐみ草やそ

ふるきふるもつるる乳、かくとろとれ花 初百合 吾妻百合 山

遺稿 其形も花も百合に似て花紫ふり、葉ハ車前草に

似たり、正月頃花さくゆゑに初百合ともいふ、花の時葉

ふり、因て姥百合ともいふ、方葉及び新撰六帖

ふのこゝとの花と詠まる物ハ是ふりこそ、兼三

春物 風光る 初学記 春晴日出て風吹く光風と云こゝ、ふりてのこう此詞古抄

ふこ

えぐ、**三月** 嗅茶 利茶 麁文云利茶嗅茶、俱ふ茶の香氣と嗅ぐ其気

味の善悪を辨ずるとのふ、茶人の所謂茶香服と称する

類の如し、凡茶表裏一の如きを純香とのふ、生ふるもの熟

ふるもの、こゝとを青香とのふ、火候均停ふると蘭香とのふ、

両前純具ふると真香とのふ、更ふ含香、浮香、聞香、漏香、

皆不正の氣と云云、

よ 正月 四方の春 春の気色の長りをいふ、

た 正月 玉打 きの部雜部の条見る べし、 二月 種芋 種芋や花の盛りと賣あるく 芭蕉、 三月 鷹の巣 和漢三才圖会 鷹窩ふ生ずる者ハ好て眠て木ふ巣ふ者ハ常ふ立雙ぶ人家ふ育る者と巣鷹ふハ

れ 正月 礼者 玉海集 春ごとに人ハつくぐふ礼者ゆゑ 伯貞

つ 正月 鶴の庖丁 十七日 紀事 舞楽ひまゞ始らさる前大隅高橋福年ふ交るまゝ勤む舞楽畢て後、窪高盛等の献あり、群臣まゝ〳〵と賜ふ云、舞御覧の条こゝ〳〵〳〵

ね 二月 茄子植 夏の ふの部 注〳〳〳〳、

む 三月 葷の若葉 夏の追加葷茂ぶ とゝる条ふ注ス、

く 正月 食つみ 青藍云今の俗誤て、蓬莱臺と食つゝとゝて故ふ、俳諧者流もまゝと同物と心得る者多し、むゝ〳〳食つゝと唱へ、ハ、今の重詰のごゝひ也、賀客饗食應の臭あれハ、連句ふハ、れらぞ食類の差合と緑べし、食つゝふ、ほろあらも夫婦ふ嵐雪、食つゝや山居の味とあ

ゐ 初 柳居 食つゝ、蓬莱、同物ふらぬ徴ハ 炭俵集 春の部 蓬莱ふきゝるむや伊勢の初ごゝろ 芭蕉云さ巻、頭て此句より、飾り松、箱の海老、今朝の春、ふゞ〳〳る句五章つゝ〳〳る後ふ食つゝや木曽の白ひの檜物岱水云、同物ふ〳〳ハ、蓬莱食つゝと並（出ぶ）きとゝく隔てゝるふてゝるゝ、但し木曽の白ひの檜物とハ其器とゝふゝるべし

や 正月 宿の春 遠近集 ゝる年ふ留守と つゝよ宿の春 路春、 二月 藪蕎麥 大和本草 林中ふ多く生ず、果ハ苧の葉及び蕁麻の葉ふ似ゝり、缺刻あり、莖ハ圓くして淡紅色、節毎ふ葉三つきゝ、節毎葉の上ふ一處ふ十餘花あつまり開く、花の色淡紫、小児花と呼ふ二月ゝ

花ひらく、**三月** 柳太刀 書鑑云此詞諸抄ふ載せざる、太刀云云義未詳、但し諸抄の例ふよりは桃の節句、雛、柳雛、柳鬘と次序もべきなり、柳鬘と省きて、此詞ふ替こうゝ按ずるふ諸抄ふ載せる柳鬘やの部ふ入れ省きて更ふ柳太刀と出もべき道理ふなしは全く柳鬘の書を誤るべし、さるに省くべきとふ爰ふ贅して辨ずれ今人の惑ひと解ん、例の老婆心なり

四季部類 桃の節句、雛、柳

正月 窓の春 ひや窓の春 野城、萬歳 五日

禁裡へ来ると千寿万歳とうたせの部ふ注を〇一条院の御宇、大江の定基三河守ふ任じ、其民ふ佛教傳来の因縁と教へて舞ひ、町汁 十日汁 紀支 十日の条 三河万歳の始なりとぞ、洛下の田俗今朝毎ふ麦づうら膳食と會所ふ集ひ、此月頭人一汁と設くられと汁會と称も、喫し畢く法令を讀て教ふ町中の男女此式を守る、五月九月同然云〻、舞御覧 十七日

紀事 清涼殿東の小庭ふ舞楽あり、鶴の庖丁此時ふ追加のつの部しるべし、松菜 枚荒本草 一名塩蓮、水傍下湿の地ふ生ず茎落葵ふ似て赤線縹あり、果蓮ふ以て肥壮、蓮葉ふ比べれハ亦稀疎、莖葉の間ふ青子と結び、極めて細小 中略 苗葉を採て煠き熟し水ふ浸し鹹味とさり、淘洗浄め油塩ふ調ま、〇此詞四季部類ふ〻えり、

ふ **二月** 蕗のとうとめ 蕗の佃 芽の義

みて薹の立るといまゝ〻べし、天子集 **三月** 蒲

中ゝ色蕗のとうくあゝとめ ゝ〻ぐ 道織

ま **正月** こふがき祝ふ

菊花 秋の部ふ注も、

書鑑云増山の井 若菜、条ふ云、昔ハ若菜と上の子の日ふ内藏寮並ふ内膳司より禁中ふ奉るふり、或ハ十二種供もるとあり、しかるに公事根源ふ侍り、今ハ在家七日ふ福ゝとて、こふがきと祝ひ侍ると云〻、今ハ在家ゝ〻ゝる文意をもて按ずるふ四季部類、公事の部ふ糝七種のあつものの奉るとと云〻、注〻ゝるハ誤り、

此事、公事根源及び後水尾院年中行事おうもうとも、且又糝とぞうり、當季嬉ぞうぞ、祝ふの詞とをへて可ふらんうえもひ草ゆ七日のこゝろけと出せり、和訓栞ことづき、倭名抄餳とよめり、又糝をよめり、字書ふ糝ハ粢和美也とよめり、餳糝とよ、ハ粉菜搗雜るの義米粉とよめり菜羹と和をよめり云ゝこゝづきとハ今の菜粥の事ゝ、

三月 小櫻 花うす色密ゝとして咲、鎧の小櫻成と云、物此花の色ふうとどるるゆり、○小櫻の花〳〵雨や具足親 重寛、

て 正月 毬つく 手まり奇、年の毬打ふふらくるるべし、

と 正月 三ヶ日 玉海集書初の真行草や三ヶ日 重貞、

里居 數入を里居ともいふ三の旬ふ里居ゆ或を里居をるゆど用ゝるゝん為ふ、作例とあけゝ

三月 出替 秋の部後の出替の

爰ふ贄を、類柑子 星合を中の七日の里居うれ 功徳、

二月 佐保姫鷹

追加かの部嗅茶

き 三月 きて茶 追加かの部嗅茶

ゆ 正月 遊行札切 十六日 遊行上人年中

諸人化益のゝめ、一扁と人熊野權現ゆり請ら奉ゝ遊行代々相傳六字名号の印を、正月十一日ふ押ゝとゝ入、ゝれを札切といふよや、東都淺草日輪寺ふゝ問ゝへり

ふ札切と称をる事ゆゝといふゝ、此詞四季部類ふ出、

み 正月 御代の春 題黄金目ふハゝゞ一万枝と御代の春 其角

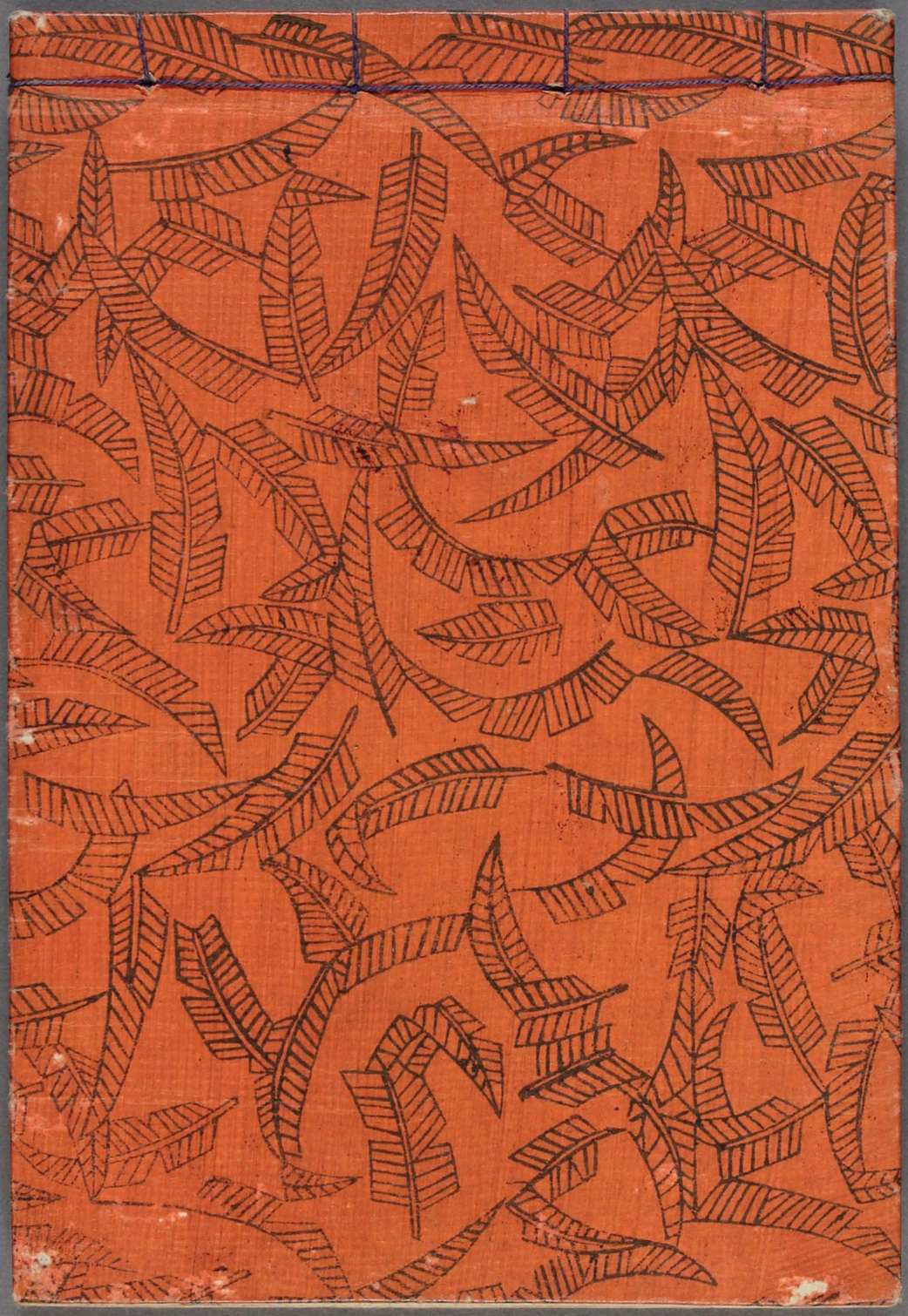
ひ 正月 蘖 つくうせと 或説ふひとゞゝとゝ、ふ草ふあるものふあゝゞ、木の切株よつ細き芽と生ずると、蘖といふと記せり、此説もうゝきあらんと思ひ〜ふ新古今曽祢好忠の寄ふあらふ田の去年の古根のふる蓬今ハ春ゞとひとゝゝえふゝ山是蓬のひとゞゝえゝ、然れハ草木とゆふ蘖の名目あり、

三月 緋櫻 小輪にして莖長くして蕚甚だ赤し

新撰六帖 夕つゝ日うゝ雲もぬぐゝ
ら高根ふ立るひ
さくらの花 光俊

正月 掩門戸 紀事京俗元日

ゆり三日ふ至りて民間門戸を
掩ふ心ハ福神を出さゞる為こと
注ふ
不及

二月 西瓜蒔

増補歳時記栞草春之部終